松葉名所和歌集第七

武守為乃

梅宮　山城　類寄

八七二四　新後さらに今花咲梅の宮柱たてこそ千世の盛をもみん
八七三四　題林神まつる卯月の榊折そへて梅の宮居にたつる御幣
八七四四　十首　名もしるしなみ木の梅の宮ぬして所にましる榊葉
八七五四　同　咲や比神もなにおふ梅の宮御代の春へにあるかうれしな

紫野　同　愛宕郡

八七六四　万一　あかねさす紫野ゆき標野ゆき野守はみすや君か袖ふる
八七七四　家集　我宿の松にひさしき藤花紫野には咲もしぬらん
八七八四　堀後諸人のかさしてかへる菜草紫野にてみとりなる哉
八七九四　同　紫野御かりばゆかしましろなるくものはかひに雪もろほねて
八八〇四　山家集　紫の色なき比の野へなれやたまつりにてかけぬ葵は
八八一四　六首　明日よりは賀茂の川波立帰り紫野にや色をそふらん
八八二四　新六　しめ野雪紫野なるかへの杜はかへすなから埋にけり
八八三四　玉吟　いとは君袖ふりほへて草草紫野雪しめのゆきみん
八八四四　夫木　春の色の紫野なるつほすみれ草のゆかりに誰か摘覧
八八五四　同　秋萩の咲そる比やうち人の紫野ゆく袖の花すり
八八六四　方　名にしおへは花匂ふなり紫野一本菊にをける初霜

梅原　同　藻塩

梅の原といふ題にて

八八七四　家集　梅の花おほはる里に鶯の冬こもりして春を待らん
八八八四　名　寄恩　ひかねこしけき梅の原ゆけは妹か袂にうつりかそする
八八九四　夫木　誰ここにあり寸成らん梅の原なと鶯のなとり鳴覧

馬咋山　同　仙覚抄云馬ヒ山ハ象潟ニナラヒタル山ナリトヨミ

八九〇四　万　九春草を馬くひ山を越来なる雁の使は宿過ぬなり　無名
八九一四　現　六春きてはいとしけみに川草の馬咋山のさかりしよく見る

梅津河　同　藻塩三島野郡

八九二四　家集　梅津川こうれよりそ流てのうれしきせはみえん水底　権少僧都為春　秀長
八九三四　名寄　桂のや河そひ柳波かけて梅津ははやく春あさにけり　為尹
八九四四　夫木　梅津河ともす鵜船のかゝり火に底のみくつもやれさりけり　宗良親王
八九五四　同　梅つ川ゐせきの水にもるなかと成にける身をまつそ恨むる　頼田王
八九六四　同　咲匂ふ梅津の河の花盛うつるかゝみの影もくもらす　忠見

向日山　山城

分ヒ山未ノ見名所集ニ今案ニ分フノ明神ノ山歌其歌ハ向日明神ト書リカヒ山ヲヒムカシ又伏見ハ勝向也但御案ニヤ

八九七四　万七　朝日日むかひの山の月だちて見ゆ遠妻をもたらん　兼昌
八九八四　玉吟　八幡山むかひの里の時鳥忍びしかたの声もかはらす　後頼
八九九四　夫木　秋風にさそはれ出る月影をむかひの山に男鹿鳴也　西行
九〇〇四　同　七そちにむかふの里のふるまちこうたくち袖となれるさま哉　隆信

人やみつしのはん

九〇一四　千首　月影の向ひの山に先みえて出るもをそし松か下陰　為家
九〇二四　続後撰　早苗とる伏見の里に雨過て向ひの山に雲そかかれる　為家

六田　河原　淀　大和　類寄

九〇三四　万七　音にきく月にはまだ見ぬ吉野河六田の淀をけふ見つるかも　人丸
九〇四四　同　九　蛙鳴むつ田の川の河柳の袖もころみにとあかぬ君かも　家隆
九〇五四　夫木　三吉野の六田の淀の川柳みとりをそくる春の岩波　隆祐

責之

恵慶　蛙へ不知　俊実

親宗王　院御門

無名

絹

後鳥羽

九〇六四 同　ふしつくる六田の淀の朝氷とくれは袖そぬれまさりける　孝善
九〇七四 同　今よりはちるもおしまし菅野河六田の淀の花のしき波　家長
九〇八四 同　柳原この下陰の吉野河むつたの淀にけふもくしつ　同
九〇九四 同　六田川岸の柳のみなれさほおしく波にたかせすす也　公朝
九一〇四 同　多くれは下風すゝし蛙なくむつ田の川の岸の青柳　基雅
九一一四 千首　遠さかる名残をみはや鬱の立六田河原の夕暮の空　為尹

村山　同　八雲御抄

九一二四 万一　大和にはむら山あれととりよろふ天のかく山のほりたち　大和　藻塩

室生

九一三四 万十二　日本のむろふのけもゝもとしけみ我君物をなしすはやまし　光俊
九一四四 新六　あかねさす色こそまへ日本の室生のけもゝ花盛かも　光俊

武庫　山川　浦　海　浦泊　摂津　仙覚抄三当国

九一五四 万三　むこの浦を漕にむ小船栗嶋をそかひに見つとゝもしき小舟　天皇 3オ
九一六四 同七　むこの河の水をはやみあかあ駒のあかくそきにぬれにけるかも　赤人
九一七四 同十五　住江の為な川にたちてみ渡せは武庫の海を出る舟人　無名
九一八四 同　むこの浦の入江の渚鳥はくくる君をはなれて恋にしぬへし　無名
九一九四 同　朝ひらき漕出てくれはむこの浦の塩干の方にたつか越すも　黒人
九二〇四 同　武庫の海のたはよくあらしいさりする蜑の釣舟浪の上にみゆ
九二一四 同十七　玉はやすむこの渡りに天伝ふ日の暮行は家をしそ思
九二二四 拾玉木葉吹むこの山風立ぬらしあしやの沖にあまのつり船
九二三四 万　代蘆の葉に霜ふりたちぬ難波潟むこの山へや色付ぬらむ　家隆
九二四四 名寄　流くる谷の岩水おなし世を渡れと遠きむこの山川　為家
九二五四 広田歌合　むこの浦をなきなる朝にみ渡せはまゆもみたれぬあはの嶋哉　後徳大寺　知家
九二六四 現六　武庫の浦や朝みつ塩の追風にあはしまかけて渡る舟人

九二七四 万　代夕されはむこの浦塩満ぬらし入江のすとり声さはく也　信実
九二八四 同　霧晴るゝな野を行ほむこか崎月をそみつる宿はなくして　家長
九二九四 千五百　むこ川に跡もとゝめぬほよ鳥くゐもゝえぬ五月雨の比　公朝
九三〇四 夫木　播磨路を漕出てみれは雲かゝるむこ山桜今さかりなり　基雅
九三一四 同　榊とるむこの山風さえくてやしろもしろく雪降りにけり　道因法師
九三二四 同　津の国にありといふなるむこ河の流てなもいはれしかな　読人不知

村松岸　伊勢　藻塩

九三三四 名寄　蟬の貝の声かと聞はむら松の岸うつ波のひゝき成けり　伊勢　藻塩

牟呂山

九三四四 名寄　桜咲むろの山風吹ぬらん一志の池にあまる白波　定円 4オ

牟良自加磯　駿河　八雲御抄并仙覚抄三当国

九三五四 万　せたゝけめむらしか磯のはなりその母をはなれて行か悲しさ　生部道丸
九三六四 堀百　蜑の子か玉藻刈にや出ぬらんむらしか磯にたつさはく也　顕仲
九三七四 名寄　駿河なるむらしの磯の波たはゝるめをからん袖はぬるとも

向岡　武蔵　類聚

九三八四 万十　出てみれはむかひの岡の本しけく咲たる花のなにすはやまし　人丸
九三九四 堀後見　渡せは向ひの岡の夏草をたかふ駒のためとかる覧　常陸
九四〇四 愚草　いかにして向ひの岡にかる草のつかのまにたに露のけみん　定家
九四一四 玉吟　この山の峯より月や出ぬらん向ひの岡に影そ移ろふ　表隆 4ウ
九四二四 夫木　もとしけき向の岡の菊のえにまとりそ青き花の下草　為実
九四三四 同　山かつのいそく朝戸もあけ侘ぬ向の岡の雪のふるきに　信実
九四四四 御集　いつのまに向の岡の小松原月もるまてに成にけるかな　後鳥羽
九四五四 同　松しけきむかひの岡の夕涼み秋よりさきに風そなれ行　同

九四六四 題林 夕つくひさすや向の岡のへにみかくれわたる露の玉篠　為家
九四七四 夫木 夏にこそはや成にけれ出て見る向の岡のもとしける迄　光俊
九四八四 鷹百 鳥さけひの声や待らむ鷹人のむかひの岡にとをみ立つゝ

武蔵野　同

九四九四 万十四 むさし野に浦へかたやきまさてにものらぬ君か名浦に出にけり　無名
九五〇四 同 武蔵野の奥きかきけし立別れいにしよひよりせこにあはなふよ　同
九五一四 万十四 恋しけは袖もふらんをむさしのゝうけらか花の色につなこめ　無名
5オ
九五二四 同 武蔵野のくさはもろむきかもかくも君かまに〳〵我はよりにしを　同
九五三四 同 我せこを跡かもいはん武蔵のゝうけらか花の時なき物を　同
九五四四 若紫巻 ねはみねと哀とそ思ふむさしのゝ露分わふる草のゆかりを
九五五四 兼輔家集 紫の一もときくに万代をむさし野にこそ頼むへらなれ　元真
九五六四 家集 武蔵野の草のゆかりに蘭若むらさきにそへてにほへる　忠見
九五七四 同 行やとるたひの宿りもむさしのゝ草結ふ夜はむつましき哉　師頼
九五八四 堀百 むさし野はまた焼なくに春くれは急もえ出る下蕨かな　河内
九五九四 同 武蔵野にことはおひなん紫のわらひは草のゆかりと思はん　基俊
九六〇四 同 旅人の行ほと遠きむさし野は草さへふかく成にける哉　仲実
九六一四 同 むさし野にわかしめゆひし若草を結ひ初つと人や知らん　家隆
5ウ
九六二四 六百 武蔵野に雉子も妻やこもるらむけふの煙の下に鳴なり　慈鎮
九六三四 拾玉 武蔵野の草はにましる早蕨をけふ紫の塵かとそみる　同
九六四四 同 なかむへし霜にかれ行むさしのゝ露のなこりにやとる月影　同
九六五四 同 むさし野の草のゆかりを尋ぬとてまつ我袖に露のこほるゝ　定家
九六六四 名寄 武蔵野は露をく袖の遠けれは月を衣にきぬ人そなき　顕昭
九六七四 同 むさし野の草のゆかりもとひかねつゝきの原の春の夕暮　後九条
九六八四 同 堀かぬる水とのみ聞武蔵野も皆五月雨の波の下草
九六九四 建保 緑なる春はひとつの草の葉も秋あらはるゝ武蔵野の原　順徳院
九七〇四 同 むさしのや草はみなからをく露のゆかりもとむる袖の秋風　行意
九七一四 同 あたならぬ色さへ袖に移りけりゆかりは露のむさしのゝ草　定衡
九七二四 同 涙さへぬれそふ袖に虫の音もみたれてしけき武蔵のゝ露　俊成女
九七三四 同 思ひやる行衛は遠き武蔵野もなかめにせはき秋霧の比　兵衛内侍
九七四四 同 かりいほのつまとふ風も寒き夜にいく夜かねなん武蔵のゝ原　家隆
6オ
九七五四 建保 武蔵野の浅ち色つく今よりや夜さむの衣雁も鳴也　知家
九七六四 同 むさし野や月影なから時雨けり尾花か上の露の下道　行意
九七七四 同 武蔵野やいつくの原に妻こめて昨日もけふも鹿の鳴覧　康光

武蔵嶺　武蔵　藻塩

九七八四 藻塩 むさしねのおみねにひさし忘行君かなかけてあをねしなくか

梅原山　近江　藻塩

九七九四 家集 春の日の光はきはもなけれ共まつ花咲は梅はらの山　俊成

無動寺

れいならぬ事侍けるに無動寺にて読侍ける

九八〇四 新古 頼みこし我ふる寺の苔の下にいつしか朽ん名こそ惜けれ　慈鎮
6ウ
九八一四 月清 つたへくる跡はつきせし岩かねのうこく事なき寺のしるしは　後京極
九八二四 同 岩か根や君かゆかりの君なくはうこかぬ寺も跡なからまし　同

席田　美濃　類字

九八三四 拾玉 さえ〳〵て雪降しけは席田のいつぬき河そ先氷ける　慈鎮
九八四四 御集 むしろ田やかねて千年のしるきかないつぬき川に鶴あそふ也　後鳥羽

九八五四 夫木雪にしく物なかりけり席田のうへの原の冬のけしきは
九八六四 同 むしろ田のいつぬき河に住鶴のもとせをかけてあそびあへるかも
九八七四 同 席田のいつぬき河に年をへて波や立らん鶴の毛衣
九八八四 同 むしろ田のいつ貫河に立浪も万代かけて田鶴と鳴なる
九八九四 千首 身をあきのさもしき忍席田に人のかさねぬ鶴の毛衣

加茂政平 誠人不知 顕昭 為家 為尹

結神宮　美濃　類字

九九〇四 名寄 まもれたゝ契結ふの神ならはけぬ思ひに我ままはさて
九九一四 家集 千年をは我ならすともゆふなすき結ふの神も祈わく覧
九九二四 同 とけやらぬ人心はつらかりてむすふの神を恨つるかな
九九三四 同 なきの葉にふかける露のはや玉を結ふの宮や光そふらん
九九四四 千首 宮ぬするふつくはあれと契をやむすふの神に手向し一覧

隆祐 後鳥羽 前内大臣 業平 家隆 後鳥羽

室八嶋　下野　類字

九九五四 堀百首 もの山に烟たえぬ炭かまをむろのやしまと思ひける哉
九九六四 同 東路の室の八嶋に思ひ立こよひそこゆる相坂の関
九九七四 拾玉 東には絶ぬ煙を立よりて室のやしまや先かすむらん
九九八四 同 夜なゝの人の思ひをおもひしれ室の八嶋の曙の空
九九九四 同 秋霧も心あらなん烟ゆへ人にしられる室の八嶋は
〇〇〇五 詠藻 思ひやれ室のやしまにしほたれて烟に馴し袖の気色を
〇〇一五 愚草 たくふへき室の八嶋をそれとたにしらぬ空の八重霞哉
〇〇二五 同 暮る夜は乏しのたく火をそれとみよ室の八嶋も都ならねは
〇〇三五 玉吟 まやへはや室の八しまの夕煙きりたつ程もみえぬ思ひに
〇〇四五 千五百昔よりたゝぬ烟のさびしきはむろのやしまの冬の夕暮
〇〇五五 夫木 夏草の露けき中のしもつけに室の八嶋の事やとはまし

加茂政平 誠人不知 顕昭 為家 為尹

昔河　陸奥　藻塩

四条 〇一一五 藻塩 いおにしてかき始めけん言の葉を昔河にそとふへかりける
元輔 〇一二五 家集 なにとしていひはしめける名成らん昔川にやことをとはまし
伊行 〇一三五 古歌 武士のいつさいるさにしをりするとや〳〵鳥のうやむやの関
検校法親王 〇一四五 同 こしやせんさてやあらむこれや此とや〳〵鳥のむや〳〵の関
為尹 〇一五五 同 むつの国思ひやるこそはるかなれとや〳〵鳥のもや〳〵の関
〇一六五 家集 すく世山なといなむやの関をしもへたて人にねをなかす覧
永縁 〇一七五 夫木 東路のとや〳〵とりの明ほのに時鳥なくむや〳〵の関
同 〇一八五 同 ふる雪につのしをりも埋れてたつきもしらぬむや〳〵の関
慈鎮 〇一九五 千首 霧ふかきとや〳〵とりの道とへは名にさへまよふむや〳〵の関

能因法師 同 俊頼 誠人不知 重家 京良親王

無耶無耶関　出羽

八雲御抄 或イムヤ関 或モヤ〳〵関

俊成 〇二〇五 千五百夕暮の一むら雲の山めくり時雨はつれは軒はもる月
定家 〇二一五 名寄 天の下とみえぬ秋そなりけるむら雲山の神のしるしに
同 〇二二五 懐中 神なひの山のけしきはつれなくて時雨ふりくる村雲の里
家隆 〇二三五 夫木 おほつかなとなりもみえす成けり霞へたつる村雲の里
雅経 〇二四五 名寄 秋の雨の名残の空は晴やらてなを村雲の山の端の月
為家

村雲山　丹波　八雲御抄

左大臣 匡房 誠人不知

村雲山　里

俊成 〇二〇五 千五百夕暮の一むら雲の山めくり時雨はつれは軒はもる月
定家 〇二一五 名寄 天の下とみえぬ秋そなりけるむら雲山の神のしるしに
同 〇二二五 懐中 神なひの山のけしきはつれなくて時雨ふりくる村雲の里
家隆 〇二三五 夫木 おほつかなとなりもみえす成けり霞へたつる村雲の里
雅経 〇二四五 名寄 秋の雨の名残の空は晴やらてなを村雲の山の端の月
為家

○二五五 同　村雲の里とろ〳〵宿かりて心と雨にぬるゝ袖かな　読人不知

結浦　但馬　藻塩

但馬の国の湯へ行人むすふの浦にてよむと

家集にあり

○二六五 名寄　立帰りとくといそけとさしてくる結の浦のかひなかりけり
○二七五 明玉　よそに聞むすふの浦に寄浪の打とけにける事そ悲しき
○二八五 藻塩　あしろ過結ふの浦の朝日影はるかに出るあまの釣舟

室泊（浦瀬戸　鳴鳴海）　播磨　類字

○二九五 丁三　室の浦の瀬戸との崎なる鳴鳴の磯とす波にぬれにけるかも
○三〇五 六帖　山の端にほてりせぬ夜は室の海にあまは日よりといへる舟人
○三一五 家集　浅ましやむろはうきつと聞しかとしつみぬる身のとまりせけり
○三二五 名寄　浪の上にすたく螢とみゆるかな遠さかり行室の友船
○三三五 同　室の浦の迫門の早船波たてゝかたほにかくる風の涼しさ
○三四五 同　室の浦の塩ひのかたの小夜千鳥なき嶋かけて せとの渡る覧
○三五五 拾玉　波路わけて今夜泊りは室のうち苫もる月の影そ嬉しき
○三六五 夫木　室の浦の瀬戸との鳴嶋なきたれとぬれにそぬる問人はなし
○三七五 同　室の浦には千船よせよ郭公迫門のさきなる松に鳴也
○三八五 同　こきいつる室のとまりの曙は雲にはなるゝ高さこの松
○三九五 同　はりまとも浦は日よりに成ぬともしはしは出し室の泊を
○四〇五 同　明ぬよりむろの泊のをひ風に梶音たかく出る船人
○四一五 同　南ふく沖のなゝろにけふも猶えそ出らぬ室の友船
○四二五 同　うきねする室の泊の浪枕よる〳〵ゆめのなかそなえ行
○四三五 夫木　君か代は真如くもせぬむろの浦に慈氏のあさひの光ますます

虫明迫門　磯浦　備前　類字

○四四五 拾玉　舟とむるむしあけの磯の松の風たか夢路にかよ通ふ覧　忠鎮
○四五五 同　虫明のうらかなしくや過ぬらん風によはりし声を恋つ　同
○四六五 月清　虫明の迫門の塩ひの明方に浪の月影遠かるかな　俊成
○四七五 同　波はくむしあけのせとの梶枕都にきかぬ夜風そ吹　同
○四八五 愚草　思ふ人あらは急かん船出して虫明のせとは猶あらくとも　定家
○四九五 千五百　ありしせの月を浪間に待侘て袖ふしかぬる虫明の迫門　公継
○五〇五 同　さひしさは虫明の迫門の塩風に夜ふかき月にしく物そなき　後鳥羽
○五一五 夫木　月をすむなれし秋は夢なれや虫明の磯の夜はの松風　鎌倉右大臣
○五二五 同　契ぬとそのあふ瀬を頼むかな虫明せとの松の嵐に　後鳥羽
○五三五 同　都にていかにかたらん むしあけのせとの入江の松の絶間を　定家
○五四五 同　むしあけの迫門の塩あひ漕くれは雲にやくる淡路嶋山　為家
○五五五 御集　月影に虫明せとを漕出れは八十嶋かけてもくる鹿の音　後鳥羽
○五六五 同　船とむる虫明の秋の初風にわすれかたくもすめる月哉　同
○五七五 方与　雲かくるむしあけの迫門の松風にたえぬる秋そ棹鹿の声
○五八五 家集　たのもしなむさけの瀬戸をいる程は立白波もよしとそ思　俊頼

室野　備後　名寄ニアリ

○五九五 名寄　旅ねして月はかりこそともの浦の磯の室野に明ぬ此よは

武倍山　同　藻塩

○六〇五 家集　鳥の音も涙もよほす心もして むへこそ袖はかはさりけれ　俊頼
○六一五 玉　吟吹かからにむへ山風もしほる也今は嵐の袖をうらみて　家隆
○六二五 新六　秋ふかみむへ山人のあさ衣打たゆむへき風の音かは　衣笠

室津見　周防　名寄で藻塩三全戸当国

むろつみと云所を出てかまとといふ泊をすき
てまかるとてよめる

○六三五 家集室津見やかまとを過る船なれは物を思ひにかれてそ行　俊類

牟婁郡　海　紀伊

○六四五 万三 きの国のむろの海へに千年にもさはる事なく万代に　無名
○六五五 六帖 紀の国のむろのはやわせ出すともしめをはへよもろとしるかね　家持
○六六五 玉葉 待侘ぬつは炎にきの国やむろの郡は春なれとも　熊野権現
○六七五 大和物語 紀の国のむろの郡に行人は風の寒さも思ひしられし　
○六八五 同 遥しきの国のむろのこほりに行なから君とふすまのなきそ悲しき　女房頭

虫明松　同　藻塩

○六九五 詠藻 やよいに虫明の松の風に又はるかに鹿の声をくる色
○七〇五 愚草 むしあけのまつとしらせは袖の上にしほりしまさる波の月かけ
○七一五 土左百 こきはなれ行月影も哀なる虫明の松の風の音かな
○七二五 大木何 なく心そとまるそれとみて潜はなれ行虫明の松
○七三五 同 虫明の松に秋風吹すきて泪もとめぬ波の音かな
○七四五 家集 虫明の松ふく風や寒からん冬の夜ふかく千鳥鳴也

室戸　土佐　類聚

土佐の国室戸といふ所にて

○七五五 新勅法性 室戸といへと我住はうゐの波風よせぬ日そなき
○七六五 現 六室戸より南の岸につたひける人の跡とふ波の上かな

宗像山　筑前　和名三当国　宗像郡

○七七五 名寄 つくしなるむなかた山の西にすむおきなと君と我もこそいへ　11オ

宇治　河　渡　山里　橋　山城　宇治郡

○七八五 万七 宇治川は淀瀬なからし網代人舟よる声は遠近きこゆ　無名
○七九五 同 うち河に生る菅藻を川早みとして来にけりつとにせましを　同
○八〇五 同 うち人のたとへ網代我なれは今は君をそこつみこすす共　同
○八一五 同 宇治河を舟渡せよとはへとも聞えさるらし桃の音もせす　同
○八二五 同 ちはや人宇治川波を清しかも旅行人の立かてにする　同
○八三五 同十一 千早人うちの渡りのはやき瀬にあはすあり共後も我妻　人丸
○八四五 同 武士の八十うち川の早き瀬に立あへぬ恋も我はするかも　同
○八五五 橋姫巻 跡たえて心すむとはなけれとも世をうち山に宿をこそかれ
○八六五 同 さし帰うちの河長朝夕のしつや袖をくたしはつらん　俊成　11ウ
○八七五 椎本巻 をちこちの汀に波はへたつとも猶吹かよへうちの川風　定家
○八八五 角(さこ)絶巻 絶せしのわか頼みにや宇治橋のはるけき中を待渡るへき　俊成女
○八九五 早蕨巻 有ふれはうれしき世にもあひけるを身をうち河になけてましかは　俊成
○九〇五 浮舟巻 宇治橋の長き契はくちせしをあやふむかたに心さすなな　同
○九一五 同 絶間のみ世にはあやうき宇治橋を朽せぬ物と猶頼めとや　定家
○九二五 同 里の名を我身にしれは山城のうちの渡りそいとゝ住うき
○九三五 堀百 河霧の都のたつみふかけれはそこともみえぬうちの山里　臣房
○九四五 同 山風に木葉ふりしく宇治河の網代はひをのよる所かな　基俊
○九五五 同 神無月うちの網代のひをよりも年のよるこそ哀せけれ　永縁
○九六五 同 波をふむ心ちこそすれ川霧の晴間も見えす立るうちはし　師時
○九七五 六百 いさやさは君にあはすは渡らしと身をうち橋に書付てみん　頼昭
○九八五 六百 恋渡る夜はのさむしろ波ひけてやくや待けん宇治の橋姫　女房　12オ

12ウ　13オ

○九九五　同　いにしへのうちの橋守身をつまは年ふる恋を哀ともみよ　衣笠
○〇〇五　山家集五月雨に水増るしらも橋やくもてにかゝる波のしら糸　定家
○〇一五　拾玉　年をへてせゝの網代にるひをこ哀とやみるうちのはし姫　為家
○〇二五　同　あしろ守賤の心もさえぬらん宇治の河風波に宿りて
○〇三五　同　夜もすがら我こそはみれ飛螢うちの小河の森梢を
○〇四五　同　此寺のむかしの跡を思ふにも心すみぬる宇治の山かけ
○〇五五　詠藻身をよせん方こそなけれ宇治河の網代をみてや日を送らまし
○〇六五　同　年ふともうちの橋守我ならは哀と思ふ人もあらまし
○〇七五　同　水上に千とせすめとや定めけんやそうち河のたえぬ流は
○〇八五　同　絶すすむやそうち川の網代木にくゝる紅葉の錦かく覧
○九九五　名寄　五月雨は伏見の田井に水こえて座まてつくうちの川波
一〇〇五　同　なかめやる宇治の河瀬の水車とゝまはにこそ君はかけしか
一〇一五　同　宇治川の網代のひをの此比はあみた仏にまるとゝやきけ
一〇二五　新六　村雨に散や過なん山しろの宇治の都の秋萩の花
一〇三五　月清　明渡る山の梢はのゝと霞そかほる宇治の春風

浮田杜　山城　類字

一〇四五　万十一　かくしてや猫やゝみなん大荒木浮田の杜のしめなしなくに
一〇五五　六百　朽はつる袖のためしとなりぬとや人を浮田の杜のしめ縄
一〇六五　拾玉　春も夏を思ふことある身にそしむ心浮田の森の秋風
一〇七五　愚華　我中は浮田のみしめかけて幾度くちぬ杜の下葉も
一〇八五　同　君はひけ身こそ浮田の杜の注連たゝすもにたのむ心を
一〇九五　家集　ことはん声もおしまぬ郭公なにか浮田の杜の夜毎に
一一〇五　玉　吟なを頼みそ浮田の杜に祈るとも身を埋木の朽や果なん
一一一五　夫木　はのめかすす浮田の杜の時鳥思ひしつみて明しつる哉

寂蓮　一一二五　同　いつまてかうき田の森の椎柴のしゐても人を恋渡るへき
西行　一一三五　同　大あらきの浮田の杜のうす紅葉わつ〳〵露や色を染覧
慈鎮　一一四五　藤資　さても猫かけてかひなき手向かな人は浮田の杜のしめ縄

内野　山城　類字

同　一一五五　新後拾　九重の内野の雪に跡つけて香に千世の道をみるかな　左少将
左大将　一一六五　新六　いかゝせん内野の芝生年をへてあらぬつくりにせはく成世を　俊成
俊成　一一七五　千首　小車の輪立はかりて今も又内野の芝のしけまさる覧　同
同　一一八五　夫木　をくら山夕いとさて出つれとうちの野は暮はてにけり　同
同

瓜生山　坂里　野沢　同　類字

隆信　13ウ
中務　一一九五　名寄　なに高くなりはしめぬる瓜生坂霧のみたてはみえすも有哉　恵慶
実方　一一〇五　同　うりふ山朝たつ雉の待もりに露けきめをもみつるけふ哉
知足院内大臣　一一一五　十五百　山城のこまの瓜生の世中やならしはは子人のつれなき
後京極　一一二五　家集　なにはゝへとなれるもみえす瓜生坂春の霞のたてる成へし
無名　一一三五　家集　雲の立うりふの里のもみなへしくもなし色はくひそわつらふ
一一四五　同　瓜生野の沢にすみぬるをし鳥は雲ゐに通ふ心あるらし

志賀の山越に紅葉のかけに鹿

慈鎮　一一五五　家集　うりふ山もみちの中に鳴鹿の声はふかくも聞えける哉　元真
家隆　一一六五　夫木　今たにもひく人あれや山城のこまのうりふにしける下草　知家
定家　一一七五　同　外よりも立やそふらん秋霧のうりふの坂にくゝるも有哉　読人不知
同　一一八五　同　君か代の数にとりをくされ石の瓜生の山とまつなれる哉　同
家隆　14オ
俊頼　15オ

太秦　山城

れいなとてうつまさにこもり侍けるに心ほそ

くゐほえけれは

一三九五 新古 かくしつゝ夕の雲となりもせは哀かけても誰か忍はん

一四〇五 うつまさや六時の鐘の声きけは罪もほろふる心ちこそすれ

此歌あるなりとき上人の読給ひけりとなん

宇田　氷室　野　同　類字　篤野郡

一四一五 名寄 涼しさはほかにもとはす山城のうたの氷室の槙の下風

一四二五 千首 いつれまつけふは備へん松か崎うたのに近き氷室なれ共

上野　同　或云西大原野ニ在之云ヒ但北大原ニ所在上野ニ云所在之如何

一四三五 名寄 ものつかし過かてにすゝ多大原の上野の萩にすかる鳴なり

牛尾　山　同　藻塩

一四四五 堀百 穎高きうしおの山に入人は柴車にてくたる成けり

売間清水　大和　藻塩

一四五五 建保 たつの市うるまの清水底澄て人の心のくまも残らす

一四六五 散木 辰の市売間の清水涼しくてけふはかゝめる心ち社すれ

一四七五 散木 辰の市や行かふ人も暮ゆけはうるまのしみつ影もとめす

鶯滝　同　藻塩

一四八五 散木 三笠山春を音にてしらせけり氷をたく鶯の滝

浮雲宮　大和

一四九五 春雨抄 ひたちよりかせきに素て春日なる三笠の山に浮雲の宮

仮寝橋　同　八雲御抄

一五〇五 散木 君こふる涙の川の絶せねはなけきそ渡るうたゐの橋

一五一五 同 橋の名を何うたゐと聞人のゆくは夢路か現なかとに

打廻里　同　仙覚抄ニ当国

一五二五 万 四 衣手を打ほの里にある我をしらてそ人はまてとこすける

一五三五 名寄 手にはなる子おしうちはの里人は夏の半の月やみる覧

一五四五 春雨抄 ふたつなき月とはいはし諸人のならすうちはの里の卯花

鶯山　同　藻塩

一五五五 懐中 我宿の花園にまた音せぬは鶯山を出ぬ成けり

一五六五 散木 くものみはたにの心も夕とてかへるやよひの鶯の山

宇陀野　大野　同　藻塩云宇陀郡

一五七五 万 七 大和のやうたのまはにのさにつるとこものか人の我をこなさん

一五八五 同 二 毛衣を春冬設て御幸せしうたの大野はおもほえんかも

一五九五 名寄 うたの野の秋萩しのき鳴鹿のつねにこふらく我にまさしむ

一六〇五 同 狩くすうたのかりはの帰るさに雪より出る山のはの月

一六一五 万 代咲にけり宇田の大野の小萩原妻とふ鹿も今や鳴覧

一六二五 同 草もなみうたの焼野に住雉の何にかくれて恋を忍はん

一六三五 現 六 うたの野に柴かるおのこ心せよ御狩の鳥立あせもこそすれ

一六四五 堀百 やかたおのしらふの鷹を手にすへてうたの鳥立を狩暮しつる

一六五五 散木 うたの野やかれしはかくれふすす鳥のとゐ立はかり降霰哉

一六六五 玉 討こぬくにみせはやうたの御狩はのうす雪吉今朝の気色を

内乃大野　大和　八雲御抄

一六七五 万 一 玉きはる内の大野に馬なへてあさふますらん其草ふけ野

内侍　周防　惠慶

仙覚　仲実　顕季　康光　俊頼　知家　西行　琳聖

為尹　為実　性女　郎　後九条　無名　食人等　猿丸　公雅　行意　長方　明法師　顕仲　行家　実時　十重

16オ　15ウ　16ウ　17オ

一六八五　夫木　霜さやく内の大野の冬枯にあさふま色行駒なつむ也　行家

畝火山　橿原宮　同　八雲御抄

一六九五　万一　高山はうねびをしと耳無とあびあそびき神代より　衣笠
一七〇五　同　玉たすきうねびの山のかし原の聖の御代にあれましく　為家
一七一五　同　七　思ひあまりいとも寸へなみ玉たすき畝火の山に我しめ結ふ　為尹
一七二五　同　三　玉たすきうねびの山に鳴鳥の音も聞えすなまほこの道
一七三五　同　せかし原のうねびの宮に宮柱ふとしきたてて天の下
一七四五　六　拓雲の上に雁を鳴なる畝火山御垣の原に紅葉すらしも　知家
一七五五　家集　大空に雁を啼なるうねび山みかきか原に紅葉しぬとか　定家
一七六五　現六　秋かけて露やはそめる玉たすき畝火の山の峯のかし原　鞍原
一七七五　夫木　うねび山嶺の紅葉も色付てまてと音せぬ雁金の声　為家
一七八五　同　春かけて雪はふれとも玉たすきうねびの山に鶯そなく　鎌倉

宇治間山　同　仙覚抄三首

一七九五　万一　うちま山朝風寒し旅にして衣かすへき妹もあらなくに　中大兄
一八〇五　新六　白妙の衣手寒しうちま山朝風吹て秋は来にけり　人丸
一八一五　新十　うちま山今朝越ゆけは旅人の衣手寒し雪は降つゝ　無名

占手山　同　藻塩

一八二五　名寄　ふく風にすさびやすらん神なびのうしての山の嶺の紅葉ゝ　人丸

鶯関　河内　藻塩

一八三五　明　玉我思ふ心もつきぬ行春をさてもとめようくひする関　大伴家持

上野　和泉

一八四五　名寄　雨はれて朝吹風にいつみなる上野の萩はもりや過なん　行家

後山　摂津

一八五五　夫木　月出るうしろの山は雲晴て須磨のいまりにかへる浦風　俣皇子
一八六五　千首　とふ人の思ひよりしと紫の庵うしろの山に道つけてけり　人丸

浦初嶋　同　類字　紀伊ノ有同名

一八七五　新六　漕出る霧のたえまに見渡はけさめつらしき浦の初嶋　大伴家持
一八八五　愚草　尋ぬともあひみん物か春きてはふかき霞の浦の初しま　俣皇子
一八九五　夫木　さよ千鳥浦の初嶋行かへり有明の月の空に鳴也　家持
一九〇五　同　浪かけぬ松の梢も白妙にふりつむ雪のうらのはつ嶋　高遠
一九一五　同　夢の中に行てや見まもかへすてふ衣の衣をうらの初嶋　公朝

内外宮　伊勢

一九二五　名寄　代のためとたてしうちとの宮柱高き神もの山はうこかす　九条
一九三五　同　神風やたまくしのはを振かさし内外の宮に君をこそ祈れ　俊恵
一九四五　同　榊もて八のしつまふ水なくし君をそ祈るうちの宮人　延成
一九五五　同　天照や内外の宮の憂なくはくゝみ守る御世は万代　為家
一九六五　十五首　神風や内外の宮に祈をきてかたゝ君か千代は頼まそ　兼泉
一九七五　同　ひまもなく内外の宮に行通ふ心は君か万代のため　越前
一九八五　夫木　はた薄おはなかりふき神風やうちとの宮は万代までに　鎌倉右大臣

浮嶋山　伊勢　藻塩

一九九五　名寄　松に吹池の浦風渡るらん波にたよふうき嶋の山　寂阿

宇治山　同　和名伊勢国度会郡

二〇〇五 名寄これも又都のたつみうちの山やまこそかはれしかは住けり

菟田　同　名寄三十巻

二〇一五 名寄明ほのゝうたのくろより立鴫のはねかく音や方代の歌

打見　尾張　藻塩

有度浜　波　駿河　類字

二〇二五 名寄海ちかき浦には松の音きこて浪そうつみの奥つ塩風

二〇三五 六帖千早振うとの渡りの早き世にあはす有矣後も我つま

二〇四五 新六うと浜のうとかゝへくもなき人の間ぬはすかうらめしき哉

二〇五五 家集有度浜のうときにはあらす君にわかみさらん程を兼て習ふそ

二〇六五 業盛同 あやしきはするかのかみといひしよりなとうと浜のうとく成覧

二〇七五 同 うと浜の疎きにはあらす田子の浦の恋しからむをかねて習ふそ

二〇八五 玉吟有度浜のあまの羽衣春もきて今も霞の袖やふる覧

二〇九五 夫木人しれす思ひするかのうと浜にあそふ千鳥の声のはかなさ

二一〇五 同 あふ事はいやうと浜になく網の今ひとめだにみるよしも哉

二一一五 夫木あだ名たつ波の心もうと浜のうとましなから又かへれとや

二一二五 千首かけて今思ひも出ようと浜の沖のかたほの夕暮の空

浮嶋原　駿河　類字

二一三五 山家集いつとなき思ひはふしの畑にておきふす床や浮嶋か原

二一四五 拾玉ことのはをみれは心も浮嶋のはしたつましといふはまことか

二一五五 建保吹くゝす富士の山風さえ来らし霜枯はつる浮嶋か原

二一六五 愚草ふしのねにめなれし雪の積来てをのれ時しる浮嶋かはら

長明

二一七五 玉吟五月雨は富士の高根も雲ともて浪に成行うき嶋か原

二一八五 同 足柄の関路晴行夕日影みそれにくもる浮嶋か原

二一九五 夫木いくしほかみとりはそむる海へなるなひく柳の浮嶋か原

二二〇五 同 恋すれは浜の海にたよひて心は常にうき嶋かはら

二二一五 同 時しらぬ山は雪けの雲なから有明の月の浮嶋の原

二二二五 同 富士の山高根の風や通ふらん今朝雪白し浮嶋の原

二二三五 同 足柄の山うち越る夕暮のなみの麓や浮嶋か原

二二四五 建保 ふりまかふ波に空はかきくらす雪けの雲の浮嶋の原

二二五五 同 浮嶋となかめしかとも東路や雪の下なる松の村立

二二六五 同 波のうへにむらかゝる白玉や雪に沈める浮嶋の原

二二七五 同 さよちとり声遠さかる波の上にはるかに月の浮嶋の原

二二八五 同 雲の波尾花の浪のはてもなし霜枯わたる浮嶋の原

二二九五 同 うちしくれ更行空の月影はこほらぬ波に浮嶋の原

二三〇五 夫木浮嶋の原の浦波はる〳〵とはなれすきくるふしのしは山

二三一五 同 旅人の道ゆきくらす光とやさはに螢の浮嶋かはら

二三二五 同 かけしつむふしの高ねは下にみえて波のゆるけは浮嶋か原

二三三五 同 東路やかれ野の薄風分て袖に浪こす浮嶋か原

二三四五 新業 降雪のつもるにそしる浮嶋の浪にも松のぬれぬ物とは

宇津山　社　駿河　類字

二三五五 六百番うつの山こえし昔の跡ふりてつたの枯はに秋風そ吹

二三六五 同 うつの山夕越くれはみそれふり袖ほしかねつ哀此たひ

二三七五 愚草うつの山わか行さきも程遠き篤の若葉に春雨そふる

二三八五 同 宇津の山うつるはかりの頼の色は分て時雨や思ひそめけん

二三九五 玉吟都思ふ心もたえすうつの山梢のあらしとこのした露

家隆
同
顕朝
源仲正 順徳院 20ウ
行意
経通
俊成女
矢衛 内侍
忠定
知家
行家
康光
為家
安嘉門院四条
他阿上人 21オ
業清
宗良親王
女房
顕昭
定家
同
家隆

家隆
長明
俊頼 19ウ
人丸
光俊
業盛
読人不知
待賢門院安芸 20オ
為家
為尹
西行
慈鎮
範宗
定家

二四〇五　同　うつの山道ゆきふりの白雲にたかことつての雁の玉章　同
二四一五　名寄東路や春の行ゑを今宵より夢にも告ようつの山ふみ　寂蓮
二四二五　拾玉　都やもふに心に身こそもかひぬれ越て月みるうつの山めは　慈鎮
二四三五　同　色ふかき篤ほふ跡の露しけみ心ほそさほうつの山道　同
二四四五　同　契をくけふのうつもうつの山やまち絶はうたぬの夢　同
二四五五　同　詠めつる空ゆく月の行末に思ひも出ようつの山寺　同
二四六五　同　宇津の山契りし月も出ぬれは昔に越て哀をそしる　同
二四七五　名寄昔にきくうつの社のうつゝにも夢にも見えぬ人の恋しき　同
二四八五　月清猫かよへうつの山へのうつゝには絶にし中の夢ち計を　同
二四九五　夫木忘すは都の夢やをくるらん月は雲ねをうつの山越　同
二五〇五　御集古郷にまてと告こせうつの山都へかよふ有明の月　同
二五一五　兼塩するかなるうつの山へに散花よ夢の中にもたれおしめとて　寂蓮
二五二五　同　うつの山さゝそはかねてきゝしかと霞を分る篤の細道　慈鎮
二五三五　同　をしなへてこのめも春のうつの山篤の青葉に道絶にけり　同
二五四五　同　みるとなき夢より霞む春の月うつゝもたとるうつの山みち　同
二五五五　建保　俺つゝは夢ゝとあらめ散花のうつゝもつらきうつの山越　同
二五六五　同　宇津の山篤のわか葉の下にたに道あるみよを類ゝ行哉　同
二五七五　同　たひ人の霞分行うつの山うつる日数に春そすくなき　同
二五八五　同　はしはねと袂にかるき雪そふる花もる比のうつの山道　同

宇奈比　武蔵　後塩二当国

二五九五　百十四　夏を引うなひをさして飛鳥のいたらんとよとあやしたはへし　海上潟
宇麻具多　上総　百葉上総歌中

二六〇五　百十四　うまくたのねろのさゝ葉の露霜のぬれてわきなはこふはそも　同
二六一五　同　うまくたのねろにかくりぬかくたにもくにのとほは詠めほりせん　同

二六二五　百十一　夏麻引うなかみかたの沖つ洲に鳥はすたけと君は音もせす　海上潟　同　八雲御抄并仙覚抄二当国
二六三五　同十四　夏を引うなかみ潟の興つすに舟はとめんさ夜更にけり　同
二六四五　堀後　夏を引うなかみ山の椎柴にかし鳥鳴つ夕あさりして　俊頼
二六五五　新六見渡せは玉藻はかりて夏を引うなかみ潟に塩やひぬ覽　行実
二六六五　夫木あいさゐる海上潟をみ渡せは霞にうかふしたのうき嶋　頼政
二六七五　同　人心うなかみ潟の興つ鳥しほひのゆたにねをや鳴覽　後条
二六八五　同　杏にもきにける程そしくれぬるうなかみ潟を袂しに見て　光俊
二六九五　同　浮ねするうなかみ潟のおきつすにたつそ鳴なる夜や更ぬらん　知家
二七〇五　千首　小舟漕うなかみ潟の朝ほらけ興あり金浪に鳴也　為尹

落橋　近江

東三条院石山にまうでておはしましけるに
秋のつくる日人〻うきはしといふ所にまゐりて
かへりかてにして歌よみ侍けるに

二七一五　新拾　君かゝ代に千度あふへき秋なれとけふの暮をは惜みかねつも　行成

打出浜　近江　類字

二七二五　夫木集　もろともに打いての浜に立波の帰りんほとを思ひそやれ
二七三五　同　逝し世の人のうち出の浜といふ事は涙のさきに立名せけり
二七四五　堀後　色〻の袖もかはるか唐衣うちての浜の波なきよ芝　兼昌
二七五五　拾玉　春の浪打出の浜のはま風に花ゝく山そしかの山越　慈鎮
二七六五　名寄　駒とめて打出の浜をみ渡せは朝日晴るしかの浦なゝ　顕昭
二七七五　夫木　駒なへて打出の浜の汀より水にかさる雪のさゝ浪　慶融
二七八五　同　しら波のうち出の浜の秋風にしかのはつねをそへて聞哉　能宣

二七九五 同　関こえて打いての浜東雲に跡よりをくる鳥のこゑ哉
二八〇五 同　白波の打出の浜の秋霧のたえす物思ふ鳴鳥そ鳴
二八一五 草庵塩やかぬ浦に烟はたえすとも思ひありとや打出の浜
二八二五 同　駒なへて打出の浜の真砂地に待程をそし鳴の浦冊
二八三五 千首　これや又勢田にもかさる道ならん今打出の浜のうき波

宇婦河　同

二八四五 六帖　岩滝にいそさへとよむうふ川のあかたかたひそ我思はなくに

宇祢野　同　類字

二八五五 良玉　幾秋かつれなき妻をうねの野にあふみちしして鹿の鳴とん
二八六五 玉吟　たつの鳴冬の荒田のうねの野に一村薄一夜宿かせ
二八七五 同　旅人は今かは立らんうねの野の有明の月にたつそ鳴なる
二八八五 新業　うねの野にたつの一声鳴別又もあふみと頼めてそ行
二八九五 千首　明ぬより手向にとりつあさ畠うねのいもの霧も残らす

浮寝原　近江　名寄ニ近江歌

二九〇五 夫木　相坂の関をほしらそ人心うきねの原になとまとふ覧

守留間　美濃　類字

二九一五 後拾　東路にこもうるまといふ事は行かふ人のあれは成けり

恨山　信濃　八雲御抄

二九二五 夫木　尋はや心の末はしらすとも人をうらみの山のかよひち
二九三五 同　わきておる人のためとや白雪のうらみの山に咲る梅かえ
二九四五 同　たちぬはぬ錦とそみるから衣恨の山の秋の紅葉は
二九五五 同　おほつかなつれ恨の山なとんみな紅にみゆる紅葉ゝ

碓氷山　坂　上野　勅撰名所集ニ当国碓氷郡

二九六五 万十四日の暮にうすひの山を越る日はせなのか袖もさやにふらしも
二九七五 同　せ　ひなくもりうすひの坂を越したに妹か恋しく忘しえぬかも

浮嶋　神　陸奥　類字

二九八五 玉葉　うき嶋を漕はなれても行方やいつく泊としらすもある哉
二九九五 家集　いさやはた耳の浮嶋に泊なんしつみつゝのみよをふれはうし
三〇〇五 同　白波のうちおとろかすうき嶋に立る松たにねこそわふなれ
三〇一五 同　浮嶋と名にきくれと浪の上に所もさすせをそへける
三〇二五 同　沖つ浪よせはよせなん浮嶋に年ふる松をこなかはんん
三〇三五 同　頼まれぬ心かちにやうき嶋の立寄波のとまらさるらん
三〇四五 同　うき事も聞えぬ物を浮嶋は所たかへの名にそ有けれ
三〇五五 玉吟　興の風たゆたふ雲とはらふ夜は月の氷に浮嶋のまつ
三〇六五 夫木　浮嶋の松のみとりをみ渡せは千年の春を霞初ける
三〇七五 同　明渡る沖つ浪間にねをたえて霞に宿る浮嶋の松
三〇八五 同　遠さかる昔の跡を尋ても身を浮嶋に鳴千鳥哉
三〇九五 同　祈つ猶こそたのめ陸奥にしつめ給ふな浮嶋の神
三一〇五 同　浮嶋の松の緑を見渡せははるか末も紅葉しにけり
三一一五 同　わた一海の底にねさゝぬ浮嶋は竜のせなかにつめるもりかも

卯花山　里　越中　類字

三一二五 万十　かくはかり雨のふらくに郭公うの花山になをか鳴らん
三一三五 同十七　みゝ渡せは卯の花山の時鳥音のみし鳴ゆ朝霧に
三一四五 拾玉　よそもあまり衣はかりをぬきかへて心はおなし卯花の里
三一五五 名寄　夏の夜は入ても月の残りけり卯花山を西に詠めて
三一六五 同　日影さす卯花山のをみ衣誰ぬきかけて神まつるらん

為相 23ウ　無名
高遠　池田御子息前
頓阿　貞恒
同　伊勢
為尹　能宣
貫之　忠見
同　同
忠兼　信明
家隆　家隆 25オ
同　祐挙
読人不知 24オ　長明
為尹　良孝
仲業　為仲
重之　元輔
能宣
為実　無名
後九条関白一条清輔 24ウ　歌人持伴
後鳥羽　隆信
小侍従 25ウ

三一七五　月清　忍び音を色は有けり時鳥卯花山の露にしほれて　永縁
三一八五　同　詠めつる月より月は出にけり卯花山の夕暮の空　業昌
三一九五　千五百　咲ぬはまたき有明の光哉うの花山の暁のかけ　西行
三二〇五　夫木　をのれのみさやかになるる時鳥卯花山の朧月夜に　同
三二一五　同　郭公卯花山のあるして空にしられぬ月に鳴也　慈鎮
三二二五　千首　入はてぬ月の影をや残すらむ卯花山の在明の空　為家
三二三五　倉雨抄　明ぬとも猫かけ残せ白妙の卯花山のみしか夜の月　定家

鵜坂河　杜　同　八雲御抄并仙覚抄一当国

三二四五　万十七　うす坂河渡る瀬おほみ此あか馬のあかきの水にぬれにけり　後鳥羽
三二五五　堀百うさか川やそともの御簾火にまかふはさよの螢也けり　後鳥羽
三二六五　現六　みるまさに人の忍はう坂河渡る瀬まもいかる頼まん　後鳥羽
三二七五　象集　いかにせんう坂の杜に身はすとも君かしもとの数ならぬみを　後鳥羽

宇奈比川　越中　八雲御抄

三二八五　万十七　うなひ河清き瀬毎にうかはたちかゆきかく行みつれとも　同

諏訪村　丹波　藻塩

三二九五　名寄　うたなての村にたひ人まとゐして治れる世の声を聞哉　喜多院

浦嶋　丹後　類字

三三〇五　万九　水の江のうし嶋の子か經つり鯛釣かねて七日まて　為尹
三三一五　長歌　賢木巻　なかめかるあまの栖とみるからにまつしほたる松か浦しま　宗良親王
三三二五　同　有し世のなこりたになき浦嶋に立寄波のつしき哉
三三三五　小大君　我やあけし浦嶋の子か玉匣むすひし袖の空にみえねは
三三四五　堀百うし嶋の箱ならねとも炎かまは年の明るをくゆる成けり　匡房

三三五五　同　ありし夜や浦嶋か子の箱なとん明にし日より逢事のなき　後鳥羽極
三三六五　同　後くゐなゆへ明て悔しきつまと我浦嶋か子の箱なしなくに　同
三三七五　山象集　郭公きかて過ぬる夏の夜の浦嶋の子はまこと成けり　通具
三三八五　同　いひ捨て後の行方を思ひはてさてさはいかに浦嶋の箱　但馬
三三九五　拾玉集　我は更にあく共くやしかし浦嶋か子の箱にもあらねは　喜多院
三四〇五　新六　よるはさて明る悲しきはこ嶋のいつ浦嶋に通ひ初けん　為尹
三四一五　愚草　あくるより古郷遠き旅枕心そやかてうし嶋のはこ　宗良親王
三四二五　御集　眺れは松の木陰にほの〳〵と明るもつしき浦嶋の月　象持
三四三五　夫木　うし嶋を波も明くれうせ貝あまの箱のみむなしと思に　顕仲
三四四五　同　後つゐに命にけり水の江の浦嶋かの家路をそ見る　丹後　夫木当国　26オ
三四五五　夫木　うちの海の釣する蜑の舟に乗てのりにし心常に忘す　後頼

内外浜　同　藻塩

三四六五　名寄　よさの海のうちとの浜にうしさひて世をうみ渡る天のはし立　象持

打歌山　石見　八雲御抄

三四七五　万二　石見の海うつたの山の木の間より我ふる袖を妹みつらんか　匡房
三四八五　現六　澄月の光をよする浦波のうつたの山に風ふくらん　匡房
三四九五　散木　風をいたみ打歌の山に散花やふりけん袖の名残成覧　無名

浮沼池　同　類字

三五〇五　万七　君がためうきぬの池の菱とると我そめし袖ぬれにけるかも　人丸
三五一五　続後身はかくて浮ぬの池のあやめ草引人もなきねこそすせぬ　隆祐
三五二五　六百　諸声にいたくな鳴そさもこそはうきぬの池の蛙なりとも　俊成
三五三五　新六　あはれ世を浮沼の池といひ立てみつからさてそ出そわつらふ　人丸　26ウ

三五四五　同　後鳥羽　知家　27ウ
三五五五　同　後鳥羽　兼宗
三五六五　同　後鳥羽　行家
三五七五　同　後鳥羽　読人不知　27オ

三五四五 夫木水浅き鳥のうきぬの池よりも落たる身こそかくれかねたれ　後光柔

歌嶋　播磨　藻塩

三五五五 家集うたの嶋のさしのしたには音信く舟にはのりの声を聞ゆる　重光

卯名手杜　美作　仙覚抄ニ当国

三五六五 百七真鳥すむうなての杜の菅のねをきぬにかき付せんこも哉　公朝

三五七五 同十二 思はぬを思ふとはさまとり住うなての森神し知覧　知家

三五八五 堀百都出てくかといるに真鳥住うなての杜にこまひきぬらん

三五九五 夫木神のますうなての杜を朝ゆけは声を手向て千鳥鳴せ

三六〇五 夫木夏そ引うなての杜の村雨に下葉残るぬ草の夕露

牛窓　備前　藻塩

三六一五 百十一 うしまとの浪の塩さゐ嶋ひきよられし君に逢すかもあらん

三六二五 野曲車船わたの御崎をかひめくり牛窓かけて塩や引覧

三六三五 家集うしまとをたづく水鶏の音すせ波打あけて誰か問らん

三六四五 名寄忘すよ涙の月にうれへつ身をうしまとに泊る船人

三六五五 夫木牛窓の浪の塩あひ常なれは思ひおもはすみえぬる物を

三六六五 同 うしまとや塩と風とのあひおひにはやく過ぬるせとの舟人

三六七五 同 のほり船こち吹風を過すとて せをうし窓に泊てそふる

三六八五 同 人しれぬ身のみ思へはうし窓に引住す網のいはて過ぬる

浦田　同

ひしふかはと申方へまかりて四国のかたへ渡らんと
しけるに風あしくて程へにけりしふかはの浦田と
申所におさなき者ともの数多物をひろひけ
るをとひけれはつみと申物拾ふせと申けるを聞て
三六九五 山家集 おり立てうらたにひろふ蜑の子はつみより罪を習ふせけり　後光柔

浦初嶋　紀伊　類字

三七〇五 新続紀の海や沖つ波間の雲晴て雪に残れる浦の初嶋　重光

三七一五 夫木湊こす塩風寒し紀の国や浦のはつ嶋雪はふりつゝ　公朝

三七二五 万寿今も又こふるはくるし尋見んいてやも紀路か浦の初嶋　知家

宇和郡　伊予　類字

三七三五 玉葉伊与の国うわの郡の魚返も我こそはなれ世をすくるとて　住吉明神御歌

公実

打山　土佐

三七四五 名寄あまさかるひなへにまかり古衣又うち山に帰りこぬかも　隆房　28オ

知家

右石上乙丸形土佐国時歌三首の内

人丸

鵜浜　筑前　藻塩

俊頼

三七五五 懐中やりにしは思はぬ旅をいかなれはうつゝ浜をは行くらす覧　29オ

定家

読人不知

漆河　同　類字

為家

三七六五 拾遺名にはいへと黒くも見えすうるし河さすかに渡る水はぬるめり　読人不知

好忠

隆実

産宮　同　拾芥抄神社考三当国

28ウ

三七七五 拾玉 かけすくもかしこけれともうみの宮我頼む君に験あらはせ　慈鎮

三七八五 万代もろ人をはくくむちかひ有てこそ産の宮し跡を垂けめ　家隆　29ウ

三七九五 夫木朝日さすかしまの杉にゆふかけてくもらす照せよもうみの宮　西行

宇土小嶋　肥後　藻塩

西行

三八〇五 名寄 詠れは思ひ残せる事そなきうとの小嶋の秋の夜の月　法性寺関白

宇佐宮　豊前　類字

三八一五　家集　つくしへとやとく何に忍けん数ならぬ身のうさやかはれる
三八二五　六百幾帰り我身のうさも知すして心つくしの人をこふ覧
三八三五　拾玉　うさの宮我立杣のひしりをもはくむ神の末を嘆き
三八四五　名寄　いさやまだうさの社はしらね共やを成らむすくなみの神
三八五五　同　けふまてはいきの松原いきたれと我身のうさに歎てそふる
三八六五　名寄　和田の原波ちへたつるうさの宮深きちかひはよにかはらし

空穂嶋　薩摩　名寄三当国和名二薩摩国鹿児島郡

三八七五　名寄　さつま潟名の郡のうつほ嶋これやつくしのふしといふらん

上方山　対馬　八雲御抄

三八八五　名寄　たかしきの上かた山は紅のへしほの色に成にけるかな
三八九五　大木　しら雲のうへかた山の時鳥空には誰もことゝはたらん
三九〇五　同　たかしきや上方山の紅葉を吹なならしそ沖つ塩風

仮寝山　未勘

三九一五　大木　夏衣うたゝね山の郡公今はきときに立帰り鳴
三九二五　同　夜のほとにはや吹たらぬ夏衣うたゝね山の秋の初風

浮津浦　同

三九三五　大木　世中はうきつの浦につゝねてすかのむら鳥あくかれぬへし
三九四五　同　浪のみうきつの浦の浪枕月にひたせる袖を悲しき
三九五五　同　我身かくうきつの浦のさよ千鳥あくかれ出てねをも鳴哉

浦野能山　同　或信濃

三九六五　万十四かの子ろとねすや成なんはた薄浦のゝ山につくかたるも

宇留間嶋　同

三九七五　千　おほつなうるまの嶋の人なれや我言の葉を知すかほなる　公任
三九八五　大木　なかめはやことの葉にもかはなるうるまの嶋の秋のよの月　中務
三九九五　玉吟　よそに聞宇留間の嶋のうるさくはひたにはなて思ひ絶なん　家隆

宇佐宮　重之
兼宗
為鎮
実正
清房
後京極

浮身浦　未勘

四〇〇五　大木　なみたかきうき身の浦のしるへしていつれのかたのかひか拾はん　30オ

宇波瀬河　同

四〇一五　家集　うはせ河下の心もしらなくにふかくも人のおもほゆる哉

宇奈比児原　同

四〇二五　六帖　名にしおへはいつれもかなし朝なゝなておふしうなひこの原　山上憶良

宇乃原　同

四〇三五　万十二　大君のみことかしこみいそにふりうの原わたるもくさはをおきて　人麿

行家
知海

四〇四五　名寄　しらさりきたのめし事を忘草身のうの原におふる物とは　歌方駅　同

家持
実伊　30ウ

四〇五五　名寄　うたかたのむまやはゝ人思ひつこはひ色こそそめてし物を　恨磯　同

四〇六五　千首　つれなさは海士の塩木のこりもせてほてはうしみの磯の松風　為尹

俊頼
如願法師
具氏
無名

上登浜　同

四〇七五　家集　おほ嶋のなるとの浦のこきおなさうへとの浜もかくや有覧　元真

井手　渡山田川中道玉水里　山城

31ウ　31オ

四〇八五 万十一 玉藻かるゐてのしかくみうすきかも恋のよとめる我心かも　人丸

四〇九五 胡蝶巻 春の池や井手の河瀬に通ふ覧岸の山吹底も匂へり　慈鎮

四一〇五 槙楼巻 思はすにゐての中道へたつともいはてそこふる山吹の花　同

四一一五 家集 色も香もなつかしきかな蛙鳴井手の渡りの山吹の花　同

四一二同 音に聞井手の山吹みつれ共蛙の声はかはらさりけり　同

四一三五 新撰集 八重なからあたにみゆれは山吹のたにそなけゐての蛙は　同

四一四五 清正 春風を八重たつ波の色にさへいろこきよするゐての山吹　同

四一五五 六百 をひ風にすたく蛙の諸声も波も寄くるゐての河水　後頼

四一六同 みかくれて井手の蛙はすたけ共波の上にそ声は聞ゆる　知家

四一七同 山吹の匂ふゐてもはよそにしてかひやか下も蛙鳴なり　中務

四一八同 むすはんと契し人を忘れすやまた影あさき井手の玉水　家隆

四一九五 家集 蛙鳴ゐての山田に蒔しねは君まつなへとおひ立にけり　後鳥羽

四二〇同 枝たはにやへ山吹は開にけり井手の河へと思ひやるかな

四二一同 けふきけは井手の蛙もさはく也苗代水を誰まもすらん

四二二五同 春の日は行もやられす蛙なくゐてゑ渡りに駒をとゝめて

四二三同 みたそなぬゐての山吹影みれは色のふかさもまさりけり

四二四五同 花さかりやへ山吹を折つれは井手の蛙のねにや鳴らん

四二五五同 さかてやむ年はなけれと此春は井手の山吹盛せけり

四二六五同 井手にのみありと聞つる山吹のこゝのへちかく咲にける哉

四二七同 我を思ふ人そあまらし古郷にゐての山吹おりなからみん

四二八五 堀百款 冬の花しかすは何ゆへにうゑまれましゐての里人

四二九同 折てこそ匂ひもまされ諸共にゐての渡りの山吹の花

四三〇五 同 後暮て行春をおしとやもろ声にゐての蛙のすたく成らん

四三一五 同 春ふかみ蛙のすたく声すゝゆきてやみましゐての山吹

四三二五 山家集 款冬の花咲里に成ぬれはこゝにもゐてとおもほゆる哉

四三三五 拾玉 山吹の移ろふ水にみかくれて井手の蛙の声うしむ也　慈鎮

四三四同 夏虫の思ひのみかは夕ゆけはゐての蛙も声たつるなり　同

四三五同 春ふかみ井手の河風長閑にてもゝてそなひく山吹の花　同

四三六同 きてもみよゐての川岸水絶て浪におられぬ山吹のはな　同

四三七五 詠藻 いかにして影絶ぬらんもろともにゐての玉水結ひ物を　俊成

小町

貫之 32オ

四三八同 せき侘ぬあふせもしらぬ泪河かたしく袖や井手のしからみ　同

四三九五 散木 山吹をかさしにさせはまくりを井手の渡の物とみる哉

四四〇五 名寄 蛙鳴井手の小山田しめはへたか苗代に思ひ立覧　後頼

四四一同 人しれぬ心へたつないはてゐゐ年月過るゐての中道　知家

四四二五 玉吟 影やとすゐての玉水手にくめはしつくも匂ふ山吹の花　家隆

四四三五 家集 過かてに井手の渡りをみわたせはいはぬ色なる花の夕はへ　後鳥羽

井勢幾　同

東のかたへ下侍けるに賀茂のあたりゐせきを云所に住侍ける女のもとへよみてつかはしける

重之

同

同

四四四五 新後拾 忘れはゐせきの水に影をみる思ふ心はそれにこそすめ　為通 33ウ

猪養岡　大和　仙覚抄三国

元真 32ウ

忠見

四四五五 万二 降雪はあはにふりそよこもりのゐかひの岡の寒からまくに　穂積皇子

四四六五 同 八ふなほりのゐかひの山に臥鹿の妻よふ声を聞かともしさ　坂上郎女

同

四四七五 名寄 みこもりのゐかひの岡にせきもゐすあれは也春の雪も消らん　行家

同

四四八五 新六 みまくさはくるともかるゝむこもりのゐかひの岡のしけくさ　同

永縁

紀伊

四四九五 夫木 かるもかく猪養の岳の寒き夜はいもやすくゐす搗衣哉　後九条

常陸

猪名野　摂津　摂津　類字　武蔵有同名

大進

西行

四五〇五 万三 わきもこにゐなのはみせつなつき山角の松原いつかしめさん　高市連黒人

四五一　同　七しなが鳥ゐな野を行は有間山夕霧立ぬ宿はなくして
四五二　永集　しなが鳥ゐなのふし原あを山にならむ時しや色はほらん
四五三　堀百首　音ふし道尋ねとなりけり絶てましりのゐなのふしはら
四五四　堀百首　ほみ舟ゐなの沖のやしまちにかろ斗そまかちしけぬく
四五五　拾玉　しなが鳥ゐなの篠原分行はほとひもめへすふる霰かな
四五六　同　しなが鳥ゐなの旅ねのさ枕哀にたとる夢も成らん
四五七　同　木枯の音高砂の尾上よりあられふる也ゐなの篠原
四五八　同　いかに女ん朧月夜の有明にゐなの湊の春のまつ風
四五九　同　霰ふるゐなのふし原風こえて衣手寒し道のへの柔
四六〇　名寄　しなが鳥ゐなのは山に旅ねして夜はのひかたにあを覚しつる
四六一　同　風果みゐなの中山越行は櫨の枯葉に霰ふるなり
四六二　現六　猪名野より御崎の沖をみ渡せば霞にきゆる海士の釣舟
四六三　古来　五月雨に井名の河岸水こえてをさか原やいつく成覧
四六四　岳百　しなが鳥ゐなの海に船とめて小篠か原に風を待みん
四六五　名寄　おほつなゐなの渡りの夕暮に誰をこやとて招く薄そ
四六六　月清　猪名山の道のさ原埋れて落葉かうへに嵐をそ聞
四六七　愚草　みしか夜のゐなの篠原やり初にあ世は明ぬ宿はなくとも
四六八　同　もろともにゐなのさ原道絶てた吹風の音にきけとや
四六九　建保　五月雨に猪名のさをさこ露なれて心もとなく秋をこふらし
四七〇　同　やきくもり夕立すこし有間山ゐなのもさこも風さはくを
四七一　同　ありま山かろす嵐のそよきつゝ秋をもまちぬゐなのさ原
四七二　同　かりぬせんゐな野のをきさ露ふかし跡なき山の夕立の空
四七三　同　ゐなのゆく風にはたるやみたらし氷りて消ぬ玉さゝの露
四七四　同　かりにきて猪名野の小篠露なからむすふ枕に明る空哉

無名　井磧山　伊賀　大木二当国
猿丸　新続流出る淡はかりをさきたてこゐ世きの山をけふ越る哉
基俊　新続　夫木天河ゐせきの山の高根より月の御舟のかけそさしこす
顕仲　猪名河　武蔵　簾塩
慈鎮　夫木　方十六かくのみに有ける物もゐな河の沖も深めて我思へりける
同　井上　未勘
同　方七　春霞井の上にたゝ道はあれと君に逢んとだもとほりくも
俊頼
道経　野宮　原　山城　類字
新古　たのもしな野の宮人のこふる菊しくるゝ秋にあへすなりとも　源順
後法住寺　雪のあした野宮にて
隆房　続古　榊すゝ柴の垣ほのかすゝに猫かけそふる雪の白ゆふ　入道前太政大臣
素覚　34ウ　夫木　ちよふへきねの日の小松引うへて君をし祝ふ野宮の原　兼仲
猪苗極　35ウ
定家　法成寺　同
同　法性寺にまいりてよみ侍ける
行意　法性寺に参りて有明の月を見て　かたの尼
走衡　風雅　雲なくみかけ玉のうてなには鹿もゐかたき物にそ有ける　にけくまの尼
俊女　夫木　池水にすめる在明の月をみてにしの光を思ひやる哉　家長
忠定　玉葉　法輪へまうでけるにさか野の花おもしろく咲
知家
康光　法輪　同

けれは見て読ら

四八五五 詞花秋の野の花みるほとの心をは行とやいはむとまるとやいはん
法輪寺にまうて侍けるにさかのゝ花みてよめる

四八六五 千載花薄まねくはさかど知なかるとゝまる物は心成けり

四八七五 拾玉大井河のりのわかくる水車我いくめくり浮しつむ覧

四八八五 家集いかゝ又めくりあふへき法の輪の嵐の山を君し出なは

四八九五 夫木をしなへて霞める野へのさかなれは法のわにさへ立めくりけり

四九〇五 同 法の輪にめくりくるまのしるしにや思はぬ外の人の問けん

能登河　大和　仙覚抄ニ当国

四九一五 万十九のと河の後にはあはんしましくも別といへは悲しくも有か

四九二五 同 十能登川の水底さへてるまへに三笠の山は咲にけるかも

四九三五 夫木三笠山春くれ行は能登河の水底かけて匂ふ藤なみ

能登瀬河　河内　勅撰名所集ニ当国交野郡　近江ニ有同名

四九四五 万十三高瀬くるのとせの川の後あはん妹には我は今に逢す共

野口　里　同

四九五五 新六しらさりし野口の里に宿かりて道のしはふに今そ朝たつ

四九六五 夫木御狩野の野口の尾花なひくまて羽風はけしきましらふの鷹

野嶋崎　安房　類字近江淡路ニ同名アリ

四九七五 千載東路の野嶋か崎の浜風に我ひもゆひし妹か顔のみ

四九八五 名寄東路の野嶋か崎の浜風に妹かむすひしひも吹かへす

野路　山　近江　類字

四九九五 家集近江路や野路の旅人急かなんやす河原とて遠かしぬかは

五〇〇五 拾玉月の入ながらの山をめにかけてこまひは過ん野ちの篠原

五〇一五 同 近江路やのちの篠原夕行はしかまりかへるさゝ波の風

五〇二五 名寄旅人のおりゐる門もみゆるかな野路の山への雪の村消

五〇三五 方寸鶯鳴野路の玉川けふみれは萩こす波に秋風そ吹

五〇四五 藤川百行さきは暮るもしらす宿るらし花の陰ふむ野ちの旅人

五〇五五 夫木水まさる野路の浮橋波越て雨の日数にそ通はす

五〇六五 同 打渡すせたのなかはし程もなく(むら)みゆる野ちの松原

五〇七五 同 心ゆく野路の旅ねの友なくはいとゝ宮こや恋しからまし

五〇八五 同 暮かゝる野路の旅人分過て露のみやとるすゝの篠原

五〇九五 同 うち時雨古郷思ふ袖ぬれて行さき遠き野路のさゝほら

能登瀬川　近江

五一〇五 万三さゝれ浪磯こせちなるのとせ河音のさやけさ滝つ瀬毎に

野寺　同　五代集歌枕ニ当国

五一一五 新古在明の月の行方を詠めてそ野寺の鐘は聞へかりける

野嶋　崎道　同　類字

五一二五 万十五玉藻かる乙女を過て夏草の野嶋か崎に庵りす我は

五一三五 六百夏草の野嶋か崎の朝露を分てそきつる萩の花すり

五一四五 玉吟波にあらふ唐錦ともみゆるかな野嶋か崎の秋萩の花

五一五五 同 庵さす野嶋か崎の浜風に薄をしなみ雪は降きぬ

五一六五 建保月影かうろふ波にみたれ行野嶋か崎の秋風の色

五一七五 同 都思ふ野嶋か崎のたひ衣ひも吹かへす秋のうら風

五一八五 同 浪のよる野嶋か崎の系薄みたれにけりなぬける白玉

五一九五 建保白妙の波の花すり乱つ野嶋か崎の秋の衣手

五二〇五 同 物思はぬ草葉も今やしほる覧野嶋か崎の秋の村雨

同　顕昭
家隆　為家
同　同
同　兼定
後鳥羽　安嘉門院四条
波多少足　慈鎮
無名　顕昭
後成　家隆
後鳥羽　行意
範宗　行家
慶光

赤衛門梁　36オ
道命法師　慈鎮
西行　船王
有房　無名
殷富門院大輔　良教　36ウ
信実　慈鎮
顕仲　西行　37オ
顕輔　人丸

五二一五　名寄ふりたつる弓末もみえず夏草の野嶋が道を過る狩人　知家
五二二五　夫木　小萩咲野嶋が崎に風こえてゆふちる波に残る月影　後嵯峨院
五二三五　同　駒なへて野嶋を過る狩人のゆすゑもみえず茂る夏草　小幸相
五二四五　同　霜枯の尾花波よる風にさへ野嶋が崎を立千鳥哉　忠度
五二五五　玉　計ね寛するわが友としも思はでや野しまが崎に鵠鳴せ　同

野上　里　美濃　類名　名若不破郡

五二六五　万八　霞立野かみのかたに行しかな鶯啼つ春に成らし
五二七五　六百一　夜かすす野上の里の草枕むすび捨ける人の契を
五二八五　同　恨てきかたくなけれ東路の野上のほの暮方の空
五二九五　名寄　ふはの山朝越くれは霞たつ野上の方に鶯の鳴
五三〇五　ま（ここ）抄　いかてけふ野上の里を過ゆかん夜深く関の雪降にけり
五三一五　夫木　なつかしと霞のひまに見えつるは野上の里の春の梢か
五三二五　千首　初草のまたうら若く聞えけり野上のわたの鶯の声

野田　入江一橋　陸奥　類名

五三三五　続古　陸奥の野田の玉河みなぬせは塩風こして氷る月影
五三四五　続後　五月雨は夕塩なから陸奥の野田の玉河浅き瀬もなし
五三五五　類名　陸奥や野田の菅こも片敷てかりねさひしきとふの浦かせ
五三六五　弘長百　稀にたにとふの浦風音信は野田の松かねかたしきやせん
五三七五　夫木　里人や野田の若なもすくらん汀そにこる玉川の水
五三八五　同　朽残る野田の入江のひもつ橋心ほそくも身そふりにける
五三九五　夫木　せきかくる野田の入江の沢水に氷りてとまる冬の浮草
五四〇五　同　霜こほり野田のうはてにせく池の汀になひくしの薄哉
五四一五　同　冬されは野田の玉河氷ゐて萩とす波は夜ほの白雪

後瀬山　若狭　類名

五四二五　御集　光とふのたの玉川月清み夕塩千鳥夜半に鳴なり　同
五四三五　万四　かにかくに人はいふとも若狭路ののち瀬の山の後もあはん君　坂上大嬢
五四四五　同　後瀬山後も逢んと思ふそしぬへき物をけふまてもあり　大伴家持
五四五五　詠藻　思ひ出さ忘れやしぬるわかさちや後瀬の山と契し物を　後成
五四六五　現六　もこん春をそ契る若狭路ののもせの山の藤の下陰　成範
五四七五　同　時過る椎のさ枝もみえわかす後瀬の山につもる白雪　摂政
五四八五　愚草　頼めきし後瀬の山のことや恋を析りの命成けん　定家
五四九五　同　やとれ月衣手をもし旅枕たつや後瀬の山の雲に　同
五五〇五　玉吟　千代までも葉かへぬ色を頼むかな後瀬の山の類の椎柴　家隆
五五一五　夫木　後せ山しらぬ桜の春の色に花社ありとけふ迄もふれ　為世
五五二五　同　郭公鳴て後瀬の山も猶ねられぬ空に有明の月　基良
五五三五　同　忘しと頼めし末は若狭路や後瀬の山のよその椎柴　家長
五五四五　方寸集　空晴る後せの山の桜花もとより外の物もやはみる　光俊
五五五五　同　ふみそめてさらにそ迷ふわかさちや後せの山の嶺の椎柴　家隆

能登海　能登　仙覚抄ニ当国

五五六五　万十二　のとの海に釣する蟹の漁火の光にまさる月待かてら　無名
五五七五　名寄　能登の海の長閑に霞む春の日は沖に出そふ海士の釣舟　家隆

能登嶋山　能登

五五八五　万十七　とふさたて舟木きるといふのとの嶋山けふみれは　大伴家持
五五九五　現六　こたもしけしも幾代神ひそ　同
　　こたもしけしも幾代神ひそ　衣笠

能義郡　出雲　和名抄国能義郡

五六〇五 懐中　雨ふりて宿のつくの落くるは軒の氷のとくる成へし

野中清水　播磨　類字　紀伊に有同名

五六一五 家集　みる人の袖のあやしくぬらすかな野中の水の深き斗に
五六二五 方　垂立よしむかけこそなけれ女郎花野中の清水結ふはかりに
五六三五 同　古の野中の道の跡とへは清水なかるゝ代々のしの原
五六四五 名寄　草茂き野中の水も絶くになひく末葉の風を待つゝ
五六五五 愚草　玉ほこの道の夏草末遠み野中の清水しは影みん
五六六五 玉吟　昔思ふ野中のし水立帰りもとの心に夏そ汲れん
五六七五 同　冬草の枯にし人そおもほゆる野中の清水ぬるなけれは
五六八五 千五百尋　こし昔の人は跡たれて野中の清水誰か汲らん
五六九五 新六　すみはる野中の清水徒にぬるさ心は世にもつへす
五七〇五 御集　古の野中の清水尋ねはさゝ分る袖に露そこほる
五七一五 夫木　いなみ野や野中の清水結ふ手の玉ゆら涼しさこのかり露
五七二五 新業　思ひ出る野中の清水そのまゝに又影みえぬ契なりとも
五七三五 草庵　夏ふかき野中の清水埋れて結ふ斗に草そ茂れる

野山里　備中　夫木当国

五七四五 夫木　あかすゝこそ秋の野山の里人は曇なき夜の月をみるしめ

野中清水　紀伊

五七五五 名寄　岩代の野中の清水むすへ共恋をはけたぬ物にそ有ける

野嶋　淡路

此アコヤノ浦歌歌枕三野嶋ヲ別ニ立テ紀伊国ニ然共紀伊国ニアリミミエノ浜路ノ野嶋ナルヘキ故アコヤノ浦ハ紀伊国ナリ

五七六五 方　一我はりし野嶋はみせつ底深きあこやの浦の玉そ拾はぬ　中皇命
五七七五 同　三　栗道の野嶋の崎の浜風に妹か結ひし紐吹かへす　人丸
五七八五 同　六　朝なきに梶の音聞ゆみけつ国野嶋の海士の船にし有覧　赤人
五七九五 同　淡路の野嶋の蜑のわたの底沖ついりに鮑玉さはにかつきて　同
五八〇五 現六　あはちなる野嶋のあまの釣舟の震にうかふ春の明ほの　中務
五八一五 名寄　朝なきに野嶋か崎を漕行は樟になれたるあちの村鳥　敦雅
五八二五 同　舟人の野嶋の渡り浪高み遥わつらふや此世なるらん　雅経
五八三五 類聚　波ひくる野嶋か崎の蜑家に住出の声かとゝ聞　後成せ 40ウ
五八四五 建保　浪ひけて玉ぬく風や吹つらん野嶋か崎のさゆりはか露　象隆
五八五五 千載　玉藻かるとしまを過て夏草の野嶋か崎に船近つきぬ　同
五八六五 愚草　面影は日も夕暮に立そひて野嶋にすゝる秋の浦波　三宮
五八七五 夫木　笑風になひく野嶋のさゆり葉にこほれぬ露は管也けり　行家
五八八五 同　帰る雁野嶋か崎の朝朗剔たるあはいかみる覧　後鳥羽
五八九五 同　野嶋にや塩満ぬらし玉藻刈としまも過すたつの鳴覧　具親

能解浦　泊　筑前　仙覚抄二当国　和名抄三早良郡

五九〇五 方　すから泊のこの浦浪たゝぬ日はあれ共家に恋始日ほなし　長親
五九一五 同　風吹は沖つ白波わしこみとものこの泊にあまた夜そぬる　頓阿
五九二五 夫木　塩風はあらくもろなるから泊のこの浦舟漕いつなゆめ　隆教 41オ

野坂　里　肥後　仙覚抄二当国

五九三五 方　三芦北の野坂の浦に船出して水嶋にゆかん波立なゆめ　経兼
五九四五 現六　あまはみなみつしまにゆけ芦北の野坂入浦に船も残らす　無名
五九五五 名寄　夜半に吹浦風寒みあ北の野さかの里は衣うつせ　同
五九六五 家集　あし北の野坂の浦のうつせ貝いもせをなへていくよへぬらむ　中務 ぬこ 42オ

五九七五　夫　木村千鳥　しまもさして渡る鳥野坂の浦に船やつく覧　定教
五九八五　同　筆北の野坂の浦にくもりきて松の南はほるゝ白雪　後光条

野沢　未勘

五九九五　拾玉　東路や野沢のかつみけふ斗あやめの名をもかりてけり哉　慈鎮
六〇〇五　同　野沢かた南や晴て露をもみ軒にまそなる花あやめ哉　同

野中森　同

六〇一五　玉吟　松虫もまた音信よ浅茅生の野中の杜の蜩の声　家隆
六〇二五　同　駒とむる野中の杜は立にけり鳴やむかひの山時鳥　同
六〇三五　同　夏の日の野中の森の青葉かけ遠方人の袖そやすらふ　同
六〇四五　夫　木里遠き野中の杜の下草にくるゝもまだぬ松虫のこゑ　衣笠

能登香山　同

六〇五五　万十二紐鏡のとかの山もたかゆへか君きませなゝし紐とかすねん　無名

松葉名所和歌集第七終

42ウ

43オ

松葉名所和歌集第八　於久

大内山　山城　類子

六〇六五 花卷 末摘　もろ共に大うち山は出つれと入かた見せぬいさよひの月
六〇七五 千五百 名にたかき梢の花の色やさは大内山の嶺のしら雲
六〇八五 拾玉 ひさもなき跡をあはれとみつるかな大内山の今朝の白雪
六〇九五 家集 ゆるきなき大内山の石なれは千年取ともおもしとそ思ふ
六一〇五 玉吟 幾千世の秋をほふともさら竹の大内山は色もおはらし
六一一五 新六百歌 大内山のうしとらにをりへのつかさあやたてまつる
六一二五 同　世ゝにたえぬ大内山のかたなしにふるきかうかの梢をそ見る
六一三五 夫木 亀山や大内山を見渡せはふたおにみてるとよの雪かも
六一四五 新葉 もゝしきの大内山の桜花咲てや君か御幸待らん
六一五五 名寄 はるかなる都のいぬい我宿は大うち山のふもと成けり

大井河　山城　兼盛三島郡 遠江二有同名

六一六五 家集 とゝむれとゝあかぬつも大ゐ川ゐせきを越て行水のこと
六一七五 同　大ゐ河せきてしからみかけてのみ思ふ心はとゝあかぬつも
六一八五 同　夕されはいとゝわひしき大井川かゝり火なれや消かへりもゆ
六一九五 同　大ゐ河ゐせきのほかになるたきはをのかゝへ〻そ悲しかりけれ
六二〇五 堰百 大井川せゝに隙なきかゝり火と見ゆるほすたく螢なりけり
六二一五 同　大井河くたす筏におとろきてゐせきにきゐる鵜鳴也
六二二五 堰侵 大ゐ河鵜舟にともすかゝり火のやゝる瀬にあふあゆてはなき
六二三五 六百 ふなし瀬にのほるあゆこや大ゐ河くたりもやらぬ篝火のかけ
六二四五 同　大ゐ川いく瀬のほれはうかひ舟あらしの山の明わたるらん
六二五五 同　大ゐ河猫山かけに鵜かひ舟いとひかねけるよはの月かな
六二六五 山家集 大井川ゐせきによとむ水の色に秋深くなる程そしらるゝ

通光
慈鎮
家隆
俊頼
光俊
行家
俊成
光実
衣笠 1オ
躬恒
同
源順
元真
季経
家隆
女房 1ウ
西行

六二七五 同　つゝあとも人しる恋や大ゐ川ゐせきの隙をくゝる白波
六二八五 拾玉 大井河すむ月影の入を見て小倉山とやいひ初めけん
六二九五 同　大井川更行夜半のうかひ舟これもよ渡る道にそ有ける
六三〇五 同　大ゐ河屋こそ水にうかひぬれ螢飛かふ夕闇の空
六三一五 同　大井川波のほかなる紅葉こやたくみのみせる錦成らん
六三二五 建保 大ゐ河みゆきふりにし色なから入江の松に夏はきにけり
六三三五 同　大井川くたす筏のくれなゐにはなみくゝる秋をこそまて
六三四五 同　大ゐ河みねよりおろす山風にいかたのとこのくれそ涼しき
六三五五 同　大井川やみのうつゝの鵜かひ舟さたかにそさす篝火の影
六三六五 同　大ゐ河ほかにや夏をみなれさはすすゝ筏の床そ涼しき
六三七五 同　大ゐ川夏もあらしの山風に紅葉の波のたゝぬ斗そ
六三八五 建保 大井川くたす鵜舟のかゝり火にふるきなかれの跡やゆゝしん
六三九五 雲葉 大ゐ川ふりゐる鷺の立跡をあさせと見つゝ渡るから人
六四〇五 月清 大井河瀬〻の岩波音絶て井せきの水に風こほる也
六四一五 同　大井川あさけの煙はる〳〵とくたす筏の遠かり行
六四二五 愚草 大ゐ川きちの梢の青葉より心に見ゆる秋のいろ〳〵
六四三五 同　大井川かはらぬゐせきをのれさへ夏きにけりと衣ほす也

大沢池　山城　類子

六四四五 家集 いひはなつ君にしあへる大沢のいけるかひなき身をそ恨る
六四五五 正治百 大沢の池のけしきはふりゆけとかはらすすめる秋のよの月
六四六五 夫木 大沢の池の水くきたえぬともなにかうらみんとかのつつさを
六四七五 同　大沢の池の水草はかれにけりなかき夜すから霜や置らん
六四八五 夫木 大沢の池の玉藻のみかくれに蛙なくなり五月雨の比
六四九五 題林 見れは又うつろふ影も大沢の池の玉もに飛ほたるかな

元真
俊成
同
鎌倉 2ウ
康光
頓覚
同
慈鎮
同
同
順徳院
行意
俊頼
忠定
知家
範宗 2オ
康光
隆祐
後鳥羽院
同
定家
同

男山　同　類字

六五〇五　堀後　男山かさしの花も春なれはをみの衣もはゆるけふ哉　師賴
六五一五　同　男山嶺の桜に諸人のかさしの花をたくへてそみる　仲実
六五二五　愚草　男山さしそふ松の枝ことに神も千年をいはひそむらん　顕仲
六五三五　十五百　男山おひそふ松にしるきかなかきりもしらぬ君か千年は　肥後
六五四五　名寄　男山桜かさして立まひし朧月よのかけそ忘れぬ　西行
六五五五　同　いのりこししるしあらせは男山若にも松の生るためしに　同
六五六五　拾玉　我物をなつかしくそてて千とせ男山よりくる男とて　同
六五七五　同　男山たちぬに君をあふきても類むは神の光なりけり　衰然
六五八五　拾玉　はる〳〵と君か千年をまつ風に万代よはふ男山かな　同
六五九五　玉吟歌　ならて我身はふりぬ男山老せぬ山やも哀かけなん　仲実
六六〇五　新六　男山おひの坂ゆく人はみなほとの杖にもかさりぬるかな　兼昌
六六一五　夫木　世〳〵かけて猶もさかよ男山かさしにさける春の藤波　定家
六六二五　同　男山よそにみつ野の女郎花誰ゆへ花の紐もとく覧　通光
六六三五　同　男山淀の渡りの春の波南の海に面影そたつ　通氏
六六四五　同　男山けふのみゆきの三代までにつかへぬるも神はしるらん　靴宗
六六五五　新葉　男山むかしのみゆき思ふにもかさしし花の春そ忘ぬ　慈鎮

大原　山里　山城　愛宕郡　当国有函所

六六六五　万二　我里に大雪ふれり大原のふりにし里にふらまくは後　天皇
六六七五　同　四大原の此市柴のいつしかと我思ふ妹に今夜あへるかも　御歌
六六八五　万十二　大原のふりにし里に妹を置て我いねさねつ夢に見へこそ　志貴皇子
六六九五　家集　大原やすみのかしらのなほゆるせこのあに泪うかふといふ也　小倉君
六七〇五　堀百　何ことを大原山にをしめてつきせす鹿の鳴あかすらん　顕仲

六七一五　同　大原やをの〻炭かま雪降て心ほそけに立けふり哉　師賴
六七二五　同　大原やをの〻すみかま雪ふれと絶ぬ煙そしるへなりける　仲実
六七三五　同　さひしさは冬こそまされ大原ややく炭かまの煙のみして　顕仲
六七四五　同　み山木をやく炭かまにこりくへて烟たえぬ大原の里　肥後
六七五五　山家集　大原やまた炭かまもならはすといひけん人も今あらせはや　西行
六七六五　同　年ふれと朽ぬときほのことのはをさそ忍らん大原の山　同
六七七五　同　都近き小野大原を思ひつる柴の煙の哀なるかな　同
六七八五　同　炭竈のたな引煙ひと筋に心ほそきは大原の里　衰然
六七九五　同　水の音は枕に暮る心ちしてね覚もちなる大原の里　同
六八〇五　山家集　山風に冬のさ夜ほら〳〵と庭に落しく大原の里　衰然
六八一五　同　薪はふ門は木葉に埋れて人もさしこぬ大はらの里　同
六八二五　同　ますら男か爪木にあけひさしそへて暮れは帰る大原の里　同
六八三五　同　諸共に秋も山路も深けれほしかそ悲しき大原の里　同
六八四五　拾玉　冬くれはやくすみかまの煙ゆへまそにもしるし大原の里　慈鎮
六八五五　同　小野山も大原山も炭かまの煙はおなし哀成けん　同
六八六五　同　大原やたかすみかまの夕烟ころほそくて年もへぬらん　同
六八七五　同　此ころはもとすむ人やいとふ覧都にかへる大はらの里　同
六八八五　名寄　夜もすから玩いも柴を折敷て雪にそ明す大原の里　中務
六八九五　月清　秋のきり冬のけふりと成にけりまた炭やかぬ大原の里　極後京
六九〇五　愚草　秋の日に都をいそく賤のめか帰る程なき大はらの里　定家
六九一五　天木　大原はゆきてや見ましいつしかと咲いも柴の花そしるへに　信実

大原　野　山城　乙訓郡

六九二六　百　おほはらや野へのみゆきの所えてそらとるけふのましらふのたか　顕昭

六九三五 千五百 有明も秋そ名残は大原や月を小塩の山の端の空　雅経
六九四五 同 たとへても猫君が代は大原や小塩の松も千代をこそつめ　隆信
六九五五 愚草 朝霜も白ゆふかけて大原や小塩の山に神まつるころ　定家
六九六五 同 思ひのみ大原野へに年へぬるまつことかなへ神のしるしに　同
六九七五 夫木 大原や小塩の山の桜ゆき雲こそ春のたちそ成けれ　隆祐
六九八五 同 けふまつる大原野へのつほすみれ君諸共につまんとそ思ふ　読人不知

大荒木　野森里　同　類字

六九九五 す　かくしてや猫やよびなん深雪ふる大あらきの〻篠にあらなくに　顕季
七〇〇五 同 三宮のみこと申しこみ大あらきの時にはあくぬと雲やくれます　仲実
七〇一五 家集 大あらきの杜の下なるかけ草はいつかとのみひかりをそまつ　慈鎮
七〇二五 同 おほつかないまとしなれは大あらきの杜の下草人も苅けり　同
七〇三五 同 君か代をまもしもしらく大あらきの里のさかとみるかたのしき　資季
七〇四五 名寄 大あらきの遠野の外に住人を見捨てゆけは袖そ露けき　俊成
七〇五五 月清 夏草の風にまたるゝ夕暮は秋のみ深き大荒木の杜　西行
七〇六五 愚草 時鳥たれしのふとか大荒木のふりにし里を今もとふらん　同
七〇七五 草庵集 木の間もる影もまをへて大あらきの杜の落葉に月そうつろふ　資季
七〇八五 夫木 夏野ゆくしかもかくすか大あらきやゆく人もなき杜の下草　俊成
七〇九五 同 大荒木のもりの葛葉を吹風に紅葉もあへすもりやしぬらん　匠房
七一〇五 同 大あらきの浮田の杜のうす紅葉かつ〳〵露や色をそむらん　仲実
七一一五 夫木 をのつからくる人もなし大あらきのとをの〻原の五月雨の比　順徳院
七一二五 同 えたそよく風に夏なき大荒木のもりくる水のかけそ涼しき　雅経
七一三五 同 野への色も茂りにけりな大荒木の梢につく杜の下草　実方
七一四五 同 大あらきのもとあらのしたのむもれ草さもおいらの末そいふせき　無名

朧清水　山城　類字

七一五五 堀百首 むすぶまに扇の風も忘られておほろの清水涼しかりけり　顕季
七一六五 堀後 大原やおほろの水に行ぬれはなつはをちなる物にそ有ける　仲実
七一七五 拾玉 澪世ないとふ心は大ほらや朧清水こころにそすむ　慈鎮
七一八五 同 世中を思ふこころは大原や朧の清水すむかひもかな　同
七一九五 山家集 独すむおほろの清水友とては月をそすます大原の里　西行
七二〇五 貞永歌合 秋の月やとる光し清けれはおほろの清水なをもたのまし　資季
七二一五 夫木 ふりにける朧の清水結ひあけて昔の人の心をそくむ　俊成
七二二五 同 冬くれは故郷さむし大原やおほろの水さえまさるらん　匠房
七二三五 一字抄 けふもまた入相の鐘そ聞ゆなる朧の清水結つるまて　仲実
七二四五 古来 散かゝるはなにそくもる大原や月も朧のし水なれとも　順徳院

朧山　山城

七二五五 夫木 有明も秋そ名残の天ほらや月をおほろの山の端の空　雅経
七二六五 同 雉子なく朧の山の桜花かりにはあらてしはし見しかな　実方

巨椋　森　入江　同　勅撰名所集三当国宇治郡

七二七五 万九 大くらの入江ひくなり射目人の伏見の田井に雁渡るらし　無名
七二八五 名寄 宇治山の紅葉の色をかとる哉大くら杜のおほつかなさに　左近
七二九五 千首 大くらの入江の月の跡に又ひかり残して螢飛なり　為尹

大宮河　同　類聚三当国

七三〇五 類聚 長閑なる大宮川のなかれにそ二度すめるかけは見えける　為家
七三一五 万十三長歌 隠口の初瀬の山の青垣のおし坂山はしりいてのよろしき山の出立のくはしき山そあたらしき山のあれまくおしも　無名

大河辺　同　吉野郡

七三二五　新千　打渡す大河の辺のせをひろみ及はぬ声に千鳥鳴なり
七三三五　堀百　吉野なる大河水のよそほひは代々にも更に絶しとそ思ふ
七三四五　玉吟　みよしの大河の〳〵の藤浪の春もふかしと色に見すらん
七三五五　同　冬く春にしかしみかけよみよしの大河の〳〵にさけるふち波
七三六五　新六　里人のほたきる谷のふしくゐき大河の〳〵のあれまくもおし

大嶺　大和　類字

七三七五　拾玉　我山をまたぬ身ならはさしこえて大岑迄もゆかまし物を
おほみねにて

七三八五　金葉　もろ共に哀と思へ山さくら花よりほかにしる人もなし

大嶋嶺　同　類字

七三九五　万二　妹か家もつきて見ましを大和なる大嶋峯に家もあらましを
七四〇五　新十　妹がめたり付ても見んと大和なる大嶋岑に家ねせましを
七四一五　新六　大和なる大嶋嶺の朝嵐はけしかれともふる時雨かな

大坂　同　和名云葛上郡　或越中

七四二五　万十　おほさかを我こえくれは二上に紅葉流る時雨ふりつゝ

大河淀　同　八雲抄　勅撰名所集云吉野郡

七四三五　万七　今しは見めやと思ひし吉野の大河淀をけふ見つるかも

大橋　河内　築塩

七四四五　万九　しなてるやかた足羽河のさゐぬりの大橋の上に紅の
七四五五　同　天橋のほとりに家あらはいたく独行子に宿かさましを
七四六五　野名　百首　しなてるや片岡川の大橋を渡りて見れはむかしおもほゆ

奥津浜　浦　和泉　類字

七四七五　続古　ことゝはん思ひ興津の浜千鳥なく〳〵出し跡の月影
七四八五　玉吟　ぬれて又おきつの浜も白浪の暁かけて田鶴そ鳴なる
七四九五　夫木　まとろまておきつの浜の郭公猫まつひも波のまに〳〵
七五〇五　同　心のみおきつの浜に引あみのめにかけなやらあはぬ恋哉
七五一五　夫木　打するみきはの波も言きえて興つの浦に鵠鳴也
七五二五　同　あけぬとておきつのうらのかり枕よるの波の音は忘れし

御前沖　浜離　摂津　類字

七五三五　詠藻　いさきよき光にほひふもりなれやなま〳〵の浜につもる白雪
七五四五　名寄　神垣や御前の浜の松かうれをふきにあらふ雪の白波
七五五五　同　しきすする御前のなたは過ぬ共今朝の沖こそ思ひ侘ぬれ
七五六五　同　もとめつゝ御前にかゝる柴舟のきたけになれやなる方もなし
七五七五　同　あとたゝへの神やこれならん御前の浜の雪の村きえ
七五八五　同　雪ふかき御前の浜の風吹はまつの上こす興つ白なみ
七五九五　万手集　ねなのより御前の沖を見渡せは霞にきゆる海士の釣舟
七六〇五　月清　神垣や御前の浜の浜風に浪もりもそゝる里神楽かな
七六一五　新葉　住吉の御前の沖の塩あひに浮ひ出たる淡路嶋山
七六二五　夫木　朝なきに御前の沖を漕出て雲をは海の物としりぬる

御歌　天皇　天知　天皇　僧正　行尊　恵鎮　行意　隆源　家隆　同　知家　定家　家隆　安嘉門院四条　鎌倉　為家　同　俊成　懐能　俊頼　兼盛　覚守　登蓮法　後京極　為忠　隆信　隆源　長俊

大江　浦岸橋　同　類字

七六三五　六帖　玉もかる大江の浦のうら風につしの花ほろ〳〵也
七六四五　堀百　五月雨は日数つもれとわたの〳〵大江の橋はひたらさりけり
七六五五　藻塩　哀なるなからは跡も朽にしを大江の橋のたえさるらん
七六六五　名寄　冊よはふ声もおよはす成にけり大江の峯の五月雨の比

七六七五 夫木 はるかなる大江の橋はつくりけん人の心そ見え渡りける
七六八五 同 和田のへや大江の峯に水越てこや野のきはに舟つなぐ也

奥嶋　同　八雲抄

七六九五 万三 なほの浦をそかひにみゆるおくの嶋漕たむ舟は釣をすらしも
七七〇五 夫木 紅葉ことてむきにみゆれ縄の浦時雨や奥の嶋めくるらん
七七一五 同 立波につみの声を打そへてやら人よせて奥の嶋より
七七二五 千首 藻塩くむほとかと見えてしほ又網をほひかておくの嶋人

大和太浜　摂津　藻塩

七七三五 万六 浜清み浦なつかしみ神代より千舟の泊る大わたの浜
七七四五 名寄 君か代は千舟の泊る大わたにたつ細波の数もしられす

於乃ゝ江橋　伊勢　藻塩

七七五五 名寄 うしほくむいつきのいもね年ふりてやゝ朽けりおのゝ江の橋

右御祓の橋と云所ありこれはしも月のにいなめのまつりの夜斎宮御塩あみ給ふとて此浜を渡り給ふゆへに名付たる也もとは愛をほおのゝ江といへは於のゝ江の橋と申といふを聞てとゝ云〻

大淀浦　同

七七六五 伊勢物語 大よとの浜におふてふみるからに心はなきぬかたらはね共
七七七五 象集 いせの海士にとひはきかねと大淀の浜のみるめしるくそ有ける
七七八五 千五百 数くに思心は大淀のまつをうらむる波のをとかな
七七九五 愚草 つらからぬ松もこいらく大淀の霞はかりにかゝる浦波
七八〇五 同 大淀のまつに夜ふくる浪風をうらみて帰る友千鳥哉

俊頼　七八一五 玉吟 大淀の松の契はふりぬ共いまもはらすかへる波かな
良経　七八二五 建保君か代のためしやいつら大淀の浦に色そふ春の姫松
七八三五 同 藻塩やく海士のたく縄春くれは霞そふかき大淀の浦
七八四五 建保月影をまつはつらくて大淀のうらに波に霞むよの空
赤人　9オ
七八五五 同 大淀の浦にむれゐる友鶴のあそふ日かけの空そのとけき
七八六五 同 大淀のうらめしとなきあけほのも袖をそほすぬ春の月影
七八七五 同 かすみゆく春をへたてゝ大淀の浦よりをちに雁そ鳴なる
為尹　七八八五 新六 大淀の浦のみるめもよりぬへし奥つ塩風波に吹なり
七八九五 名寄 せと口にたけるうしほの大淀のよとむとこゝろもなき歎哉
作者不審　七九〇五 同 大淀につみのをもにをおろし置て浦山敷ほくなかり舟
後頼　七九一五 同 いかにせんけふ大淀の浦にきてあやめやひかん見や拾はん
七九二五 夫木 大淀の浦路長閑き春の日に霞そのこる松の村立
七九三五 同 かすみゆく松さへつらし大淀の浦立波のかへる雁かね
長明　七九四五 同 大淀の霞ふきむせふ松風にうら見てのゝ帰る雁金
七九五五 同 大淀の春の波ちにゆくかりのうら見て帰る暁の空
9ウ
七九六五 夫木 大淀の松はつらくもかすまねと波路へたて帰る雁金
七九七五 同 大淀のみるめはうとく成ぬ共波にかり金秋を忘るな
七九八五 御集 大淀の浦風かすむ曙に雲ねをかりの音つれて行

芽生　浦海山野原　伊勢

七九九五 万十一 桜麻のおふの下草露しあれはあかしていゆけ母はしる共
八〇〇五 同十二 桜麻のおふの下草早く生ほ妹か下紐とけこらましを
八〇一五 愚草 さくらあさのおふの下草したにのみ分て朽ぬるなくゝ袖
八〇二五 同 なにゆへやそこのみるめもおふの浦にあい事なしの名には立こん
八〇三五 玉吟 いたつらに身は花すかねは桜麻のおふの浦波六十こえめや

俊頼　家隆
良経　行意
定衡　10オ
内侍　俊成
範宗　行能
康光　衣笠
西行　仲正
順徳　院
家隆
俊成女
如願法し　10ウ
雅経
慈鎮
後鳥羽
人丸
無名
定家
同
家隆

八〇四五 千五百　伊勢のあまのみるめのはてよいかならんおふの浦なしなりもならずも　内大臣　順徳院　11オ

八〇五五 建保散波は春のいろにそ桜麻の生の浦風今も吹らし　慈鎮

八〇五五 拾玉情あらは人もすすめよ桜麻の生の下草老ほてぬ共

八〇六五 同　さてもさはいかに成ぬる身なるらん思ひそわかぬ生の浦なし

八〇七五 同　

八〇八五 名寄夏と秋と行かふおふの浦なしにかたえ涼しき奥つ塩風

八〇九五 同　冬深みおふのうら風さえ〳〵てしもかれにけりせの姿荻

八一〇五 同　みるめそよおふの海とは聞しかとあふ事なしの花も散けり

八一一五 同　けふはやゆふとりして夏麻の生の川瀬に御祓してけり

八一二五 同　鳴千鳥我さへなし白菅の生の河風さむく吹よに

八一三五 夫木　さくら麻のおふの浦風心せよありそのめくり花咲にけり

八一四五 同　おふの浦の霞を分る海士小舟いつれの嶋の主もがるらん

八一五五 同　みつ塩にかたえは波の花なれやいりぬる磯の生の浦なし

八一六五 同　おふのうらの町への下草若ねとやすすめし駒も立なつむらん

八一七五 同　花薄おふの原のみだれ橘秋の心にたくしそ行

八一八五 夫木　桜麻のおふの山はたかりもあへすつりべてもなにそくらん

八一九五 新集　終にさてぬてかたらほぬ世語に成ぬるかおふの浦なし

大屋河　　参河　夫木二当国

八二〇五 夫木　瀬をはやみ流る水はおほや川あやうき橋を渡るうも人

大浦　　遠江　類字

八二一五 万八　大浦のその長浜によする波ゆたけく君を思ふ此ころ

八二二五 同　廿　大君のみこもりしこみおほの浦をそひに見つ都へのほる

大井河　　同

あつまへまかりけるに大井河と云川渡るとて読る

八二三五 名寄　思ひいる都の事は大井河瀬のしの数もをよはし

八二四五 藻塩　うち渡す行瀬あまたの大井川見えそ遠きはつくらの山

奥津河　　駿河　藻塩ニ有和名尾原郡

八二五五 塩後　谷おろしの風やまぬはよとともにおきつかはらにくぬき波立　顕仲

八二六五 明玉　波たてる朽木か陰に駒とめて奥つかまにしはしすまん　法親王

八二七五 名寄　清見潟月にむかへる奥つ河なかるるかや海に出らん　永縁

八二八五 夫木　ふりにける松のこころもあらはれぬおきつの海士の昔語に　為相

八二九五 同　おきつかたいそねにもかきいはまくらかけぬ波にも袖はぬれけり　光行

奥小嶋　　伊豆　類字　隠岐国ニ有同名

八三〇五 新後撰　箱根路を我越くれはいつの海や奥の小嶋に浪のよるみゆ　鎌倉

大嶋　　同　名寄歌枕ニアリ

八三一五 名寄　雪晴て大嶋しろき朝なきにさこのはうかす興の釣舟　泰時　12ウ

大磯　浜浦　　相模　藻塩

八三二五 家集　おほ磯の浦に漕よする白浪のうちみてかへる程はまさしし　元真

八三三五 塩後　大いそにあさなゆふなにかつきする海士も我こと袖やぬるらん　仲実

八三四五 歌枕　大磯のこいその浦のうら風にゆくともしるすかへる袖哉　参議

八三五五 夫木　松のこたも波こす岩のけしき迄けふ見ところは大磯のはま　為相

大屋我原　　武蔵　名寄ニ当国或夫木三河

八三六五 百十四　いりまちの大やか原のいはねつたひはぬる〳〵わにな絶そね　無名

八三七五 現六　日のくれに大やかはらを分行はすかもか下にくひな鳴なり

大我井森　　同

八三八五 家集　紅葉もろ大かぬの杜の夕たすき文めにかろる山の端もなし　光俊　13オ

此歌は武蔵野を過けるにまとにやまは見え
すしておほかぬの森といふもりはかりわつか
に紅葉見えけるにまめるとゝ

大津　宮里波　近江

八三九五 万一 さゝなみの大津の宮に天の下しらしめらけん皇の　同
八四〇五 万三 我命まさきくあらは又も見んしかの大津にまする白波　定家
八四一五 拾玉 音羽山ふかき霞を分入は大津の宮そ春の花その　家隆
八四二五 同 心から大津の里の夕煙あきの霞になかめわひつゝ　同
八四三五 名寄 君か代は大津の浜の真砂もて数ととるともつきしとそ思　雅有
八四四五 同 昔おもふ袖こそぬるれさゝ波や大津の宮に匂ふたち花　法道田し
八四五五 同 舟とむる湊はいつくさゝ浪や大津の宮の秋の夕霧　俊頼
八四六五 新六 関越てくるれは帰る大津馬のをのか一つれ道いそくせ　経衡
八四七五 同 さゝ波や大津の宮は荒ぬれと春はふるさす立やとる我　人丸
八四八五 夫木 さゝ波や大津の宮に月すめは見えそわたれみおか崎まて　翰積朝臣
八四九五 同 秋の日もなからの山の紅葉は大津の里のかさしなりけり　慈鎮
八五〇五 同 おもひきや大津のかねの浦つたひかたつ枕にならん物とは　同

老曽杜　里　同

八五一五 塩後 涼しさに老その杜の下なれと夏てふ事を忘れにける　匡房
八五二五 六百 名にたてる老そのもりの下草も年わかしとや二葉成らん　家隆
八五三五 同 つゝめ共老そのもりの薄紅葉たえても色に出にける哉　後九条 13ウ
八五四五 拾玉 われは又まつに嬉しき命とて老その杜に鳴こともなし　為家
八五五五 同 郭公たれか告つるわかよふけて老その杜にあかす心を　衣笠
八五六五 同 ゑく露はをのか涙か鳴蟬の声もおひその杜の下草　資隆
八五七五 拾玉 夏たりて猶たつねれは時鳥おひその杜の下に鳴せ　隆祐
八五八五 同 聞人もおひそのもりの時鳥名残露けき六月の声　為家
八五九五 愚草 せやはうき霜よりしもに結をく老その杜の木のくち葉は　家隆
八六〇五 玉吟 いくかへりたか名もたちぬつもりゆく年も老その杜の霞に　同
八六一五 同 旅ねして結ふ枕も哀なりおひその杜の霜の下くさ　人丸
八六二五 夫木 かゝみ山たちのゝかけも猶見えて老その杜に積る白雪　翰積朝臣
八六三五 同 みやまよりいてゝやきつる時鳥おひその杜にまつき鳴らん　慈鎮
八六四五 同 東路の老そのもりの花ならは帰らんことを忘れましやは　同
八六五五 同 はこ〳〵共つきせさりけり御調物老その里の道の間もなく　匡房

大国里　近江　類字

八六六五 拾遺 年もよしこかひも えたり大国の里たのもしくおもほゆる哉　家隆 13ウ

大倉山　里　同　類字

八六七五 拾遺 ふもつむ大倉山はときはにて色もはゝ子す代やへん　衣笠
八六八五 後拾遺 動なき大くら山をたてたれは治れる世そ久しかりけ　資隆
八六九五 詠藻 かすしらぬ秋のかりほをつみてこそ大倉山の名はおひけれ　隆祐
八七〇五 名寄 いかにせん大くら山の時鳥おほつかなしと音をのみそ鳴　為家
八七一五 夫木 君か代を待しもしるく大倉の里のなからをみるかたのしさ　業盛 14ウ

大宮　同　類字

日吉大宮の本地を思ひいてゝ読る

八七二五 千 いつとなくわしの高根に住月の光を宿すしかの唐崎　性慧
大宮にみて奉りける歌に
八七三五 続古 霞にし鷲の高ねの花の色を日吉の影にうつしてそ見る　良仙

奥津嶋山　近江　仙覚抄ニ当国

八七四五 万十一 近江の海おきつ嶋山奥まけてわか思ふ妹に事のしけゝん　人丸 15オ

八七五　嵐吹さゝ浪やしかの湖見渡せば霞にしつむ奥つ嶋山
八七六　夫木　波間より見えしも浪のほかならで花咲かゝる奥つ嶋山
八七七　同　桜さくおきつ嶋山みわたせば波にかゝれる花の白雲
八七八　同　見渡せばみほのうらわの夕なぎになも波かゝるおきつ嶋山
八七九　単庵集　見るまゝにさゝ波たかく成にけり花咲ぬらしおきつ嶋山

大滝山　同　藻塩

八八〇　詠藻　布さらす麓の里のかすそへて卯花さける大滝の山

大嵩　同　類字

八八一　堀徒　ひえの山その大たけはかくる共なをみつのみはなかれてそふる
八八二　拾玉　山の端も又ならひなき大たけにさそはれ月のくまなかるらん
八八三　同　大たけの嶺さはかしく吹風をしつめすはいさ法の燈
八八四　同　大たけの高根に見ゆる秋の月宿の物とや君はなかむる
八八五　名　青いにしへの三輪のひはらの春霞たなひく末やひえの大嵩

陪膳浜　同　類字

八八六　拾遺　沸る時もあらしな近江なるおものゝ浜のあまの目つきは
八八七　家集　万代をもちそさかへん近江なるおものゝ浜のあまの日つきは
八八八　夫木　海士人もおものゝ浜のほまつとを月にあけぬといまやそかん

大回田　浜浦海　同　或類聚三駿河

八八九　名　青さゝ浪やしかの大わたよとむ共昔の人にまたもあはめや
八九〇　同　かち人の汀の氷ふみならし渡れとぬれぬしかの大わた
八九一　建仁歌合　螢飛しかの大わた波ふけて海士なき浦にあまのいさり火

兼意　光俊　従二位　隆祐　頓阿　俊成　俊頼　叡蓮　友将　慈鎮

八九二　類聚　わすれしな波の面影立そひて過る名とりの大わたの浦
八九三　夫木　浦遠きしかの大わた行過て里をかしの衣つなり
八九四　同　秋風は絶てなびきそわたの海のおきなる玉もわかつまてに
八九五　同　大わたの浜の松吹浦風にしかのてこらか袖かへる見ゆ
八九六　同　さゝ波やひらのみなとの山嵐に舞りわふるしかの大わた
八九七　十首　いとなをみるめも波の朝ほらけ霞にむかふしかの大わた

大山　近江　藻塩　丹後同名アリ

八九八　万二　さゝ波の大山寺はたか為か山にしめゆふ君もまさなくに

多師山　同　有藻塩

八九九　散木集　いかはかり涙のしくれ色なれはなけきおほしの山をそむらん

下立浜　同　藻塩

九〇〇　懐中　なき名をはすゝきやすると思ひしにとゆり立の浜にそ有ける

母山　美濃　八雲御抄当国紀歌五文字天象山ト　アリテ万二天和何又仙覚抄民歌当国人

九〇一　万　九おも山に霞たなひく小夜更て我舟はてん泊りしらすも

奥十山　同　藻塩

九〇二　万十二　日むかひに行屏むくをありと聞て我通ひ路のすきて山みゝ山

奥海　陸奥　類字

九〇三　続古　うしとても身をは何くに奥海のうのゐる君も波はかく見

九〇四　新千　よを寒み翅に雪や奥の海の河原の千鳥更て鳴せ
九〇五　同　奥の海やえそか君屋の烟たに思へはなひく風や吹らん
九〇六　夫木　たのめてもあたし心をおくの海のあらき磯へはよる舟もなし
九〇七　同　わか方はそむきの嶋の人なれはしらす心の奥のあら海

長明　知家　読人不知　後柔　衣笠　為尹　右川大人　俊頼　順徳院　為相　同　都盤井入道　後光条

知家　兼盛　知家　人丸　寂蓮　慈鎮

16オ　16ウ　17オ

奥牧　陸奥

九〇八五 拾玉東路のおくのまきなるあら馬をなつくる物は春の若草　躬恒

尾駮御牧　同　類子

九〇九五 後撰陸奥のおふちの駒も野かふには荒そてまきれなつく物かは　兼昌

九一〇五 後拾つな絶てはなれ果にし陸奥のおふちの駒を昨日見しかな　定家

九一一五 堀後きほひつるおふちの駒のさきたちてかつみる人も恋しかりけり　家隆

奥井　同　類子

九一二五 古今おきのゐてみをやくよりも悲しきは宮こ嶋への別れなりけり　小侍従

於母和久橋　同　藻塩

九一三五 山家集ふまはうき紅葉の錦敷しきて人も通はぬおもはくの橋　寂蓮

起居里　同　八雲御抄

九一四五 夫木時鳥おきゐの里は過ぬなりいかなる人の夢むすぶらん　顕昭

九一五五 同　衣うつ砧の音をしるへにておきゐの里を尋つるかな　行能

九一六五 同　よもすがら袂につたふ白露の起ゐの里に月をみる哉　忠茂

九一七五 同　しつのあか月におきゐの里とをみをき風しるく衣うつせ　俊盛

大野路　越中　藻塩　一説大和

九一八五 万十六おほのちはしけちはしけちしけく共君し通はゞ道は広けん　順徳院

大江山　丹波

九一九五 万十二丹波道の大江の山のさなかつら絶むの心我はおもはす　行意

九二〇五 六帖大江山霞たな引風吹てわれ舟とめん泊とめすも　俊成女

九二一五 家集歎のみ大江の山はちかけれと今ひと坂をこえそかねつる　矢内侍

九二二五 堀後思ふ事大江の山に世中をいかにせましと三度鳴也　範宗

九二三五 愚草夕涼み大江の山の玉やつら秋をかけたる露そこほる　定家

九二四五 玉吟大江山月もいく野の末ととゝみ玉ゆらまたすあくる空哉　家隆

九二五五 千五百大江山いくきいく野の道にもことをかたらふ時鳥かな　小侍従

九二六五 同　誰もみなあかぬ名残て大江山秋は生野のかたを詠めて　寂蓮

九二七五 類聚君か代にあふうれしさは大江山増井の水のたえしと思へは　顕昭

九二八五 夫木大江山夕立すくる木間より人日涼し き蜩のこゑ　行能

九二九五 同　大江山音の跡のたえぬはあまそる神も哀や見ん　忠茂

九三〇五 同　風吹大江の山の紅葉は里野にをれる錦なるらん　俊盛

小野　17ウ

九三一五 建保大江山しけみかもとにましりても人にしらゝ螢なりけり　順徳院

西行

九三二五 同　大江山行ゑすゝしき袂かな生野の末に秋のきぬらん　行意

九三三五 同　よひなから明行袋半のなこりきへ大江の山に月そかたふく　俊成女

九三四五 同　大江山やけゆく道のやすらひにしはしなれぬるうつ蟬の声　矢内侍

九三五五 同　夏草のしけみの露は大江山こえて生野の末もとをこに　範宗

九三六五 同　大江山われよりさきに行人も宿やとふらん日くらしの声　康光

孝継　同　藻塩

九三七五 名寄おくも河ひとたひすめるしるしにはけふそ千年の初め也ける　匡房

九三八五 名寄四方の海もおくそはあらめおくも河日も波の立時そなき　19オ

九三九五 藻塩おくも河あらふる神もなこむ迄ゆふとりして御祓をそする　光俊

大山　丹後　藻塩

九四〇五 名寄春霞たちわたるなり橋立や松原こしのまきの大山　光俊

九四一五 夫木待人はゆきとまりつゝあちきなく年のみこゆるよさの大山　泉式部

無名　18オ

無名

素性

九四二五　万四　おうの海の塩干の潟の片思ひに思ひやゆかん道のなかてを　　元真

飫海　　出雲

九四三五　新勅　おうの海の思ほぬ浦にとす塩のすてもあやなく立煙哉　　家隆

九四四五　名寄　寒る夜は霜もいくへかおうの海の川原の千鳥月うらむも　　為家

飫宇河原　　同　類字

九四五五　万三　おうの海のかほうの千鳥なか鳴は我佐保河のおもほゆるかに　　和泉式部

九四六五　新古今　五月雨はおうの川原のまこも草からてや波の下に朽なん　　為尹

大嶋　　播磨　備前周防ニ有同名

九四七五　堀百　よもすがら大しま嵐おろす也高砂舟は今そ出へき　　門部王

大蔵谷　　同

みくさ山をとをりて大くら谷と云所にて

九四八五　風雅　今むかふかたはあかしの浦ながらまだ晴やらぬ我思ひかな　　敦蓮法師

大嶋　　備前　類字播磨周防ニ有同名

九四九五　夫木　大しまの松吹声に聞ゆなるみちある時の秋の初風　　家隆

九五〇五　同　大嶋やをちの塩あひを行舟のかち取あへぬ恋もするかな　　19ウ

九五一五　同　さりともと身のうき事は大嶋の神の心をたのむ斗そ　　門部王　入道前関白太政

九五二五　夫木　大嶋や波間にいそく早舟のほにも出すて恋渡る哉　　隆源

大河　　備前　藻塩

九五三五　名寄　大河のをちかた野へにかるかやのつかの間も我忘られぬやは　　周防

大嶋　　周防

九五四五　万十五　つくし路のかたの大嶋しましくもみねは恋しき妹を置てき哉　　無名

九五五五　現六　大嶋のなたのかちに塩みちて今日はなるとに泊ぬる哉　　元真

九五六五　象集　大嶋の鳴門の浦も漕かたきうへとの波もかくや有らん　　家隆

九五七五　玉吟　あさ衣かたの大嶋行まひあはて此よや波にしほれん　　為家

九五八五　夫木　逢事のかたの大嶋いたつらに心つくしの波にぬれつゝ　　和泉式部

九五九五　同　声をたにかよはんことは大嶋やいかになるとの浦とかは見し　　為尹　20ウ

九六〇五　千百　大嶋のなるとを過る程なれや夜舟にちかき松風の声

面影山　　長門　藻塩

九六一五　六帖　わかせこか面かけ山のさかさまに我のみ恋てみぬはねたしも　　坂上郎女

九六二五　名寄　別にしつらさや今も残るらん面影山の有明の月　　伊賀母

九六三五　夫木　いなはよにとはまし物をこひしのみ忘れかた見の面影の山　　祐挙

九六四五　同　すみのほる俤山の月見れは心も空にうつりぬるかな　　忠朝

大葉山　　紀伊　八雲御抄并仏覚抄ニ当国

九六五五　万七　大はは山嶮嶺引さよ更て我舟はてん泊りしらすも　　無名

大我野　　同　八雲御抄

九六六五　万九　大和には聞えもゆくかおぼかの竹葉苅しき庵りせりとは　　無名

雄山　　同

九六七五　夕暮　朝夕になく音をたつるおの山は絶ぬ波音なしの滝　　21オ

九六八五　夫木　おの山の上より落る滝の名の音なしにのみぬるゝ袖かな　　西亦

九六九五　名寄　いかにしていかによるらんおの山のうへよりおつる音無の滝　　元輔

興嶋　　紀伊

九七〇五　万十六　さひかのにそかひに見ゆるおきつ嶋漕こなきさに風吹は　　赤人

九七一五 同　奥つ嶋荒磯の玉も塩みちていかくれゆかばおもほえんかも
九七二五 同十八 奥つ嶋いゆきわたりてかくてふあはび玉もかつみてやらん
九七三五 同　わきも子が心なくさにやらんため奥つ嶋なる白玉もがも
九七四五 新六 おきつ嶋月は入ぬるあがつきのなみまにのこる海士の漁火
九七五五 御集 奥つ嶋あまの磯屋の藻塩草かく数なりてまをやつきなん
九七六五 一本抄よもすがらいさりやせまし夕暮に奥つ嶋へに通ふあま舟

大崎　土佐　藻塩

九七七五 万六 大崎の神の小浜はせはけれと百舟人も通といはなくに
九七八五 同十二 大崎のありその渡りはふ葛の行ゑもなや恋渡りなん
九七九五 名寄千早振神の小浜に舟とめて大崎みれは月のさやけさ
九八〇五 夫木 大崎のありその渡り霧こめて遠かた声に舟よはふ也
九八一五 同　末とをき千世のかけこそ久しけれきた二葉なる大崎の松

大浦　筑前　藻塩　戎伊勢

九八二五 万十六 あらきとしかの行にし日よりしかの海士の大うら田ゐは悲しくも有か

大城山　同　仙覧抄与国

九八三五 万八 今もかもおほきの山に時鳥鳴とよむとうん我なけれ共
九八四五 万十 いちしろく時雨の雨はふらなくにおほきの山は色付にけり

大野山　筑前　仙覧抄与国御笠郡

九八五五 万四 思ひぬを思ふといはゝ大野なる三笠のもりの神しるらみ
九八六五 同五 大野山霧立渡る我歎くおきその風に霧立渡る
九八七五 現六 大野山麓のうらは霧こめて奥その風に月そさやけき
九八八五 名寄 大野なる三笠のもりにしくれふるそめすす紅葉今盛なり
九八九五 同　大野なる三笠の社のほうかしは神のしらす幾代さすらん

大渡河　同　藻塩

九九〇五 六帖 つくしなる大わたり川大かたは我ひとりのみ渡るうき世か　貫之

思河　同　類字

九九一五 六帖 なかれても絶しとそ思ふ思ひ河いつれか深き心なりける
九九二五 六 百つれなしと人をそ更に思ひ川あふ瀬もしらぬ身を恨ても
九九三五 愚草 かけをたにあふせにむすへ思ひ河うかふみなはのけなはけぬ共
九九四五 玉吟 思ひ川かけ見し水の薄氷かさなる夜半の月もうらめし
九九五五 同　思ひ河みなはさかまき行水の袖のつゝみもせきやかねてん
九九六五 夫木 くるゝ夜ほうきて登の思ひ川うたかた誰に消ほかぬらん
九九七五 同　音たえて春間にこほる思ひ川忍ふもしらす鳴千鳥哉
九九八五 同　思ひ河絶すなかるゝ水鳥のきのか羽風も風吹ころ
九九九五 同　思ひ河みわたにおゝる埋木のなかれてさへや名こそ惜けれ
〇〇〇六 同　思ひ川しからむ水のわきかへるいはまほしさをまつもらさはや
〇〇一六 同　言の葉をなかしそめつる思河かへらぬ波に跡をみるかな
〇〇二六 同　思ひ河人のうき瀬にゐる鷺ののそきてたにもあふよしそなき
〇〇三六 題林 更行はおなし登の思ひ河独はもえぬ影を見ゆらん
〇〇四六 同　せきかへす心ひとつはおもひ川いく年なみの下にくちなん
〇〇五六 同　とゝまらぬならひもうしや思ひ川なかれあふせの又もなけれは
〇〇六六 万葉集 思河希なる中になかるありこれにも渡せかさきのはし
〇〇七六 新集 おもひ川なかるゝ水のあはれともいふ人なしに消かへりつゝ

大隅浦　大隅

同　大隅　家持
同　知家
後鳥羽　国基
21ウ
乙麿卿　無名
光俊
孝氏
経光
同　類字
貫之
22ウ
兼宗
定家
家隆
同
為家
同
忠信
後鳥羽
為家
同
衣笠
信家
23オ
為藤
公雅卿
家隆
読人不知

山上憶良
坂上郎女
22オ
無名
大伴百代
無名

○〇八六 懐中　我だめにつらき心は大すみのうら見んとたにおもほえぬかな

奥小嶋　　薩摩　類子

○〇九六 千　さつま潟奥の小嶋に我はありとやにほつけよやへの塩風

大野河原　　未勘

○一〇六 万十一　まこもかるおほの河原のみこもりに恋し妹か紐とくわれは

○一一六 夫木　鳴千鳥我さへかなし白菅のおほの河風さむくふく也

○一二六 同　白すけの大野の河原の河千鳥鳴夜の月の影の寒けき

大田松　　同

○一三六 家集　三葉より今ほおほだの松の葉の幾代か君をこひてへぬらん

○一四六 夫木　いかせん色もかはらぬつらさのみ大田の松のさても朽なは

荻原里　　同

○一五六 名寄　神無月やゝ霜寒し朝ごとにかれはすくなき荻原の里

○一六六 同　風ふかぬうとみやすらんおほつなのとかに思へ荻原の里

奥野　　同

○一七六 堀百　朝ごとに見れともあかす白露のおくのゝ萩の秋のけしきは

奥津小嶋　　未勘

○一八六 万七　みなきりあひおきつを嶋に風をいたみ舟よせかねつ心は思へと

思森　　同

○一九六 夫木　みひとつなみたに染て下紅葉思ひの杜は色付にけり

押垂小野　　同

○二〇六 万十六 長歌　羽こ酒をおしたれきのに出る水ぬるくはいてす寒水ヒヤ

の心もけやにおもほゆる音のすくなき道にあひぬかも

於河里　　同

○二一六 夫木　白波のかゝる汀と見えつるは於川の里にさける卵の花

於与見能橋　　同

○二二六 家集　小夜更てゆみの橋を引渡す音にそしるきあたちのゝ駒

平康頼

人丸　23ウ

○二三六 家集　くらま山くらくこゆれと時鳥かたらふ声をそれとしらすや

衣笠

○二四六 拾玉　鞍馬山すゝのしのやの奥迄も法のまもりのうきふしはなし

行能

○二五六 夫木　霞たつくらまの山のうす桜てふりをしてな折そわつらふ

○二六六 同　是や此音にきつゝうす桜くらまの山にさける成へし

○二七六 同　紅葉ゝの色のあかさにめをつけて鞍馬の山によるたとる哉

兼盛

○二八六 名寄　感ありて人のまうつる鞍馬山をこなふ法はそは成けり

具氏

○二九六 万寄集　五月雨にくらまの山の時鳥たとる〳〵も鳴渡る覽

○三〇六 良玉　いとおしやくらまのあつけいかなれはたつとみえすといふにあるらん

後徳大寺左大臣

隆源

24ウ

鞍馬山　　山城　類子

○三一六 家集　くらま山くらくこゆれと時鳥かたらふ声をそれとしらすや

清正

○三二六 家集　思ひやるくらふの山の紅葉ゝにおとらぬ物は心なりけり

慈鎮

○三三六 同　霧はれぬくらふの山の蔦にはまよひの月を見る程そなき

顕季

○三四六 愚草　五月やみくらふの山の時鳥ほのかなる音にしる物そなき

定家

○三五六 同　宿りせぬくらふの山をうらみつゝはかなの春の夢の枕や

同

○三六六 玉吟　人しれすくつるたくひや我神にくらふの山の谷の埋木

家隆

○三七六 類聚　墨染のくらふの山の深けれは鳥の跡さへ見えすも有かな

義存

○三八六 夫木　くらふ山したてる道は三千年に咲なる桃の花にそ有ける

医房

○三九六 同　さ月やみくらふの山の時鳥声はさやけき物にそ有ける

顕季

○四〇六 同　待かねてくらふの山のたそかれにほのかに名のる時鳥かな

為忠

晴部山　　野辺　同

○三一六 家集　くらふ山の蔦の野への女郎花露の下よりうつしつる哉

有忠

○三二六 家集　思ひやるくらふの山の紅葉ゝにおとらぬ物は心なりけり

元輔

○三三六 同　霧はれぬくらふの山の蔦にはまよひの月を見る程そなき

同

○三四六 愚草　五月やみくらふの山の時鳥ほのかなる音にしる物そなき

定家

○三五六 同　宿りせぬくらふの山をうらみつゝはかなの春の夢の枕や

同

○三六六 玉吟　人しれすくつるたくひや我神にくらふの山の谷の埋木

家隆

○三七六 類聚　墨染のくらふの山の深けれは鳥の跡さへ見えすも有かな

義存

○三八六 夫木　くらふ山したてる道は三千年に咲なる桃の花にそ有ける

医房

○三九六 同　さ月やみくらふの山の時鳥声はさやけき物にそ有ける

顕季

○四〇六 同　待かねてくらふの山のたそかれにほのかに名のる時鳥かな

為忠

25オ

○四一六 同　月よりも出きたらてよひのまのくらふの山に鳴時鳥
○四二六 同　君が代にくらふの山のみねにおふる松は千とせをかきる斗そ
たとふへき物こそなけれ君が代にくらふの山の松の千とせを
○四三六 同　夫木くらふ山かこふしはやのうち迄も心おきあぬ所やほある
○四四六 夫木　くらふ山秋の月よにみれはあのし峯にもみちやいとゝ照らん
○四五六 同　女郎花くらふの野への種ならは人にこえたる色そ見えまし
○四六六 同

久世　社　野原　山城　八雲御抄　和名二久世郡

○四七六 万七　山城のくせの社の草なる手折そをのか時立さかゆとも草なる手折そ
○四八六 同九　山城のくせの鷺坂神代より春は張つゝ秋はちりけり
○四九六 同十一　山代のくせの若子かほしとゝふれあふさはにほしとゝふ山城のくせ
○五〇六 同　玉くせの清き川原に御祓して祈る命も君がためなり
○五一六 名寄　山城のくせの野原のしの薄玉ぬきあへぬ風の白露
○五二六 同　神代より時雨降にし山城のくせの鷺坂紅葉しにけり
○五三六 夫木　けふはまたあさの露もる玉くせの清き河原にいさ御祓せん
○五四六 夫木　玉くせの河瀬を清みねさ立て千とせを祈る夏はらへしつ

草河　山城　蘇塩松川八白河ノ辺也

○五五六 新六　夕涼み帰るさ休むますらを男のかりてすゝける草河の水

雲居寺　同　蘇塩

○五六六 名寄　久方の手にとるはかり成にけり雲ゐるてふ寺に宿りて
○五七六 夫木　山桜花のさかりに尋きてくもゐる寺の名をみつる哉
○五八六 同　雲ゐ寺ふくかひきけはかへるなりかりかねにそよは成にけれ
○五九六 同　すむ月をみたのみかほに詠れは雲ゐる寺も名のみなりけり

後九条鎌倉隆信 西行 好忠 清時 人丸 無名 人丸 同 定家 家隆 後九条 26オ 顕朝 衣笠 悪慶 為家 仲正 式部大夫

○六〇六 同　雲ゐ寺霞ふきとく春風に乱てけりな青柳の糸
○六一六 同　しらぬよのふかき煙も晴ぬしん雲ゐ寺を出るひかりに

雲林　寺森　同

○六二六 帖二　白河に玉しけり共見えなくに雲のはやしをあしつる哉
○六三六 夫木　見渡せは雲の林の浅みとり柳は花にをとりけり
○六四六 同　今そしる雲の林のほしはや空にみたる蛍なりけり
○六五六 帖　木の本におらぬ錦のつもれるは雲の林の紅葉なりけり
○六六六 夫木　こ帖聞雲の林の寺ならんはなを尋ぬる心やすめん
○六七六 同　きせはや哀をしらん人もかな雲の林のかりの一声
○六八六 名寄　さはきなき雲の林に入ぬれはいとゝ浮世のいとはるゝ哉

久迩都　宮　同　仙覧二当国

○六九六 万四　今そしるくにの都に妹にあはす久敷成ぬ行てはやみん
○七〇六 同六　今つくるくにの都は山河の清く見ゆれはうしらるし
○七一六 万八　今つくる久迩の都に秋の夜のなかきにひとりぬるかくるしさ
○七二六 同十七　山城のくにの都は春されは花咲をくり秋されはもみち
○七三六 同六　みかの原くにの都は山たかみ河の瀬清しゆきてやほ見ん
○七四六 愚草　みかの原くにの都の山越て昔や遠きさほ鹿の声
○七五六 玉吟　辰の市や千年をかけてくる民もくにの都の我君かため
○七六六 名寄　沢田川袖つくはかりあきさせやくに宮人のたかほしわたる
○七七六 夫木　槙のたつあら山出る時鳥くにの都に五月つくなり
○七八六 同　泉河河風寒し今日よりやくにの都は衣うつらん
○七九六 同　みかの原ふりにしくにの都にも山と河とも跡のこりける
○八〇六 同　さひしきも誰かはきかん泉河くにのみやこの松の秋せ

小大進 家隆 26ウ 大宮 経信 貫之 西行 和泉式部 大坂上樵 家持 27オ 家持 老僧 定家 家隆 行能 中務 光明峯寺 法華寺 海印寺

二八一

栗栖小野　野辺　原水室　山城　類字

○八一六　万六　さし杉つくるすの小野の青つら末葉さしそへ茂る比哉　衣笠
○八二六　新六　永日もくるすの小野の萩の花ちらん時にし行て手向ん　為家
○八三六　同　白妙の玉をとけてかた原のくるすの小野に霜ふる也　伯耆
○八四六　名寄　たつぬともなくてくるすの夕暮に心とむる虫の声哉　意尊
○八五六　夫木　風吹は栗栖の小野の糸薄たよりにのみとなひくなりけり　長方
○八六六　同　すかる山すくるすの小野の糸薄まそほの色に露やそむらん　親澄
○八七六　同　鶉なくくるすの小野の夕まくれほのあき渡る花薄かな　経信
○八八六　同　春もみる三室のあたりけを寒みやくるすの雪の村消　山田法し
○八九六　同　狩人のたえすと聞し栗栖のにいつ迄とてか鶉なくらん　為顕
○九〇六　同　葛かつらくるすの原の秋風にむかしをかけて身を恨つ　後鳥羽
○九一六　御集　秋はけふ栗栖の小野のまさき原まだ朝露の色そにほぬ　公朝
○九二六　夫木　時うつるくるすの小野の桜かりふるぬの萩をふみしたきつ　季経
○九三六　夫木　わらひおりしくるすの小野をきてみれは雪降にけりほろ〳〵に　相撲
○九四六　同　くるすのゝひむろの氷いつ迄かむすほれつゝとけしとすらん　大伴卿

車河　山城　春雨抄ニ当国　仙覚抄ニ当国城上郡　丹後ニ有同名

○九五六　夫木　くるま川いふなやなとてなかれけんおそろしけにも見えぬわたりを　和泉式部
○九六六　万三　くら橋の山を高みか夜隠に出くる月の光ともしき　間人宿禰
○九七六　帖　くら橋の山の雪にもあらなくに待人へに身のふりぬらん　貫之
○九八六　象集　白雲のたなひきゐたるくらはしの山の松とも君はしらすや　慈鎮
○九九六　拾　玉　うれしくもくら橋山の峯つゝき国をおさむるひしりこそすめ　同
一〇〇六　同　霧晴ぬくらはし山の秋風は昔にや月を聞わたるらん　同
一〇一六　同　ほの〳〵とまたくらはしの五月雨に山かくれゆく時鳥かな　人丸
一〇二六　帖　爰にのみありとはいひてくら橋の岑の白雲たゆたひにけり　隆信
一〇三六　名寄　行かよふ人たに見えすくら橋の岡辺の道に積る白雪

久米路　葛橋　岩橋　谷神川　同　類字

一〇四六　六帖　かつらきや渡すくめちの継橋の心もしらすいき渡りなん　為家
一〇五六　清正　象集　かつらきやくめの継橋つき〳〵も渡しもはてしかつらきの神　伯耆
一〇六六　堀俊　かつらきやくめの岩橋ふみぬはは渡りかたしと空にしりぬる　意尊
一〇七六　六百番　かつらきやくめち橋にあらぬ井絶ぬる中は渡る物かは　親澄
一〇八六　名寄　かつらきやくめちの谷の村霞とたえは橋にかさしさりけり　仲実
一〇九六　愚草　身のうきは久米路の橋も渡らねと未もとまらぬ道まとひけり　季経
一〇〇六　玉　吟いかにせんなからもおなしくちすとて渡しもはてぬくめの岩はし　隆房
一〇一六　千首　はれくもり足なきよの月影に久米路の神のこゝろいかにそ　家隆
一〇二六　名寄　ふる雪にとたえもみえす成にけり渡はてなくめの岩はし　公継
一〇三六　名寄　みかりする君帰るとてくめ川にひとことぬしそ出まさりける　業宗
一〇四六　夫木　かつらきやくめの継橋ならなくに渡しはやましくめのかけちに　有恒
一〇五六　同　時鳥鳴音ほとなく明るまに契みしかきくめの岩橋
一〇六六　同　ちりつもる紅葉の錦わたらてもなかほ絶けるくめの岩はし　知家
一〇七六　同　さりともと祈りし中のたえしよりあふ事かたき久米の岩はし　為家

口無山　大和　葉塩

一〇八六　名寄　大和なる口なし山の山かつほいはてそ思ふひとつに　家隆

棹業宮　河内　類字　和名ニ交野郡

一〇九六　続古　曇らしなますみの鏡かけそふるくすはの宮の秋のよの月　関白大臣

椋橋山　大和　仙覚抄ニ当国城上郡　丹後ニ有同名

○九六六　万三　くら橋の山の雪にもあらなくに待人へに身のふりぬらん
○九七六　帖　くら橋の山の峯つゝき国をおさむるひしりこそすめ
○九八六　象集　白雲のたなひきゐたるくらはしの山の松とも君はしらすや
○九九六　拾　玉　うれしくもくら橋山の峯つゝき国をおさむるひしりこそすめ
一〇〇六　同　霧晴ぬくらはし山の秋風は昔にや月を聞わたるらん

草苅里　同　藻塩

一二〇六 名寄ふる川の入江のあしは霜かれてさびしく成ぬ草かりの里

草香山　摂津　類字

一二一六 万八をしてるや難波を過て打なびく草香の山をけふ見つる哉

一二二六 現六露ふかき草かの山を秋越てしほる斗に袖そぬれぬる

一二三六 新六浅みとり四方の木のめも萠いつる草かの山に春雨そふる

茎渡　同　藻塩

一二四六 堀百ほへせし芳もまばらに枯ほてこくきの渡りもさびしかりけり

百済　河野　同　八雲御抄井勅撰名所集百済郡

一二五六 万二思ひもいまつきねは言りへくくたらの原に神ほふり　人丸

一二六六 長歌

一二六六 同八くたら野の萩の古枝に春待とすみし鶯鳴にけんかも　赤人

一二七六 帖くたら河かはせをはやみあか駒のあしのうち間にぬれにけるかも　人丸

一二八六 同　君こふと衣のすそをくたらの山の小川のやせこそわたれ　家持

一二九六 堀後くたら野のもやかしたの姫ゆりのねところ人にしられぬそうき　仲実

一三〇六 夫木くたらの萩の古枝の鶯も今そ鳴とし春のきぬれは　中務

一三一六 同　くたらの古枝の萩の花見れは今年斗の秋としもなし　土御門

一三二六 同　百済のさゝめか下にふす鶏ねやもあらはに冬はさにけり　道因

一三三六 同　世中にしつむとならはくたら河なかれうせぬるかか身ともかな　俊頼

久良部留峯　伊勢　藻塩

一三四六 藻塩たけちほのくらふる峯そあふかるあめのおすめの始思へは

久岐田関　同　八雲御抄　藻塩等当国

一三五六 集裏巻もりにけるくきたの関を河口のあさきにのみはおほせさしなん

栗間　同

一三六六 海道記 たちはなれひとりくるまのいな莚旅ねのなかの旅そ悲しき　長明

櫛田河　同　八雲御抄　和名云多気郡

一三七六 名寄君かすむくし田河にや乱れたるかゝの心も打とけぬらん　俊頼

雲津崎　同　藻塩

一三八六 名寄いせ嶋や月のみふねはよきてふけ雲つか崎の松の村立　大中臣親寺

黒田里　尾張

一三九六 夫木をちこちも今はた見えすむは玉の黒田の里の夕闇の空　為相

玖岐崎　駿河　藻塩

一四〇六 夫木波の花くきかさきより散くあり木末もみえす風のはやきに　上総

一四一六 名寄人を分心はうしとそむけ共にくきか崎にまつもたつせ　読人不知

黒戸浜　上総　藻塩

一四二六 藻塩まとろましこよひならてはいつか見んくろとの浜の秋のよの月　孝標女

一四三六 名寄うへてみる所の名にもに似物はくろとに咲る白菊のはな　師光

久自河　常陸　八雲御抄

一四四六 万せくし河はさきくありまて塩舟に真楫しぬきわは帰こん　丸子朝佐

地祇　近江　藻塩三地祇ト書テクニカミト読也 是八山王社ナリ三宮ノ地主権現ナリ故也

一四五六 万一さゝ波の国つかみの浦さびて荒たる都見れはかなしも　高市古人

一四六六 同廿七みちのなかにくにつみかみはたひゆきもししらぬ君をめくみたまはな

一四七六 夫木やしまもろくにつみかみにいのりをきて千とせは君か心なりけり　小侍従

一四八六 同　さゝ波や国つみかみのますかゝみかけて出たる月のさやけさ　光明寺

草津　同

一四九六 千首　草津より浜に出たる方なれやはやあにかゝるしかの浦舟　無名

桑原浜　同　藻塩　和名三高嶋郡

一五〇六 藻塩　皇の御代はつきせしほはらの浜田は三度海となるとも　読人不知

黒津里　近江　藻塩

一五一六 名寄　つがなみのうへにはなく〜旅ねして黒つの里になれにける哉　為尹

一五二六 同　つがなみのうへはくろつになるれとも下のねくさにしく物そなき

暗部里　近江　類字

一五三六 玉葉　いにしへに今をくらふの里人は代にこえたるみしねをそなく　俊重

朽木杣　山　同　類字

一五四六 堀後　身をしる雨におほれて朽木の山の杣人に成ゆく身をも　俊頼

一五五六 類聚　もみもせし昔の跡をしのひてや朽木の杣に宿る月かけ　仲実

一五六六 新六　昔たれはやし初て今はまた朽木の杣の名なへふりぬる　土御門

一五七六 御集　秋の露に袖も朽木のそまかたに道まとふ鹿の声そ身にしむ　知家

一五八六 夫木　さゝ波の大山もりのしめゆへに朽木の杣の花さかりかも　公朝

一五九六 千首　五月雨は河音たてゝ高嶋や朽木の杣木引人もなし　宗良

栗本里　同　類字

一六〇六 金葉　近江てふ名はたかゝ嶋にきこゆれといつかは爰に栗本の里　読人不知

黒田河　美濃　藻塩

一六一六 名寄　あにたてぬ人なかりけりむは玉のくろ田の河によれる白波　長明

八十一隣宮　池　同

一六二六 万十　百くさねみの国の高きたのくりの宮に日むかひに　無名

一六三六 夫木　いとねたしくりの宮のいけに住恋ゆへにあさむかれぬる　読人不知

一六四六 同　たのあたくりの池に住と聞恋そ常のしるへとはなれ　光頼

位山　飛弾　類字

一六五六 堀後　くらゐ山嶺の椎柴としふともうつろふ色はあらしとそ思ふ　大進

一六六六 同　紫の初もとゆひを結ふより君かくらゐの山をしそ思ふ　常陸

一六七六 百　くらゐ山みちの椎柴年ふりて越行人そうしやまれける　隆信

一六八六 象集　位山岑につきぬる杖見れはたゝ行末のさかのためには　元輔

一六九六 愚草　咲まさる位の山の菊の花こきむらさきに色そうつろふ　定家

一七〇六 玉吟　君のいはふよはひも高し位山見しよにもあへなかき玉の緒　家隆

一七一六 同返事　くらゐ山日吉のかけをさしそへて見し世にあへる長き玉の緒

一七二六 千五百　位山のほりたちにし椎柴の道にまよひて老にける哉　隆信

一七三六 拾玉　位山また見ぬ峯もぬかほれすさかゆく〜くもなき身と思へは　慈鎮

一七四六 同　位山さかゆく峯にのほりとてまことの道をよそに見るかな　同

一七五六 同　いひをきし心もしらしまとかなる位の山にすめる月かけ　同

一七六六 同　位山岑には近くのほりゐぬ猫こえすとも立帰りなん　同

一七七六 夫木　よそにても聞そうれしき位山たかきにうつる鶯のこゑ　有季

一七八六 同　代をてらせかけなひくほしの位山なをさかゆかん末も遥に　後村上院

一七九六 新葉　位山越てもさらに思ひしれ神もひかりをそふる世そとは　為忠

一八〇六 同　君か代にあへはそこゆる仕へきみもやくらゐの山路成覧　前内大臣

一八一六 同　身にあまる御代の光に位山くらしかるへき峯は越にき　久米路橋　信濃　類字

一八二六 拾遺 埋木は中虫はむといふめれはくめちの橋は心してゆけ　読人不知

久路保　上野　藁塩

一八三六 万十四 かみつけのくろほのねろのくすはかに恋しけるらにいやさかりくも　無名

群馬里　同　和名抄国群馬郡

一八四六 懐中都より尋くるまの里人はひとねの河をや渡さるらん　秀頼

黒髪山　下野　仙覚抄国

一八五六 万七 むは玉のくろかみ山を朝越て木の下露にぬれにけるかな　長明

一八六六 同十一 むは玉の黒かみ山の山すけにさめ降しきます〳〵そ思ふ

一八七六 堀百 旅人のますけの笠や朽ぬらんくろかみ山の五月雨の比

一八八六 同 むは玉のくろ髪山に雪ふれは名もつもるる物にそ有ける　人丸

一八九六 同 むは玉の黒髪山のいたきに雪もつもらはしらかとや見ん　同

一九〇六 夫木 なかむくちりなん事を君も思へ黒髪山に花咲にけり　公夏

栗田　陸奥

一九一六 七帖抄 栗田の秋にむすふあやめ草玉くり江に引はなりけり　俊頼

栗狛山　同　藁塩

一九二六 帖 くり狛の山に朝たつ雉よりもわれをはかりに思ひける哉　隆源

一九三六 同 陸奥の栗狛山のほりの木の枕はあれと君か手まくら　西行

一九四六 家集 もみち見る栗狛山の名所をいさわか宿にうつしもたらん

一九五六 夫木 御狩するくりこま山の鹿よりもひとりねるさは悲しかりけり

一九六六 同 いかてわか栗狛山のもみち葉を秋はつとも色かへてみん　能宣

一九七六 同 くり狛の松にはいと年ふれとことなし草そ思ひそめける　読人不知

同

栗原　同　藁塩 并和名栗原郡

一九八六 伊勢物語 くりはらのあねはの松の人ならは宮このほとにさとはましを　同

一九九六 十五百 くり原のあねはの松をさそひても都はいつとしらぬ旅かな　秀頼

二〇〇六 夫木 古郷の人にかたらんくりはらやあねはの松の鶯のこゑ　長明

朽木橋　同　類字

二〇一六 風雅 あふ事は朽木の橋の絶〳〵に通ふ斗の道たにもなし　朝定

二〇二六 堀百 陸奥の朽木の橋も中絶てふみたに今はかよはさりけり　河内

二〇三六 玉吟 谷河の朽木の橋も埋木の人にしられぬ道や絶なん　家隆

黒塚　陸奥　類字

二〇四六 拾遺 陸奥のあたちの原のくろ塚におにこもれりと聞は真か　兼盛

二〇五六 新六 安達野の原の黒塚おにこめて心にくくも世を過すかな　為家

二〇六六 建保 わかためはこれやあたちの黒塚にゆふくさわけて人はいりにき　同

二〇七六 夫木 こせりつむ春の山田のくろ塚にあたちのまゆみ霞たな引　寂念

雲洟　若狭　藁塩

二〇八六 懐中 遥にもおもほゆるかな雲洟のあまの河原に行やかよへる　人丸

黒戸橋　越前　藁塩

二〇九六 名寄 誰そこのね覚てきけはあさむつの黒戸の橋をふみとろかす　能宣

久毛津　能登　藁塩

二一〇六 堀後 くもつよりすゑくりするこし舟の沖漕さかるほのくにみゆ　読人不知

熊来　同　和名能登郡

二一一六 万十六 階楯（シナタテ）のくまきのやしろに新羅斧（シラキ）おとしいるさわしかけてかけてなかしそぬ　同

二二二六　同　階補のくまき酒やにまのしろのゆしさすひ立みてきなましをまのしろのわし　同

二二三六　同十七　かしまよりくまきをさして漕舟の梶取まなく都しぶもほゆ　大伴家持

雲田村　丹波　類家

平治元年大嘗会主基方稲春歌丹波国雲田村を読ル

二二四六　千載　天地のきはめもしらぬ御代なれは雲田の村の稲をこそつけ　範兼

36オ

桑原里　同

大嘗会主基方丹波国くはらの里を

二二五六　家集　くはらの里の引まゆひろひをきて君がやちよの衣いとに女ん　重之

紅村　同　藻塩

二二六六　藻塩　てらにそ色も見えける朝日影にほへる梅の紅のむら

倉岡　同

二二七六　夫木　大嘗会主基方　倉岡家集　乙女子か袖ふりはへてくら岡に千年の春の若なつむらん　匡房

36ウ

倉椅山　丹後

勅撰名所集ニ当国余佐郡

二二八六　万七　橘立の倉橋山に立る白雲みまくほり我する苗に立る白雲　人丸

二二九六　同　橘立の倉橋河の石の橋はもみさかりに我渡りたり石の橋はも　同

二三〇六　同　橘立の倉橋川の河の静菅(シヅスガ)我対て並にもあるす河のしつ菅　同

二三一六　草庵集　飛ほたるもえこそめたれ橘立のくらはし河のくらき波間に　頓阿

隈関　出雲

此歌ナン関ト同ニ歌也(ヘ)雲御世チヤノ関ト書テ又ハ関ヲ見ルヲ(ヘ)ケルトモ名寄抜塩ニモ同様ニ用オレハ今之関ヲ二載ス

二三二六　名寄　八雲たつ出雲の国のくまの関いかなるくまに君さはるらん

久米左良山　美作　類家

二二三六　六帖　みまさかやくめのさら山いなひのいな〳〵君はさらにならまし　伊勢

二二四六　家集　みまさかやくめのさら山さら〳〵に苦〳〵の恋しやなそ

二二五六　古今　みまさかやくめのさら山更々に我名はたてし万代迄に

二二六六　詞花　みまさかやくめのさら山と思へ芙和歌の浦とそ云へかりける　師頼

二二七六　御集　音に聞くめのさら山さら〳〵にをのか名たて降雪かな　俊鳥羽

36オ

黒上山　備中　類家

文応元年大嘗会主基方神楽歌に

二二八六　新千　色かへぬくろ上山の山かつらかくてやひさにつかへまつらん　行家

倉垣里　同　藻塩

二二九六　藻塩　くらかきの里になみよる秋の田は年なかひこのいねにそ有ける　匡房

口無泊　備後　藻塩

二三〇六　家集　口なしの泊と聞は身にしみていひもやられぬ物をこそ思へ　俊頼

黒牛海　潟　紀伊　仙覚抄ニ当国

二三一六　万七　くろ牛の海紅匂ふ百敷の大宮人あさりすらしも　無名

37ウ

二三二六　同九　くろ牛潟塩干の浦を紅の玉もすそひき行はたがつま　同

二三三六　同　古家に妹とわか見しぬはたまのくろ牛潟をみれはさふしも　同

二三四六　塩百　くろ牛潟漕いつるあまの友舟は鱸つるにや波もわくらん　顕仲

熊野浦　山城　同

二三五六　家集　うき事も山道しらすたつねこし我みくまのに入やしなまし　信明

二三六六　塩百　われからと思ふ物からみくまの恨てのみも過しつる哉　河内

二三七六　同　後みくま野のゆりのまろ寝さす棹もひろひゆくらしかていとなし　俊頼

二三八六 懐中くまのなる音なし河に渡さはやさやきの橋しのび〳〵に　おろい
二三九六 名寄千早振くまの〻宮のなきの葉をかはらぬ千代のためしにそひく　定家
二四〇六 月清まになる跡を尋しくまの山見し昔より頼みそめてき　後京極 38オ
二四一六 玉吟かけまくも清き心をみくまの〻浦の玉もの光をそまつ　家隆
二四二六 夫木 み熊野の山路になる時鳥神も初音や嬉しかるらん　後鳥羽
二四三六 同 み熊野の浦吹風に女郎花下葉はうへの物と社なれ　叡念
二四四六 同 昔見し玉かとのみそみくまの〻浦迄とをる袖の涙は　行意
二四五六 建保 みくまの〻浦よりをちに立霧のほれぬ思ひを猶やへたてん　順徳院
二四六六 同 へたつらん吹たにかよへみ熊の〻浦よりをちのやへの塩かせ　俊成女
二四七六 同 幾たびか磯辺の塩のさしなからつらき心をみ熊の〻浦　忠定
二四八六 同 めすらる〻身こそはあらめみ熊の〻浦のかひある名をはとゞめ康光

草香江　入江　筑前　類なし

二四九六 万四 草かえの入江にあさる芦田鶴のあなたつゝしと友なしにして　奔律卿
二五〇六 続後くさかえの入江の田鶴も諸声に千世にやちよと空に鳴せ　法皇御製 38ウ
二五一六 玉吟 冬きぬとさなから色は草かえの入江の田鶴も霜恨むせ　家隆
二五二六 千首 草かえの入江の波の薄氷とれもみとりの色にたもつゝ　為尹
二五三六 夫木 草かえの入江の芦のしけれは有とも見えてあさりするだつ　公朝

倉無浜　豊前　類なし

二五四六 万九 わきもゝかか赤裳泥塗て植し田を苅ておさめんくらなしの浜　人丸
二五五六 夫木 くるあまのそこかりをくみるあをはいつくにつまんくらなしの浜　読人不知

朽網山　豊前　仙覚抄当国

二五六六 万十一 くたみ山夕ゐる雲のうすらかは我は恋んな君か目をほり　人丸
二五七六 名寄 くたみ山くらたてりしや思ふ覧しられぬ山の松のふるえに　俊頼

久麻山嵩　未勘

二五八六 山家集 蘆行舟人いかに寒からんくま山嵩をおろす嵐に　西行 39オ

莖浦　里　未勘

二五九六 夫木 しのひやるふみ見まくきのうらにこそ波の心もゆきてかへらめ　隆季
二六〇六 同 月影をあなしの波に夢覚てあけぬとや思ふくきの里人　忠業

雲森　同

二六一六 夫木 村雨のけさもゆきこのくもの杜いくたひ秋の梢そむらん　知家
二六二六 同 うなひ子か草刈河の網手縄ひく手もたゆくのほる舟人　為家

久良谷　同

二六三六 夫木 水の面にやとれる月を見ぬ人やくもり川とはいひはしめけん　中原師尚朝臣

黒河　同　或陸奥

二六四六 万十七 篤のなくくら谷にうちはめてやけはしぬとも君をしまたん　読人不知 39ウ

雲津河　同

二六五六 夫木 くろ川と人は見るらん墨染の衣の袖にかゝる涙を
二六六六 現六 たれしかも物そかなしき小夜千鳥くにの湊を鳴て過なり

蜃河　同

二六七六 夫木 雲つ河せきいれてまけろ苗代に秋の空こそかねて見えけれ　俊成 40オ

松葉名所和歌集第九　屋満計

山科　里　山城

二六八六　万九山しなの石田の小野の柞原みつや君か山路こゆ覧　無名
二六九六　同　山科の石田の杜にふみこえはけたしわきもにたこあはんかも　西園寺
二七〇六　六帖　雨ふれは道はまとひぬ山科の笠取山はつこなるらん　光明峯寺
二七一六　同　山しなの山吹の尾に臥鹿の朝ふしかねて人に知るゝ　後鳥羽院
二七二六　同　哀なりしこれも世渡るいはそかしその山科の袖くらめまて　順徳院
二七三六　千五百つれなさは猶かはらてや山科の音羽の山の音に立らん
二七四六　夫木　いつしかと初秋風や山科の岡部のくるす朽は散らん
二七五六　同　冬のくる石田の里のこからしに柞しらゝ山科の里
二七六六　草庵霧たもて鶉鳴なる山科の石田の小野の秋の夕暮
二七七六　千首　夕立はは山科の奥晴て音羽になひく浮雲の空

八瀬　里河　山城　類字

二七八六　六帖　五君こふと衣のすそをくたし野の山の小川のやせこそ渡れ　家持
二七九六　同　六春雨のふりはへ行て人よりは我まつつまんやせ川の芹　命婦
二八〇六　拾王　冬のきてはむに物なき牛の子のやせ行里の比のさひしさ　慈鎮
二八一六　夫木　八瀬川をせの井関にせきとめて水引かくるもの苗代　隆夷
二八二六　同　日にそへて姿をかけに成にけりやせの里なる妹をこふとて　卯禅
二八三六　千首　八瀬わたる河とゆみえて流るれと袖に逢せのなとなかる覧　宗良

八坂里　同　和名抄云安居郡

二八四六　古歌　神の代の八坂の里とけふよりは君か千世をはかそへはしむる　同

山吹瀬　同　山階篇　仙賞抄云宇治川ニ山吹ノセアリト云ゝ

二八五六　万九秋風の山吹の瀬の響なへに雨雲かける雁にあへるかも　無名
二八六六　新拾　散果る山吹の瀬に行春の花に罕さすうちの河長　西園寺
二八七六　夫木　吉野河山吹の瀬の岩枕むすはれ行花の浮波　光明峯寺
二八八六　同　秋風の山ふきの瀬の岩浪にぬるまそなるうちの橋ひめ　後鳥羽院
二八九六　同　行水のそこはかとなく移ひぬ山吹の瀬の花のしからみ　順徳院

八幡　山　同

二九〇六　拾王　水なし人の頼むやはたの松山は君か千年のためし成けり　保季
二九一六　月清　やはた山西に嵐の秋ふけは川波しろき淀の明ほの　固友
二九二六　玉吟　八幡山むかひの里の郭公忍ひしかたの声もかはらす　行政
二九三六　同　八幡山松陰涼し若清水夏をせきてや跡を垂けん　頓阿
二九四六　玉吟　八幡山春の桜もかたそきのゆきあひの霜と色に消えつゝ　為尹
二九五六　名寄　後の世のやみをは照せ八幡山神のふもとの有明の月　家持
二九六六　御集　八幡山嶺の霞の打なひき春にもなりぬ曙の空　命婦
二九七六　夫木　万代に千世をかさねて八幡山君を千とん名にそ有ける　慈鎮
二九八六　同　八幡山木高き松にゐるたつの羽白妙にみゆき降らし　隆夷

八塩岡　山城　類名

二九九六　堀百　浅からぬ八塩の岡の紅葉を何あやにくに時雨そむ覧　卯禅
三〇〇六　同　白露のうつしの花や染つらん八塩の岡の紅葉しにけり　宗良
三〇一六　名寄　岩蔵山八塩染なる紅葉を長谷川にをしひたしたる　家隆
三〇二六　新六見渡しの岡の八塩は散過て長谷山にあらし吹なり　頼氏
三〇三六　千五百　たくひなき八塩の岡の紅葉をはみぬより色の程そ知るゝ　後鳥羽院
三〇四六　夫木　紅のやしほの岡の若つゝしこのまくりての袖　後京極
三〇五六　同　そめそもく八塩の岡の玉藤を君か八千代の末のかとりに　家隆

三〇六六 同　染渡す時雨ふりての紅の八塩の岡のならのは紅葉　規隆
三〇七六 同　紅のやしほの岡の紅葉こほ時雨のふりてそむる成けり　三河
三〇八六 同　紅のこそめの色とみえつるや八塩の岡紅葉成らん　顕昭
三〇九六 同　秋の色のいつこはあれと竜田姫染る八塩の岡の紅葉こ　知家

山崎　同　和名乙訓郡

三一〇六 千直山崎や向の雲のつらは波の川瀬に時雨きにけり　知家

山吹尾　同　藻塩

三一一六 帖二山科の山ふきの尾に臥鹿の朝ふしかねて人に知るこ　同

大和河　大和

三一二六 百十五やまと川清き河せにあそへともならの都は忘かねつも　山辺森　同　類字
三一三六 名寄大和河桜ゐたれて流きぬ初瀬のかたに嵐吹らし　名寄
三一四六 夫木あふ事のともちの里の大和川思はぬ中にありと社きけ　懐中

矢鈎山　川　同　八雲御抄

三一五六 百三やつり山木立も見えす散まかふ雪はたちにまぬてくらくも　山辺御井　伊勢　仙覚抄
三一六六 同十三やつり川水底絶す行水のつきてそ恋る比年比は　為尹

山階寺　同　類字

光明皇后山階寺にある仏跡にかき付る

三一七六 拾遺三十あまり二のすかに備へたる昔の人ふるめる跡そこれ　山田原　里渡　伊勢　類字藻塩二度会郡　山田里一説山城
山階寺の涅槃講にまうて、読侍ける
三一八六 後拾古の別れの庭にあへりともけふの涙そなみたなとまし　同　類字

3オ

三一九六 名寄山のへの杜の梢のむら鳥ねくらあらそふ夕暮の声　知家
三二〇六 新六いつまてか人をは恋ん山のへのあせひの花も咲て散ぬる　同
三二一六 藻塩草枕旅となりなは山のへに白雲なしぬ我や宿しん
三二二六 懐中打なひき春さりくれは山のへのまきの梢にさきゆくみれは
三二三六 百一山のへの御井をみかてり神風やいせの乙女し相みつるかも　長田王
三二四六 夫木神風や伊勢の乙女の夏衣涼しく結ふ山のへの御井　家隆
三二五六 家集神のます山田の原の鶴の子は帰るまりこそ千世はかそへめ　源順
三二六六 名寄たけ川やゆた野をみれははる〜と山田の原の松はくもれり　隆信
三二七六 同　時鳥忍は如声を聞より中山田の原に早苗とるらん　俊頼
三二八六 御集夏の日のもりくるからに涼しきは山田の原の杉のした風　羽院
三二九六 夫木いほりさすいなほの雲も打なひき山田の原は時雨てそ行　後光明峯寺
三三〇六 同　苗代の水を心にまかすれは山田の里はたぬ時にけり　六条
三三一六 千首鈴鹿路の関にとまらぬ郭公山田の杉にこの鳴らし　為尹
三三二六 同　村雨の今は山田の渡りして月に開つる郭公かな　同
三三三六 神道百神風や山田の原のみしめ縄ながき世かけてすめるみつ垣　兼邦

4オ

八百相神　同　夫木二当国

三三四六 夫木世中をあめのみかけの内になせあらしもあめてやを相の神　西行
皇后
法師
光明
3ウ
4ウ

此歌は公卿勅使に土御門内府宰相にて立
けるをいすゝ河の辺にてみてよめると云〜

焼手里　同　歌枕二当国

三三五六　名寄晴のほる霧にをくれて立雲はやきての塩の烟せけり
三三六六　同　うち過る人も煙になれよとや藻塩やきての里の松せせ

矢矧里　河浦　参河　藻塩

三三七六　名寄梓弓やはきの里のかは桜花にのみゐる我心かな
三三八六　同　思はすや矢はきの里のうかれ妻せなにもをは人なとめそ
三三九六　同　矢矧河うへ野にてるかは桜いつはきはにはしらむとすらん
三四〇六　類聚符　へやはきにとよひ宿りなはあすや渡しんとよ川の水
三四一六　夫木　いくさみて矢はきの浦のあれはこそ宿をたてつ人はいるらめ
三四二六　夫木　又されはまのさはやしに風吹て矢矧の里そ夏は涼しき

八橋　河　参河

三四三六　堀百　さるかにのくもてにゆる八橋をいかなる人か渡しそめけん
三四四六　拾玉　旅人をたえす三河の八橋の蛛手へたつるやきつはた哉
三四五六　同　旅にいくそのの八橋は渡らねと心涼しきみかは水かな
三四六六　同　昔きくその八はしのたひ衣なれたる妻も有けるものを
三四七六　詠藻　八橋にみとりの糸をくりかけて蜘手にまかふ玉柳哉
三四八六　名寄　うきにやく渡るへしとは八橋のもてにかけて思ひやはせし
三四九六　同　五月雨は原野の沢に水越ていつれみかはの沼の八はし
三五〇六　同　春くれは八橋河はくもてにて苗代水を人のせくらん
三五一六　愚草　関路さえ都恋しき八橋にいとへたつる杜若かな
三五二六　千五百　五月雨にかけのみ残るいとしてあにゆゐや沼の八橋
三五三六　夫木　八はしの汀に咲るかきつはたむかしの色を恋渡る哉
三五四六　同　時鳥まちし渡らは八橋の蛛手の数に声をきかはや
三五五六　同　駒とめてはしはゆかし八橋の蜘手に白き今朝の泡雪
三五六六　同　三河なる恋路に渡す八橋はひとり臥する丸木成けり

長明
三五七六　同　八橋のあたりの里の秋風にきつなれにし衣うつせ
三五八六　同　風渡る花をみかはの八橋の蛛手にかゝる滝の白糸
三五九六　同　ふりにける名をのみかけて八橋の跡は水行河たにもなし
三六〇六　御集　から衣きつつ馴にし跡古てけふそ三河の沼の八橋

為家
長明
親隆
衣笠
読人不知
仲正
肥後
慈鎮
同
同
俊成
宗尊
西行
定家
越前
為家
俊頼
順徳院
恵尊

焼津辺　駿河　藻塩

三六一六　万　三やつへに我ゆきしかは駿河なるあへの市路にあいしこらはも

山梨岡　里　甲斐　類聚

三六二六　続古　足曳の山なし岡に行水の絶すそ君を恋渡るへき
三六三六　名寄　かひ山に咲にけらしな足引の山なし岡の山梨の花
三六四六　類聚　はかよりも光さひしくさやけきは月のかくる山なしの里
三六五六　夫木　月影を待もおしむもくるしきにいつ成とん山梨の里

八松　相模　藻塩

三六六六　名寄　やつ松の八千せの陰に面なれてとかみか原に色もかはらし

八重山　同　類聚

三六七六　万　十朝霞やへ山越て呼る鳥鳴やなかくる宿もあしなくに
三六八六　同　朝霧やへ山越て郭公卯花へから鳴てこゆらし
三六九六　同世　足柄の八重山越ていましなは誰をか君とみつ忍はん
三七〇六　堀百　道遠みほくしの松もつきぬへし八重山越る夜はの灯
三七一六　名寄　降つもる雪は八重山道とちて行ゑもうしき足柄の関

中務
慈円
為相
後鳥羽院
読人不知
国基
雅光
長明
同
家持
顕仲
中務

矢橋　渡　河　近江

三七二六　堀後　にほてるやはせの渡りすゑ船をいくそ度みつせの橋守

兼昌

三七三六 新六なかねせはしてねよ梓弓矢橋の川の鷺の一つら　行家
三七四六 拾玉船をむる凍もしらし梓弓をしてやはせのけさの渡りは　慈円
三七五六 夫木さゝ波や矢橋の舟の出ぬまに葉をくれしと急くかちの人　公朝

野洲河　入江　河原　同　類寄　駕　野洲郡

三七六六 万十二吾妹に逢も近江のやす川のやすいも昨すに恋渡るかも　源順
三七七六 家集野洲河の水底すみて鶴亀の方代がてあそびをそする　伊勢
三七八六 堀百夏の日もやすの河原の柳陰吹こす風は下に涼しき　清正
三七九六 家集 近江路や野ちの旅人急がなんやす河原とて遠がらぬかは　小大君
三八〇六 拾玉早苗とるやすの渡りのかたゝそのかり田ばひしかりけり　同
三八一六 詠藻野洲河にむれゐて遊ぶまな鶴も長閑成世をみする也けり　仲実
三八二六 名寄さえ渡るやすの河原の明方に霜に跡ふむ友千鳥かな　慈円
三八三六 夫木朝ほらけやなせの波の音ほして渡りやいつこやすの川霧　俊成

三八四六 同 やす川の渡りの桜はつくにみれともあかす垣こしにして　駒わたすやすの河原の柳陰しつえはひちぬ五月雨の比　後徳大寺
三八五六 同
三八六六 同 五月雨にやすのはやせのほりやな川波高し落やしぬ覧　行家
三八七六 同 やす河の早瀬にせせるのほり築けふの日よりにくらつもれり　好忠
三八八六 同 やす川の河へにあそぶ芦たつは千年の数をなら へとそ思ふ　能宣
三八九六 同 かも渡りやすの川よと行駒にみなもせこしの五月雨の比　信実
三九〇六 同 雨ふれは船よりそ行やす川のやすく渡りし瀬をはたとりて　為相
三九一六 同 百千鳥野洲の河原にむれゐつ友よひかはす心あるらし　読人不知
三九二六 同 やす川にむれゐるたつの群なかし数をは君か年とそせめ　匡房
三九三六 草庵守山の下葉残らす成ぬらしやすの川波音むせふ也　頓阿

八十湊　近江　類寄

三九四六 万三 磯崎を漕たみ行は近江の海やその湊にたつさはになく　高市黒人
三九五六 類聚風さゆる八十の湊のさゆる夜に磯きはかけて千鳥鳴也　信実

三九六六 千首冊出せよ此夜は明ぬさ波やヤそ湊にたつ鳴渡る　宗良

山井　同　類寄

三九七六 家集みてもこひ臥ても恋るかひもなく影浅ましくみえぬ山の井　源順
三九八六 同 岩くる山井の水を結ひ上てたか為おしき命とおしる　伊勢
三九九六 夫木みな人の結ひて過る山の井に我打とけて影をみえぬる　清正
四〇〇六 同 かきりなくとくとはすれと足引の山井の水は猶そ氷れる　小大君
四〇一六 同 足曳の山井に氷る水といへはとくとも袖の程そしらゝ　同
四〇二六 堀後春霞たなひく山の山の井に影みるさへもなつかしき哉　仲実
四〇三六 拾玉荻にふく秋をもまたぬ夕かな松風むすふ山の井の影　慈円
四〇四六 同 法の水に深き心は山の井の結ふしつくもにとさる覧　同
四〇五六 同 結ふ手に消ぬ思ひや山の井の流にすたく螢成らん　同
四〇六六 詠藻浅ましやいかに結ひし山の井の又もあひみぬ契せけん　俊成
四〇七六 同 山の井を結ひて夏はくいぬへし秋や立なんしかの浦なみ　同
四〇八六 同 立とまる程たに涼し山の井にすむとん里の人をしそ思ふ　同
四〇九六 月清玉鉾の道の行てのすさびにも契そ結ふ山のゐの水　後宮権
四一〇六 愚草夏の夜はけにそあかぬ山の井の雫に結ふ月の光も　走家
四一一六 千五百五月の雫にこる山の井のあかて過ぬる郭公かな　忠良
四一二六 同 夏の夜も岩もる月を結ふ手に氷くたくる山の井の水　通具
四一三六 同 結ふ手の雫はかりを袖にみてあかてもの人に山のゐの水　雅経
四一四六 御集結ふ手の露に月すむ山の井のあかても明る夏の空哉　後鳥羽院

山吹崎　近江　源氏抄三当国

四一五六 胡蝶巻風吹は波の花さへ色みえてこや名にたてる山吹の崎　顕仲
四一六六 類聚いはねともくちなし色にしるきかなこや音に聞山吹の崎

四一七六 詠藻水の色に花の匂ひもひとつにて八千世そすまん山吹の崎　　俊成

八嶋　同　藻塩

田上にて舟にのりてやしまと云所にて霧のいふせかりけれはよめるといへり

四一八六 名寄 河霧の烟とみえて立なへに浪わきかへる室の八嶋に　　俊頼

安良村　里　近江　藻塩

四一九六 名寄 早苗とるやすらの村の五月雨にあめの下こそ賑ひにけれ　　匡房

四二〇六 夫木 やすみしる我大君の御世にそいとやすらの里も富けれ　　顕輔

四二一六 同 から人のねかふ心にあふみなるやすらの里のやすらけき哉　　輔親

八坂井　上野

四二二六 万十四 いかほちのや坂のゐてにたつのしのあらほろ迄もさねをきゐては　　無名

山菅橋　下野　八雲御抄

四二三六 懐中 老の世に年を渡りてこほれなはつねよりける山すけのはし

山井　陸奥　類字

四二四六 著聚 くみ初て悔しと聞し山の井の浅きなかや影をみるへき　　後撰

四二五六 後撰 音にのみ聞てはやまし浅く共いさ汲見てん山の井の水

四二六六 続千 影をたにいかてか見まし契こそうたてあさかの山のゐの水

四二七六 新続 みるかたに人の心そくまれぬ浅きにあしの山の井の水

四二八六 家集 そほつとも爰にくらさん山の井に忍しき人の影やみゆると

耶麻郡　同　和名見分り

みちの国にやまの郡と云所ありそこにて冬月を

四二九六 家集 雲晴て空にみかける月影をやまのこほりといひなおとしそ　　重之

此やまの郡に秋なりねとかのこまたらに雪ふれり

四三〇六 家集 秋くれは鳴やをしかのまたら雪やまのこほりは音もせぬ哉

八十嶋　出羽　八雲御抄

四三一六 万廿 百くまの道はきにしを又さらにやそ嶋過て別かゆかん　　三野

四三二六 六帖 八十嶋の浦に跡ふむ浜千鳥君はありとそ思ひけしな　　朝忠

いてはの八十嶋に船に乗て人あそる

四三三六 家集 八十嶋の浦の渚にやそへつしとまれる年もあまたへぬへし　　元真

四三四六 夫木 人しれす思ふ心のふかけれはほてそ忍ふ八十の嶋松　　謙徳公

四三五六 同 末をこす波たになくは今こそはねはあらはれめ八十の嶋松　　重故

四三六六 同 海士小船やそしまつたふ浪の上も漕のく跡は松の一むら　　寂蓮

四三七六 同 八十嶋の松の葉数をかそへつ今行末にくらそしかな　　重之

矢田野　越前　仙覚抄三敷賀郡

四三八六 万十 やたの野の浅茅色つくあらもち山嶺の淡雪寒く降らし　　無名

四三九六 六帖 真萱原なひく秋風吹かしに矢田の大野の真萩散らし

四四〇六 名寄 わらひ生る矢田の広野に打むれて折くらしつ帰る里人

四四一六 玉吟 矢田の野に霰ふりぬあらち山嵐も寒く色かはる迄　　好忠

四四二六 夫木 やたのや露霜寒く成なへに浅茅色つきをしか鳴也　　家隆

四四三六 御集 有乳山矢田の野へも春めきぬ峯の淡雪消やしぬらん　　典侍

四四四六 同 けさみれはやたの浅ち埋ぬ風もあらちの嶺の初雪　　羽後鳥羽院

四四五六 夫木 あらち山時雨ふるらし矢田野なる百枝の櫨は紅葉しにけり　　同

四四六六 同 雪さえふ嶺の嵐の音さえてやたの広野は霜枯にけり　　実伊

四四七六 同 ときしけるやたのひろ野を分行は末こす風そ秋たかはしぬ　　中務

親盛

藪浪里　越中　藻塩

四四八六　万十八　やふなみの里に宿かり春雨にこもりつゝむと妹につけつや

八上山　石見　藻塩　八上郡

四四九六　万二　妹か袖さやにも見えす妻こもるやかみの山の雲間より

八十須美坂　紀伊　藻塩

四五〇六　万三　もたしぬやそすみ坂に手向せは過行人にけにしあはんかも

四五一六　同四　君か家に我すみ坂の家路をも我は忘し命しなすは

四五二六　堀後もたしぬやそすみ坂の白つししらしな人なみにそるとも

屋上　同

熊野へまいりけるにやかみの王子の花面白かりけれはやしろに書付ける

四五三六　家集　待きつるやかみの桜咲にけりあらくおろしそみすの山せ

倭嶋　淡路　類考

四五四六　万三　天さかるひなの長路を恋くれは明石のとより　やまと嶋みゆ

四五五六　同　名くはしきいなみの海の奥つ波千へに隠れぬ和嶋ねは

四五六六　同廿　海原の沖へにともしさる火はあかしてとも　やまと嶋みゆ

四五七六　同　いさゝとともたはわさなせそ天地のかためし国そ和嶋ねは

四五八六　玉吟　万代も君にはしかし敷嶋や大和嶋根の風もかさらす

四五九六　夫木　はの〳〵と明石のとより　みつせは倭嶋山霞たなひく

四六〇六　同　天さかる八十嶋つたゝ漕行は昨日もけふもやさと嶋みゆ

四六一六　同　天雲には船うけしそのかみを思へはつきし大和嶋人

矢野神山　伊予　類考

四六二六　万十　妻こもるやの〻神山露霜に匂ひそめたりもしまぐおしも

四六三六　玉吟　つまかくすやの〻神山立まよひ夕の霧に鹿そ鳴なる

四六四六　夫木　夏はつるやの〻神山たち忍ひまた妻かくす鹿や住らん

四六五六　同　露霜もやの〻神山紅に匂ひそめたる頼の紅葉〻

四六六六　同　名に高きやの〻神山小夜更てはや月張の月も入らし

四六七六　同　草も木も淚にそめて妻かくすやの〻神山鹿そ鳴なる

四六八六　草庵　秋ふかきやの〻神山露霜の色ともみえす紅葉してけり

也良能崎　筑前　仙寛抄

四六九六　万十六　沖つ鳥鴨といふ船の漕り来はやとの崎守早く告こそ

四七〇六　同　おきつ鳥鴨といふ舟はやとの崎たみて漕くときかれこぬかも

安野　同　仙寛抄三見タリ

四七一六　万四　君か為かみしまも酒や安の野に独やのまん友なしにして

山本　筑後　仙寛抄ニ名所ト云リ　和名ニ山本郡

四七二六　万三　旅にして物恋しきに山もとのあけのそほ舟奥に漕みゆ

八代池　肥後　藻塩ニ当国　和名ニ八代郡

四七三六　名寄　やつしろの長閑き池の水澄て人の心そ涼しかりける

八尋浜　豊前　藻塩

四七四六　懐中　春の日のはるかに道のみえつるはやしろの浜を行はせけり

家持	11オ	帝盤井入道	12オ
人丸		無名	
重丸		家隆	
人丸妻		後九条	
俊頼		為家	
		光俊	
		頓阿	
西行	11ウ	憶良上	12ウ
人丸		同	
同		大伴	
無名			
藤原朝臣			
家隆			
尤明寺			
後九条		高遠	13オ

藪黒山　　末勘

四七五六　六帖三首見し人をとゝ今はとゝ忘れ行やふるゝ山のふもと斗に

山井湊　　同

四七六六　夫木　山の井の湊わかれて行舟のあかつも人にぬるゝ袖哉

山下森　　同

四七七六　名寄　ふりゆけは杉も緑も色付て梢さびたる山もとの森

矢野里　山 松原　　同

四七八六　夫木　梓弓はるといふより引かへてはやくそいはふやのゝ里く

四七九六　同　あつさ弓春といふよりものさふのやの松原時を知らし

四八〇六　同　つまやくすやのゝ山なるかえの木のつれなき恋に我年はぬ

弥生山　　同

四八一六　題林　あすはよもかたゝとも見し弥生山けふたに花の跡の白雲

四八二六　建仁歌合　月残るやよひの山の霞む夜を夜ふしと告るまたすしもあしす

四八三六　千首　名残をいかにせよとて弥生山霞でかる有明の月

山吹里　　同

四八四六　名寄　胡蝶すむ花の近きに山吹の里そおなしかさし成けれ

槙嶋　里　　山城　宇治篇

四八五六　拾玉　宇治河の瀬ゝの網代に鵜かひ舟夜とやゝるまきの嶋人

四八六六　同　今はとて槙の嶋船もとさなん住もかひなきうちの橋守

四八七六　千五百武士の八十うち川の橋柱長閑におとせまきう嶋舟

四八八六　悪草朝ほらけいさよふ波も霧こめて里とひかぬる槙の嶋く

四八九六　千五百網代木に浪とひをとのよるゝを独やあかす槙の嶋く

喜撰法師　光俊　信実　為家　同　後頼　為重　親定　為尹　慈鎮　同　宮内　定家　三宮

槙雄山　　山城　類字

五〇二六　橋姫巻　朝ほらけ家路も見えす尋こし槙のを山は霧こめてけり

五〇三六　名寄　時雨ゆく槙のを山の山風に衣うつなりうちの里人

五〇四六　同　晴やらぬ槙のを山の五月雨にぬれ〳〵くたすうちの柴舟

五〇五六　同　人とはぬ槙のと山や霞むらんおなしみとりに明る空哉

五〇六六　玉吟　いとひても猫古郷を思ふかなまきのを山の夕霧の空

五〇七六　夫木　へたてつる槙のを山もたえ〳〵に霞なかるうちの川波

五〇八六　御集　峯の雲槙のを山にふく嵐ふせく宿かせ宇治の里人

五〇九六　同　我恋はまきのを山の秋の露色に出しと忍ひこし哉

松尾　山 色　　山城　葛野郡

五一〇六　山家集　玉垣はあけも緑も埋れて雪おもしろき松のおの山

下野　小早川　順徳院　家隆　家長　後鳥羽院　同　為実　知家　忠定　信実　範宗　宗賢　定兼　公朝　為頼　読人不知　顕輔　後鳥羽　西行

五一六 拾玉 代さもへて君か千年を松の尾のほかへぬ色を頼ととしれ　慈鎮
五一二六 同 大井河松の尾山の麓ゆけは神さふる身の影そ移れる　同
五一三六 同 紅に秋や手向て染つらん松の尾山の嶺の紅葉ゝ　同
五一四六 夫木 なへてにはかけてもいはし君か為千世松の尾の菜草みて　同
五一五六 新六月 寒る夜を更ぬしし松の尾の神遊びする声聞ゆ也　同
五一六六 同 松の尾の嶺しつかなる曙にあふきてきけは仏法僧鳴　頓阿
五一七六 御集 夕時雨いかにそむとて尋こし色かはるなよ松の尾の宮
五一八六 題林 三葉さす松のお山の菜草幾世はてけふにあふ覧
五一九六 千首 ここもとまあけの玉垣ほのみえて一村くもる松の尾の宮

松崎　氷室　同　藻塩　近江三有同名

五二〇六 堀百 氷ねて千年の夏も消せしな松か崎なる氷室と思へは　慈鎮
五二一六 同 夏の日も涼しかりけり松か崎是や氷室の渡り成らん　同
五二二六 百 松か崎絶ぬ氷室に皇の千世のためしをけふそ立ける　為家
五二三六 方 寺たなひかぬ時こそなけれ秋も又松か崎より みゆる白雲　周防
五二四六 夫木 松か崎いつも緑の色なるをいとも春の霞立つゝ　尤俊
五二五六 同 時鳥初音を松か崎にきてきかて帰らん事をこそ思へ　同
五二六六 同 岩陰や松か崎との氷室山いつれ久しきためし成らん　後鳥羽院
五二七六 同 松か崎たかつけし名そ生る若のいさこ成けん時は聞きや　貞世
五二八六 千首 いつれまつけふは備へん松か崎うた野に近き氷室なれとも　為尹

槙裾山　同　藻塩

五二九六 山家集 河合やまきのすそ山石たてる杣人いかに涼しかるらん　山城

真葛原

真葛原名所ニテナル故当時祇園ノ丸テル野ト真葛野トストイヘリ俗語ニイテ名所ニ立待ル如何

真袖原　同　夫木ニ当国

五三四六 帖 大内のま袖の原にふる雪はいとなく降そ多もしなくに　肥後
五三五六 夫木 けふもまた雪ふる分て大内のまそてか原に若な摘也　肥後
五三六六 同 鳴てくる雁の涙か花薄真袖の原にをけるしら露　為尹

真野　萩原　大和　藻塩ニ添上郡

五三七六 万三 白菅のまゝの萩原行さきは君こそみしめまの萩はら　顕季
五三八六 同七 古にありけんゝ求つきぬにすりけんまゝ萩原　経家
五三九六 同 白菅の真野の萩原心にも思はぬ君か衣にそする　貫之
五四〇六 堀百 二葉より朝たつ鹿はしからめとまの〻秋萩花咲にけり　好忠
五四一六 同 にしきのや紐とく花をみゆるかな乱て匂ふまの〻萩原　能宣
五四二六 同 後 露をいとみまの〻萩原時雨して雫に袖をおとろかしつゝ　俊成
五四三六 山家集 分かねし袖に露をはとめ置て霜に朽ぬるまの〻萩原　元輔
五四四六 月清 我恋はまだ知くもしら菅のまゝ萩原露もしらすな　為尹
五四五六 玉 吟 白菅のまゝの萩原朝なゝ〳〵もきまとはせる秋の初霜
五四六六 千五百 秋風に絶間おしや思ふらん錦をさらすまゝ萩原　墨く妻
五四七六 夫木 春ぬさこたにあへぬ明くれに霞にむせふまの〻萩原　無名
五四八六 同 秋き如といはぬ斗を月清み下紅葉するまの〻萩原　同
五四九六 同 道もせにたかをりしける錦をとゝ丸と白菅のまの〻萩はら　師頼
五五〇六 同 風吹はまの〻糸萩まろことにつら如く玉の露をとまる如　肥後
　　肥後
　　後頼
　　西行
　　後京極
　　各隆
　　顕昭
　　後頼
　　寂念
　　紫徳院
　　安云
　　公朝
　　重氏

五五一六　同　夏くれはまのゝ萩原茂り合て行来の人は声のみそする
五五二六　同　日すがりは過て行く陰もなしまのゝ萩原風立にけり
五五三六　御集　多くれはまのゝ秋風吹みたりしつゝなき萩のうは露
五五四六　同　夜半に鳴雁の涙はをかねとも月に移ろふまのゝ萩原

巻向　山川　檜原　岸　大和　類考

五五五六　万七　三もろのその山なみになりか手をまきもく山は継てしましも
五五六六　同　うは玉の夜さりくれは巻向の河音たかしもあらしかもとき
五五七六　同　なりか手を巻向山は常なれと還行人にゆきまがめやも
五五八六　同　巻向の山へひゝきて行水の水泡のごとく世をは我みる
五五九六　同　十巻向の檜原にたてる春霞くれし思は名積けめやも
五六〇六　同　鳴神の音にのみ聞巻向の檜原の山をけふ見つる哉
五六一六　名寄　たれか世につねなき種を巻向の檜原の山の色もかはらす
五六二六　同　ときもくの檜原の嵐さえ〳〵てゆつきか高に雪降にけり
五六三六　同　巻向の檜原杉原埋れて山の端見えぬ雪の空哉
五六四六　愚草　巻向の檜原のしけみかさ分て昔の跡を尋てそみる
五六五六　玉吟　巻向の檜原に雪やをりるらん絶ぬ梢に杣木きる音
五六六六　千五有　巻向のきしの小松に雪ふれは檜原か末に雲そかゝれる
五六七六　夫木　巻向の檜原の山の下紅葉まれなる色のちとはさくもふし
五六八六　同　巻向のあなし河風はきてふけ匂へる紅葉今さかりせ
五六九六　夫木　巻向の檜原にまし多薄紅葉是や朽木の杣木成覧
五七〇六　草庵山風　のさそふもしるく巻向の檜原くもりて散桜哉

真弓岡　大和　八雲御抄

五七一六　万二　ゆふもなきまゆみの岡に宮柱ふとしきまして御ありかを

俊成　舎人
同　同
羽後院　敦定
同　為家
順徳院
隆祐
中務

五七二六　同　よそにみし真弓の岡も君ませはとこつ御門とこのみするかも
五七三六　同　とくらたちかひし雁の子すたちなはまゆみの岡に飛帰りこね
五七四六　夫木　萩の葉も紅葉なりし氷る也まゆみの岡の秋の初風
五七五六　同　白露も紅葉なりし氷る也まゆみの岡の秋の夕風
五七六六　同　時雨行まゆみの岡の薄紅葉遠方人の心ひくまで
五七七六　同　染てけりまゆみの岡の薄紅葉遠方人の心ひくまて
五七八六　名寄　もゝしふのやしほにみゆる紅葉ゝやまゆみの岡の梢なるらん

人丸　同
同　同
同　八雲御抄
同　同
同　同

匂乃池　同　八雲御抄

五七九六　万二　嶋のみやまかりの池のはなち鳥人めに恋て池にかつかす

真神原　同

五八〇六　万二　あすかのまかみか原に久方の天つ御門もかしこくも
五八一六　同八大口の真神の原に降雪はいたくなふりそ家もあらなくに
五八二六　同十三　大くちの真神の原に思ひつゝ帰にし人家にいたりきや
五八三六　名寄　あすか風むへさえけらしけさみれはまかみか原に雪は降つゝ
五八四六　玉吟　うち渡す真神か原の夕風に衣手寒み雪はふりきぬ
五八五六　夫木　立寄てゆるへき宿もなき物をまかみか原に雪は降つゝ

人丸　舎人
家隆　娘子
後鳥羽院　無名
経平　良清
光俊　家隆
信実　顕朝
頓阿　公朝
人丸　忠岑

巻向日代宮　大和　八雲御抄并藻塩三　当国

五八六六　夫木　あつまにも跡あるこゝと巻向のひしろの宮の古きみゆきは

益田池　同　類考

五八七六　拾恋　恋をのみますたの池の水ぬはくれはそ物の乱ともなる
五八八六　同　見るかたに思ひ益田の池に生るあさのうきてをもはへもとや
五八九六　象集立かはり　益田の池のうきぬはくれ共絶ぬ物にそ有ける

五九〇六 名寄 淚のみ益田の池の身をつくし歎くしるしやみえて朽なん　吹黄刀自
五九一六 同 跡やなきあはで忍ぶる思ひのみ益田の池の鳰の下道　人丸
五九二六 愚草 日にそへて益田の池のつゝみかねいひ出てもぬる袖かな　同
五九三六 同 人心いとゝます田の池水にうへはしけれる名をうくみつゝ　仲実
五九四六 玉吟 我恋は益田の池の鳰鳥の玉藻にあそぶ跡もはかなし　顕仲
五九五六 建保月やとる 益田の池のます鏡うつろふ色を秋は悲しき　常陸
五九六六 同 つらさのみ益田の池の薄氷解ぬ契を何結ひけん
五九七六 同 かた恋のます田の池に立鳥のほかひの波を袖にかけつゝ　俊頼
五九八六 同 涙のみ益田の池のねぬなはのねぬよくるしき物思ふ覧
五九九六 同 泪のみ袖に益田のいけらしといひても惜き浮名せけり　同
六〇〇六 夫木 恋ふ事我も益田の池にすむ鴛のうきねもやは苦しき　範宗
六〇一六 同 雨ふれはかしてやくちんあやめ草いと益田の池の沢水　康光

又打山　同　（八雲御抄三当国下総　紀伊三有同名）

石上乙麻呂卿土佐国へ配流之時ノ長歌

六〇二六 万六 いそのかみふるの文ことはたをやめのまとひによりて
むましもの縄とりつけてしし物乃矢かこみて
大君のみことかしこみあまさかる ひなへにまかり
古衣まつち山よりかへりこぬかも
能宣朝臣やまとの国まつち山もちかく住ける
女の許に夜ふけてまかりてあはさりけるを
恨々侍けれは

六〇三六 新 古 たのめしく人をまつちの山の端にさ夜更しかは月も入にき　読人不知
六〇四六 名寄 多されは君をまつちの山鳥のなく〳〵ぬるとたもきかなん　真野浦池継橋　摂津　類字

六〇五六 万四 まゝ浦の淀の継橋心にも思ふか妹か夢にしみゆる　康光
六〇六六 同十一 わきもこか袖を頼みてまゝの浦の小菅笠をきすてきにけり　定家
六〇七六 同 まゝの池の小菅を笠にぬはすして人の遠名を云へき物か　同
六〇八六 堀百 蛙鳴まゝの池へをみ渡せは岸の山ふき花咲にけり　家隆
六〇九六 同 明方に成やしぬらん絶〻にまゝの継橋人渡る也　行意
六一〇六 同 逢事のと絶かちにも成行かかみにかまへまゝ継はし　定衡
六一一六 名寄 多されはまゝ池水氷ゐて夜かれかちなるあちの村鳥　忠定
六一二六 家集 今夜しまゝ継橋ほと〳〵に程絶ぬへき身をいかにせん　知家
六一三六 夫木 まゝの池に凍しぬれは芦間なるほしを尋て鳴伝ひしつ　行家
六一四六 同 まゝの池の鳴つたひ行雁金や春はあしまの橋とみゆ覧　安内侍
六一五六 同 冬ふかみしほれにけりなまゝの池の汀の芦もほ末きはらに　内侍
六一六六 同 まゝの浦の小菅の笠を取もあへす時雨て渡る淀の継橋　為家
六一七六 草庵 五月雨に淀の継橋絶しより隙なく渡す真野の浦舟
六一八六 千首 小菅川跡そとみえて汀まて月に成行まゝ池水

待兼山　同　類字

六一九六 六帖 津国の待かね山の呼子鳥なけとかなしいふ人もなき
六二〇六 堀百 夜もすから待兼山に鳴鹿ほのぼのけにやは声を立らん
六二一六 拾玉 今はたそら頼めにもこりぬとや待兼山の嶺の椎柴　慈鎮
六二二六 類聚 夜もすからきりて落る涙かなや待兼の山川の水　俊頼
六二三六 夫木 時鳥待兼山の一こゑは聞につけてもうしめしきかな　頭昭
六二四六 同 来ぬ人を待かね山の郭公かたふく月の影に鳴なり　羽院鳥

間手　摂津

まてとゝ所にてしはしとまりてつなてもかと
もに物くはせけるにきしの家ともまりくゝあま

19ウ

20オ

21オ

20ウ

たきてみれはまめる

六二五六　六帖　思ひきやうかりしほを過しきてけふまてへに見えん物とは　招坂　伊勢　藻塩

六二六六　藻塩　まはき坂招くを誰と問くれは霧の晴間のお花せけり

的形　同　（紫御抄并藻塩草ニ見ヘシ上ニ仙覚抄風土記ヲ以テ伊勢ト云リ仍当国入ル）

六二七六　万一　ますらをのともや手挿立向ふいるまとかたはみるにさやけし

六二八六　万七　的形の湊の渚鳥浪たては妻よひ立てへにもかくも

六二九六　家集　梓弓いる的かたに満塩のひるあひかたみ夜をこそまて

六三〇六　名寄　人しれぬねもこそなかめ的形の湊のすとり波に芒へ

松風里　尾張　藻塩

六三一六　名寄　まつ風の里にむれゐるまな鶴は千世を重ねる心も社すれ

前河　相模　夫木ニ当国

六三二六　夫木　浜へなるまへの川瀬を行水のはやくもけふの春にける哉

此歌は三所詣下向にはまへのやとのまへに前河といふ川あり雨ふりて水まさりにしかは日くれてわたり侍し時よめるとゝ

問々浦　継橋　下総　類字

六三三六　万十四　かつしかのまゝの浦間を漕舟の船人さはく波立らしも

六三四六　同　あの音せすゆかん駒もかつしかのまゝの継橋す通はん

六三五六　拾玉　かつしかや昔のまゝの継橋を忘す渡る春霞かな

六三六六　名寄　葛飾の問ゝのゐつゝのかけはかりさしぬ思ひの跡を恋つゝ

六三七六　千首　かつしかやまゝの継橋雪ふれはその名は影に移る斗そ

21ウ

六三八六　夫木　逢事のと絶かもにも成行はふみたに通へまゝの継橋　肥後

六三九六　同　かつしかや河そひうつき咲ぬしし波よりつたふ間ゝの継橋　長明

六四〇六　同　今更に恋路にまとふ身をもてなにはたかけんまゝの継はし　師頼

六四一六　同　葛飾の問ゝの浦わの興つすにあけのそほ舟からろをすも　俊頼

六四二六　同　唐衣袖もひちに朽にけり見しやその夜へまゝの継はし　後鳥羽院

六四三六　草庵　残なく人を渡すとせし程に我身はもとのまゝの継橋　頓阿

待乳山　同　類字

六四四六　万三　まつち山夕越行ていほ崎の角田河原に独かもぬん　弁基

六四五六　千載　誰にかも舎をとはん待ち山夕越行はあふ人もなし　定実

六四六六　玉吟　月影のさすや庵崎角田河越て待ちの山のかひより　家隆

六四七六　夫木　待ち山おろす嵐や寒からむ角田河原に千鳥鳴也　知海法師

六四八六　同　まつち山夕越行は風寒ゝ角田河原に千鳥鳴也　季広

22オ

鎌倉

六四九六　詠藻　君か代はもへのなゝくゝ隙もなく作重ゝ槙の村人　俊成

六五〇六　続拾　ときはなる陰は替らし槙の村天の露霜いくよふる英　家尤

六五一六　夫木　まきの村つゝ〳〵椿つゝ〳〵に思へはゝし君か八千代は　匡房

益原里　近江　類字

文保二年大嘗会悠紀方辰日の桒破近

江国益原里

六五二六　続後　君か代は千年五百年重ねてそ猫さかふへき益原の里　俊尤

無名　近江

慈鎮　同

真長浦　同　藻塩

六五三六　万九　思ひつくしてきかねて久おか崎まなかの浦を又帰りみつ　基師

越前

六五四六 夫木 久かの崎まなかの浦のそなれ松馴すはいかゝ波もかこん

松崎　同　類寺

六五五六 拾遺 千年ふる松か崎には群居つたつさへ遊ぶあるしし

六五六六 同 鶴の住松か崎にはなへたる千世のためしをみするせけり

六五七六 夫木 波たてる松か崎なる芦田鶴は千世を重ぬるためしなりけり

真野　入江　浦　浜　同　類寺

六五八六 拾玉 五月雨はまの〻入江に水越て出ぬお花やおきの萍

六五九六 同 一日数ふるまの〻入江の五月雨に汀を沖と又する浮草

六六〇六 同 色かはるひしの高根の雲をみれは初雪降ぬまの〻萱はら

六六一六 同 夏草も深くそ春に帰ける五月雨越るまの〻入江に

六六二六 同 なびき行お花か末に浪越てまの〻野分につく浜風

六六三六 千五百こゑや此夜鳴出の涙として玉をつらぬくまの〻糸萩

六六四六 名寄 辛崎や長等の山にあらぬ共小篠波するまの〻秋風

六六五六 同 芦鴨のうきねよいかに波枕頼む入江の真野の浦風

六六六六 月清 まの〻浦の入江は霧の内にして憑か末に残るしら波

六六七六 愚草 秋はたゝ入江はかりの夕かは月待空の真野の浦浪

六六八六 玉吟 片敷の袖にもさはくあた人の立別にしまの〻浦波

六六九六 千五百 真葛はふまの〻浜路の夕風に恨て帰る興つ白波

六七〇六 同 水鳥のさはく入江のさ〻浪のよる〳〵こほるまの〻浦風

六七一六 同 見渡せは氷の上に月さえて霜浪よるまの〻うら風

六七二六 類聚 まの〻浦のよとの浜への明方に桜まさくる比哀の山風

六七三六 夫木 近江路やまの〻浜へに駒とめてひしの高根に花をみる哉

六七四六 家集 浜風にお花か露はたまらねとまの〻入江に月は澄けり

六七五六 同 浜風に今や衣をうつ鳴真野の入江の秋の夕暮

六七六六 夫木 まくすはゆまの〻しの原茂り合て春みし道そ忘られにける

六七七六 同 よせ帰る波の花すり乱つゝしとろに移るまの〻浦萩

六七八六 同 きり〳〵す鳴て夜すから明すせまの浦萩色はる比

六七九六 同 置まさる露深き夜の浦風に月も氷れるまの〻入海

六八〇六 同 秋風の入江の夜の白妙におはなもつくまの〻浦波

六八一六 同 あさりするまの〻入江にすむ月は鴨よりぬれ氷せけり

六八二六 同 忘られしまの〻入江のみをつくし朽なは袖の験ともみよ

六八三六 同 汀なる芦のしほれ葉吹さやき氷もとまりまの〻浜風

後九条　式内親王子　西園寺　衣笠

元輔 23ウ　為家

兼盛　読人不知　正綱

慈鎮　為家

同　同

同　馬渕　近江　夫木二当国

同　同　為相

同　海道集　夫木　日も暮ぬ渡せその馬ふちもなき此人はせゝみせすとも　同　言葉書ニ近江国歌中

六八四六

六八五六 詠藻 紅葉ゝを染る時則は降くれと緑そまさる松か江のきし

師俊　俊成

雅経 24オ　慈鎮

檀山　下野　藻塩

六八六六 堀百引つれてまとゐせんとも思ふとも春はまゆみの山に入覧

定家　紀伊

松嶋　橋浦　陸奥

六八七六 須磨巻 松しまの蜑のとまもいかならん須磨の浦人塩たる比

家隆

六八八六 同 塩たるこゝろもやくにて松嶋に年ふる海士もなけきをそつむ

忠良

六八九六 多寄巻 なる〻身をうらむるよりは松嶋のあまの衣にたもやかへし

有家

六九〇六 同 松嶋の蜑のぬれ衣則ぬとてぬきかへてふ名はたゝめやは

宮内

六九一六 拾玉 我袖をみせはや人に松嶋やをしまの蜑のぬれ衣とて

衣笠　慈鎮

六九二六 同 浦つたふ旅のあはれは松嶋や雄嶋の蜑の袖はりかは

頼政　同

六九三六 同 松嶋やかつきする蜑を尋てもしらぬる袖は色そかはれる

後鳥羽院　同

六九四六 名寄 松嶋や心ある蜑の浜ひさし浪の軒端に千鳥鳴也

同　経兼

六九五六 同 有明の月に夜舟を漕行は千鳥鳴なり松しまの浦

顕昭 25ウ

六九六　同　ふみ分て渡りもやらす紫の藤波かゝる松しまの橋　忠敏
六九七　月清　松嶋や秋風寒き磯ねかな海士のかる藻をひしき物にて　後景極
六九八　愚草　誰を見夜深き風に松嶋やをしまの千鳥声恨らん　定家
六九九　玉吟　あまの袖あらそひかねて松嶋や下紅葉する秋を悲しき　家隆
七〇〇　類聚千里　まて枝さしはす松嶋はいつれの木よりなり初けん　定衡
七〇一　建保百　松嶋やをしまの磯の蜑の袖いくと波にしほれきぬ覧　俊成
七〇二　同　あふまてと空行月を松嶋の浪より外に問ぬ袖かな　俊成女
七〇三　同　白波のしらすや君を松嶋に猶立帰りかくるこころを　定家
七〇四　同　思ひたつたよりもつらし松嶋やをしまの蜑の袖の塩風　行家
七〇五　同　くれは又いかに忍ほん松嶋やをしまのあまのまるの思ひを　康光
七〇六　夫木　松嶋にかゝれる浪のしからみとみゆるは藤の盛せけり　上西門
七〇七　同　更る夜を心ひとつに恨つゝ松嶋の蜑のもしほ火　定家26オ

離嶋　陸奥

七〇八　家集　まる浪の数をそしらす成にけり離嶋のまもかけれとも　兼盛
七〇九　同　白波のまかきの嶋に立よれは蜑こそつねに誰とかむれ　重之
七一〇　同　いつみにもあらぬ離の嶋ちかみ浪の越つゝもるとこそきけ　源順
七一一　六百　へたてける離か嶋のわりなさに住かひなしやちかの塩かま　顕昭
七一二　名寄　長月の菊の白露渕となしはまかきか嶋は外にもとめし　公朝
七一三　玉吟　心から離の嶋のまつとたに都につけよ塩かまの月　家隆
七一四　同　卯花の咲るまかきの嶋人の衣にほすか船よせてみん　同
七一五　夫木　春くれは離の嶋にかけてほす霞の衣ぬや誰なる　俊恵
七一六　同　うしろあた末の松山かならん離の嶋を越る藤浪　法師
七一七　同　幾入か染てかくらん色めてぬまかきの嶋をさしの藤波　能宣
七一八　同　秋は猶立そふ浪とみゆるかな離か嶋八白菊の花　輔親26ウ
　　覚盛

真野　萱原　同

七一九　同　塩竈のまかきか嶋のそなれ松浦こひしくも年古にけり　基雅
七二〇　同　蜑の住離か嶋のいさり火に色みえまかふ床夏の花　恵慶
七二一　同　松たくる離か嶋の名にそ聞かはらぬ色のくのたてほ　経平
七二二　同　陸奥のまかき渡りはをしなへてわか刈にと蜑も行かふ　師氏
七二三　同　春風に波や折けん陸奥のまかきの嶋の梅の花かひ　俊頼
七二四　新六　蜑の住離か嶋の浪の間に塩やき衣かけてほしつゝ　知家
七二五　草庵多　霧のまかきの嶋や是ならん波にそ晴ぬ塩かまの浦　頓阿
七二六　玉計集　卯花と波やみゆらん時鳥まかきか嶋にきつゝ鳴也　忠度
七二七　万三　陸奥のまのこかや原遠けれと俤にしてみゆといふ物を　箕安郎27オ
七二八　玉吟　けふは又真野の萱原分くらし都に遠き嵐ふくなり　家隆
七二九　類聚　夜もすがらまの萱原風寒て泡の汀に氷しにけり　俊頼
七三〇　家集　心えつまのこかや原ふみかしくるも験のなき身也けり　同
七三一　新六　霧深き真野の萱原俤にほのみしよりそ身をほはなれぬ　衣笠
七三二　玉計　をもひかす尾花か波のかけ鶉立もとまるまの萱原　実時

松貫浦嶋　陸奥

七三三　拾玉　蜑の子も千世へぬへしと思ふ覧陰にかくる松か浦しま　慈鎮
七三四　同　心ありて物語せん海士もかな船漕とめん松か浦嶋　同
七三五　玉吟　思ひ侘松か浦嶋尋みん心あら蜑やなくさむるとて　家隆
七三六　千五百　浪の音も風のひゝきもさしなかと幾代に成ぬ松か浦嶋　三宮
七三七　新六　いかにして部のつとにつゝみて妹にもみせん松か浦嶋　衣笠
七三八　御集　春霞たてるやいつこ朝日影さし行舟を松か浦嶋　後鳥羽院27ウ
七三九　方与　心ある蜑や植けん春毎に藤咲かゝる松か浦しま　後嵯峨院

七四〇六夫木　頼めをく人や有けん浪風に衣うつなる松かうら嶋
七四一六同　住鶴も千代にもよもや重ぬ覧若ねに生る松か浦しま　俊成
七四二六同　塩たるる蓑にその名をまかへてや住はしめけん松か浦嶋　帯刀入道
七四三六同　夏かりの荻の古枝のさびしさにいとこ恋しき松か浦嶋　井入道
七四四六貞永　もしほ焼心ある海士の夕煙月にはたてす松かうら嶋　公朝
七四五六草庵　月見ても絶ぬ烟ほ心あるあまともいはし松か嶋しま　為家

松田江浜　越中　万葉長歌ニ見タリ

七四六六万十七　松田江の浜行くしつなしるひみの礼過てたこかうら
七四七六同　まつたえの長浜過てうなひ川清き瀬ことにうかはたちかゆきやくゆきみつれとも　家持

増井　丹波　類字

七四八六風雅　涼しさをます井の清水結ふ手に先通ひくる万代の秋　下野
七四九類聚　君か代にあふ嬉しさは大江山ます井の水の絶しと思へは　順阿

真那辺　備前

まなへと申嶋に京よりあき人とものくたりて
やうくしのつみの物ともあきなひて又しほくの
嶋にわたりてあきなはんするよし申けるを聞て

七五〇六出典集　備中　類字

七五一六新古常磐なる松井の水を結ふ手の雫毎にそ千世はめくける　資実
七五二六夫木　結上る松井の水は底澄て移るは君か千代のかけかも　茂明

松山　同　類字　讃岐ニ在同名

永和元年大嘗会主基方屏風備中国松山

七五三六新続古十　帰りの花咲ぬしし松山の梢を高みつもるしら雪　忠光

正木山　同　蓮塩

七五四六夫木　まさき山さかきのかつら紅葉して時雨も時をたかさりけり　資実
七五五同　時雨つる正木の山のさかひより みゆる紅葉の色のてらさ　隆博

松原山　同　類字

七五六六風雅　村雨の半はれ行雲霧に秋の日うすき松原の山　家持
七五七六風雅　軒ちかき松原山の秋風に夕くれきまく見出にけり　家持
七五八六名寄　色かへぬ松原山の陰よりもしけきは君かめくみせけり　28オ

麻里布浦　周防　勅撰名所集ニ当国玖珂郡

七五九六万十五　真楫ぬき船し行すはみれとあかぬまりふの浦に宿りせましを　無名
七六〇六同　大船に楫ふりたて浜清きまりふの浦に宿りせまし　同
七六一六同　妹か家路ちかく有せはみれと飽ぬまりふの浦をみせまし物を　同
七六二夫木　浜清きまりふの浦の塩風に浪こそあかれ数もしられす　光俊

麻利岡　長門　万葉集ニ当国

七六三六万　まりの岡何をかうりと思ふらんかたうつ波の音はかりして　読人不知
七六四六名寄　秋風の吹上の浜のまさこ山外には見ける月の影かは　紀伊　名寄ニ当国

真砂山　紀伊　類字

七六五六万　一朝もまひ木人ともしも待ち山行くとみらん木人ともしも　29ウ

待乳山　讃岐　後海

七六六　同　四　朝もよひ木道に人たちまつち山越らん君は紅葉ゝの　金村
七六七　同　七　白妙に匂ふまつちの山川に我馬なつむ家ふしも　藤原卿
七六八　同　九　朝もよひ木へ行君がまつち山越しんけふそ雨は降そね　俊人
七六九　同十二　つるはみの衣とき洗ひ待ち山もとつ人には猫しかすけり　無名
七七〇　同　いてあか駒はやくゆかんよ待乳山待覧妹を行てはやみん　慈鎮
七七一　堀後偽の契はかりをまつち山待らんとたに君はしらしな　走賴
七七二　御集いかにせんまつちの山の女郎花人とはねは露にしほれつ　光成
七七三　新葉咲やらぬ花を待ちの山の端に雲にかくれまかへてもみん　行能
七七四　丈木　徒にたのめしくや待乳山秋を忘れぬ女郎花かな
七七五　同　有明の空たのめなる妻ふと待ちの山に小鹿鳴らん

松帆浦　淡路　類寺

七七六　万六　あほちなる松ほの浦に朝なきに玉藻かりつゝ夕なきに　金村
七七七　新勅来ぬ人を松ほの浦の夕なきに焼やもしほの身もこがれつゝ　後崎院
七七八　丈木　淡路嶋松ほの浦にやく塩のかしくも人を恋ゝ比かな　為家

麻都我浦　同　類寺

七八六　万十四　まつの浦にさわ名浦たちまひとことおもはずなもろねはほのすも　無名
七八七　拾玉　四方の海や霞長閑きまつか浦の春のみなとに春風そ吹　慈鎮
七八八　後拾　松山のまつの浦風吹よせはひろひて忍恋わすれ貝　走賴
七八九　同返　したぬよりしほれもあへぬ衣手にたきなかけそ松か浦浪　光成
七九〇　玉葉　松か浦のとまりの磯と聞物を名にもさはらす帰る波かな　行能

斑嶋　肥前　藻塩

七九一　名寄　海士のかるみるめの浦に白雪のまだら嶋にや降かる覧　為家

松浦　川海　山海　潟沖　路浦　肥前　類寺

七九二　万五　まつら川河のせひかり鮎つるとだせる妹かものすそぬれぬ　遠つ人
七九三　同　遠つ人松浦の河に若ゆつる妹か袂を我そまかめ　金村
七九四　同　若ゆつる松浦の河の川波のなみにしもは我恋めやも　定家
七九五　同　松浦河せ瀬の淀はよとむとも我はよとます君をし待ん　為家
七九六　同　君を待松浦の浦の乙女らは常世の国の海士をとめかも
七九七　同　百日しもゆかぬ松浦路けふ行てあすはきなんを何かさやれる
七九八　同　海原の沖行舟を帰れとかひれふらしけん松浦さよ姫　西行
七九九　同　音にきこめにはいまだみすさよ姫かひれふりさけふ君松浦山　同
八〇〇　同十五　たらし姫御船はてけん松浦の海妹か待へき月はへにつゝ　家隆
八〇一　六百　松浦河せ瀬の淀をうかひ船くたしも果て明ぬ此夜は　家隆
八〇二　同　いつかさは又は逢瀬をまつら潟此河上に我はすむとも　紫式部院
八〇三　拾玉　都にもひれ振袖は有物を思ふなまそに松浦さよ姫　忠好
八〇四　同　哀さやもろこしまてもゆ覧まつらの浦の旅の曙　宗良
八〇五　名寄　郭公もろこしまてや松浦山浪のほかの雲に鳴らん　運春
八〇六　同　今も猶松浦の海に見渡せはほや遠さかる舟出かなしも　同
八〇七　同　娘等
八〇八　同　仙媛
八〇九　同　後人
八一〇　同　三嶋王
八一一　無名
八一二　権大夫
八一三　定家
八一四　慈鎮
八一五　同
八一六　靫負
八一七　建礼門院

八〇七六 同　秋といへは月をや鹿の松浦潟恨わひぬる夕暮の声　雅経
八〇八六 月清ぬしもなき霞の袖をよそに見て松浦の沖を出る船人　後京極
八〇九六 同　古郷を命あらはと松浦潟かへる人をし夕やみの空　同
八一〇六 愚草命たにあしはあふ瀬をまつ川帰らぬ波もよもぎもとそ思　定家
八一一六 玉吟頼めてもまた遠海に松浦山秋もやきなん天川浪　家隆
八一二六 御集朝霞もろしかけて立ぬらし松浦か沖の春の明ほの　後鳥羽院 32オ
八一三六 御集松浦潟波にちかつく冬の夜の月なへたてそ八重の塩風　後鳥羽院
八一四六 夫木春霞松浦の山はよきてたてゆくてにもみん妹か袖ふり　経家
八一五六 同　松浦潟明る霞に行雁のつはさの波に春風そ吹　円伏
八一六六 同　松浦河あゆとるせゝも水清み濁らぬ末に早苗とる也　行家
八一七六 同　浪風に秋をまつしの山の蟬そめぬ梢の露に鳴なり　後成女
八一八六 同　夏山やまつしか沖の西の海そなたの風に秋はみえつゝ　順徳院
八一九六 同　唐人の頼めし秋は過ぬとも松浦か沖に雲なへたてそ　如願

間〜浜　豊前　勅撰名所集二ノ国

八二〇六 万七　豊国のまの浜へのまなこ地の真直にあらは何か歎かん　未勘

離山

八二一六 名寄八重葎まかきの山の夕暮に夜は越しと松虫そ鳴　家隆
八二二六 同　夕暮の離の山や是ならん月をへたて鹿そ鳴なる　持
八二三六 題林色かはるまかきの山に鹿鳴て此比かなし更る夜の月　良教
八二四六 夫木越やらぬ心そしるき夕くれの離の山の花の下かけ　隆朝
八二五六 同　あさかはの咲し離の山桜是ほ夕へにあはぬ日もなし　耀清
八二六六 同　夕暮のまかきの山に妻こめて猶立とまる棹鹿の声　後九条
八二七六 同　宿りしてあすも又見ん夕霧のまかきの山ほ色付にけり　為相
八二八六 同　菊のうへの露ふく風はやすらひて離の山をほろ月影　光俊
八二九六 藻塩中〳〵に君にひすはまきの浦の蜑ならましを玉も川つゝ　為家

槙浦　同

八三〇六 金葉高根には雪降ぬらし真柴河岸のかけ草なひすかれり　同

真柴河　同

巻来山　岡　未勘

八三一六 万十妹か袖まきゝの山の朝露に匂ふ紅葉のもらまくおしも　長朝 33オ
八三二六 玉吟日数ゆく露はさなから衣手にまきゝの山は秋もうらめし　無名
八三三六 名寄妹か袖まきゝの山を紅にちしほふり出雨やそむらん　家隆
八三四六 夫木尋ぬへき人こそなけれみ山なる巻来の岡に雪は降つゝ　長方
八三五六 万十四　まとほくの雲ねにみゆる妹かへにいつかいたらんあゆめあか駒　衣笠
八三六六 同　まとほくの野にもあはなん心なく里の水上あへなせなかも　同

麻等保久野　同

真若浦　同

八三七六 万十二衣手のまわかの浦の真砂地の間なし時なしわかこふらくは　無名 33ウ
八三八六 夫木松に吹塩風寒み衣手の真若の浦をきてみつる哉　光俊

真津間浦　同

八三九六 家集思ひ出よ千代の子日の春毎にまつまの浦の岸の姫松　元輔

真木戸河　同

八四〇六 夫木神くやはまのみそきに出つらんまきのと川の音ゝ涼しき　家隆

松村里　同　一説松原里

八四一六　夫木春秋はおほく積れる年もへてときはに久ゆる松村〻里
八四二六　同　君が為ひと木に千世を契つ行末遠き松はしの里

松浜　同

八四三六　夫木日をふれは松のはまへにある舟の千年を見んと出ぬなるへし

真礼賀浦　未勘

八四四六　名寄逢事はまれかの浦にあさりする蜑もさの久やくめもるへき

盎神山　同

八四五六　夫木つ〻さの久ますの神山しめかけていかに祈し験成らん

真野里　同

八四六六　夫木君かためまの〻里く打むれてとる若苗や万代のかす

松谷　同

八四七六　夫木まつ谷の風いかはかりいたむらん夜半の烟の心ほそさを

毛無岡　大和　藻塩

八四八六　万八神なひの岩瀬の杜の郭公けなしの岡にいつか来鳴ん

狭布　郡渡　陸奥

八四九六　六帖　みちのくのけふのさぬのこほとせはゆきた脚あはぬ恋もする哉
八五〇六　同　大空に渡る千島の我ならはけふの渡りをいかに鳴まし
八五一六　堀百いしふみやけふのせは布はつ〻に逢ゆても猶あかぬ君哉
八五二六　新大陸奥のけふの郡にもる布のせはしき世にもあひにける哉
八五三六　夫木思へたけふのさぬの麻衣さてもあひ久ぬむぬくるしさ
八五四六　同　錦木のもつかの数もけふ久もてけふの細布胸やあふへき
八五五六　題林陸奥のけふの細布たか世にかつしきためしに織初けん

飼飯海　浦　越前　勅撰名所集二　敦賀郡　読人不知　肥後

八五六六　万三けひの海のにはもくあらしかりこもの乱てを久ゆ蜑の釣舟　人丸35オ
八五七六　万十二けひの浦にすする日波しく〻に妹か姿はおもほゆるかも　無名
元真34オ

気比古宮　越中　藻塩　後頼

八五八六　万代山をきるつるきの類に残し置てふゆまかひけりけひの古宮

烟河　里　丹波　藻塩

八五九六　藻塩　にきはへる民のやまとや遠からしけふりの川の名にたてる波
八六〇六　夫木恋しきを思ひやるとせしかともいとゝ烟の里にゝそふれ　読人不知

気色森　大隅　類字

八六一六　帖　誰為につゝき心は大隅のけしきの杜のさもしろき哉　人丸
八六二六　拾五二　つくしなる気色の杜をきてみれは都のともの心も社せぬ　慈鎮
八六三六　月清　下草に露をきそへて秋のくる気色の森の蜩ゝこゑ　後素極
八六四六　千五百　けふよりは秋の気色の杜なれはやはて耳にしむ山風の風　良平35ウ

八六五六　同　冬ぬる気色の杜の村時雨染し木葉を久さそひけり　三官
八六六六　同　冬の色をけしきの杜に顕して埋れはつる雪の下草　公継
八六七六　夫木春のくる気色の森の下蕨おりしいるとや萌渡る覧　小舟
八六八六　同　明渡るけしきの杜にたつ鶯のうはけも深く雪は降つゝ　順徳院
八六九六　古今集中〻に木葉かくれけ哀なり秋のけしきの杜の月影　中務
八七〇六　新葉　鳴ぬき気色の森の村雨に忍ひもあへぬ郭公かな　妙光寺
八七一六　千首　月にほふ気色の杜の時鳥いかにつれなき音をもおしまし　為尹

気色浜　未勘

八七二六　夫木かはり行けしきの浜の夕烟たか深さえにゝ霞むらん　後九条

志賀皇子34ウ

気美浦　　同

八七三六　名寄心さし君にふかくはけみの浦にはちすの花し開けさとめや

36オ

松葉名所和歌集第九終

36ウ